

「此のくらなる事が……何の……小兒のうち歌留多を取りに行つたと思へば——」
越前の府、武生の、侘しい旅宿の、雪に埋れた軒を離れて、二町ばかりも進んだ時、吹雪に行
惱みながら、私は——然う思ひました。
思ひつゝ、推切つて行くのであります。
私は此處から四十里餘り隔たつた、おなじ雪深い國に生れたので、恚うした夜道を、十町や十
五町歩くのは何でもないと思つたのであります。
が、其の凄じさと言つたら、まるで眞白な、冷い、粉の波を泳ぐやうで、風は荒海に齊しく、
ぐわうぐわうと呻つて、地——と云つても五六尺積つた雪を、押揺つて狂ふのです。
「あの時分は、脇の下に羽でも生えて居たんだらう。屹と然うに違ひない。身輕に雪の上へ乗つ
て飛べるやうに。」
……でなくつては、と呼吸も吐けない中で思ひました。

九歳十歳ばかりの其の小兒は、雪下駄、竹草履、それは雪の凍てた時、こんな晩には、柄にも
ない高足駄さへ穿いて居たのに、轉びもしないで、然も遊びに更けた正月の夜の十二時過ぎなど、
近所の友だちにも別れると、唯一人で、白い社の廣い境内も抜ければ、邸町の白い長い土塀も通
る。……ザツツ、ぐわうと鳴つて、川波、山嵐とともに吹いて來ると、ぐるぐると廻る車輪の如
き濃く黒ずんだ雪の渦に、くるくると舞ひながら、ふはくと濟まアして内へ歸つた——夢では
ない。が、あれは雪に靈があつて、小兒を可愛がつて、連れて歸つたのであらうも知れない。

「あゝ、酷いぞ。」

ハツと呼吸を引く。目口に吹込む粉雪に、ばツと背を向けて、そのたびに、風と反對の方へ眞
俯向けに成つて防ぐのであります。恚う言ふ時は、其の粉雪を、地ぐるみ煽立てますので、下か
らも吹上げ、左右からも吹捲くつて、よく言ふことですけれども、面の向けやうがないのです。

小兒の足駄を思ひ出した頃は、實は最う穿ものなんぞ、疾の以前になかつたのです。

しかし、御安心下さい。——雪の中を跣足で歩行く事は、都會の坊ちゃんや嬢さんが吃驚なさ
るやうな、冷いものでないだけは取柄です。ズボリと踏込んだ一息の間は、冷さ骨髓に徹するの
ですが、勢よく歩行して居るうちには、濫く成ります、ほか／＼するくらゐです。

やがて、六七町潜つて出ました。

まだ此の間は氣丈夫でありました。町の中ですから兩側に家が續いて居ります。此の邊は水の綺麗な處で、軒下の兩側を、清い波を打つた小川が流れて居ます。尤も其れなんぞ見えるやうな容易い積り方ぢやありません。

御存じの方は、武生と言へば、あゝ、水のきれいな處かと言はれます——此の水が鐘を鍛へるのに適するさうで、釜、鍋、庵丁、一切の名産——其の昔は、聞えた刀鍛冶も住みました。今も鍛冶屋が軒を並べて、其の中に、柳とともに目立つのは旅館であります。

が、最う目貫の町は過ぎた、次第に場末、町端れの——と言ふとすぐに大なる山、峻い坂に成ります——あたりで。……此の町を離れて、鎮守の宮を抜けますと、いま行かうとする、志す處へ着く筈なのです。

それは、——其許は——自分の口から申兼ねる次第でありますけれども、私の大恩人——いえいえ恩人で、そして、夢にも忘れられない美しい人の侘住居なのであります。

侘住居と申します——以前は、北國に於ても、旅館の設備に於ては、第一と世に知られた此の武生の中でも、其の隨一の旅館の娘で、二十六の年に、其の頃の近國の知事の妾に成りました……妾とこそ言へ、情深く、優しいのを、昔の國主の貴婦人、簾中のやうに稱へられたのが名にし

おふ中の河内の山裾なる虎杖の里に、寂しく山家住居をして居るのですから。此の大雪の中に。

二

流る、水とともに、武生は女のうつくしい處だと、昔から人が言ふのであります。就中、蔦屋

——其の旅館の——お米さん(恩人の名です)と言へば、國々評判なのであります。

まだ汽車の通じない時分の事。……

「昨夜は何方でお泊り。」

「武生でございます。」

「蔦屋ですな、綺麗な娘さんが居ます。勿論、御覽でせう。」

旅は道連れ、立場でも、又並木でも、言を掛合ふ中には、屹と此の事がなければ納まらなかつ

たほどであつたのです。

往來に馴れて、幾度も蔦屋の客と成つて、心得顔をしたものは、お米さんの事を渾名して、む

つの花、むつの花、と言ひました。——色と言ひ、また雪の越路の雪ほどに、世に知られたと申

す意味ではないので——此は後言であつたのです。……不具だと言ふのです。六本指、手の小指

が左に二つあると、見て来たやうな噂をしました。何故か、——地方は分けて結婚期が早いのに

——二十六七まで縁に着かないで居たからです。

(しかし、……やがて知事の妾に成つた事は前に一寸申しました。)

私はよく知つて居ます——六本指なぞと、氣もない事です。確に見ました。しかも其の雪なす指は、摩耶夫人が召す白い細い花の手袋のやうに、正に五瓣で、其が九死一生だつた私の額に密と乗り、軽く胸に掛つたのを、運命の星を算へる如く熟と視たのでありますから。——

また其の手で、硝子杯の白雪に、鶏卵の蛋黄を溶かしたのを、甘露を灌ぐやうに飲まされまし

た。

「ために私は蘇返りました。

「冷水を下さい。」

最う、それが末期だと思つて、水を飲んだ時だつたのです。

脚氣を煩つて、衝心をかけて居たのです。其のために東京から故郷に歸る途中だつたのであります。汚れくさつた白緋を一枚きて、頭陀袋のやうな革靴一つ掛けたのを、玄關さきで斷られる處を、泊めてくれたのも、螢と紫陽花が見透しの背戸に涼んで居た、其のお米さんの振向いた瞳の情だつたのです。

水と言へば、せいゝ米の磨汁でもくれさうな處を、白雪に蛋黄の情——萌黄の蚊帳、紅の

麻、……蚊の酷い處ですが、お米さんの出入りには、はら／＼と螢が添つて、手を映し、指環を映し、胸の乳房を透して、浴衣の染の秋草は、女郎花を黄に、萩を紫に、色あるまでに、蚊帳へ影を宿しました。

「まあ、汗びつしより。」

と汚い病苦の冷汗に……そよ／＼と風を惠まれた、浅葱色の水團扇に、幽に月が映しました。

……

大恩と申すは此なのです。

おなじ年、冬のはじめ、霜に緋葉の散る道を、爽に故郷から引返して、再び上京したのであります。福井までには及びませんが、私の故郷からは其から七里さきの、丸岡の建場に俤が休んだ時立合せた上下の旅客の口々から、もうお米さんの風説を聞きました。

知事の妾と成つて、家を出たのは、其の秋だつたのであります。

こ、はお察しを願ひます。——心易くは禮手紙、たゞ音信さへ出来ませぬ。

十六七年を過ぎました。——唯今の鯖江、鯖波、今庄の驛が、例の音に聞えた、中の河内、木の芽峠、湯の尾峠を、前後左右に、高く深く貫くのであります。汽車は雲の上を馳ります。間の宿で、世事の用は聊かもなかつたのであります。可懐の餘り、途中で武生へ立寄りまし

た。
内證で……何となく顔を見られますやうで、ですから内證で、其の蔦屋へ参りました。
臯月上旬でありました。

三

門、背戸の清き流、軒に高き二本柳——其の青柳の葉の繁茂——こゝにイミ、あの背戸に團扇を持つた、其の姿が思はれます。それは昔のまゝだつたが、一棟、西洋館が別に立ち、帳場も卓子を置いた受附に成つて、蔦屋の様子はかはつて居ました。

代替りに成つたのです。

少しばかり、女中に心づけも出来ましたので、それとなく、お米さんの消息を聞きますと、蔦屋も蔦龍館と成つた發展で、持の此の女中などは、京の津から来て居るのださうで、少しも恩人の事を知りません。

番頭を呼んでもらつて訊ねますと、——勿論其の頃の男ではなかつたが——此はよく知つて居ました。

蔦屋は、若主人——お米さんの兄——が相場にかゝつて退轉をしたさうです。お米さんにまけ

ない美人をと言つて、若主人は、祇園の藝妓をひかして女房にして居たさうであります。それも亡くなりました。

知事——其の三年前に亡く成つた事は、私も新聞で知つて居たのです——其のいくらか手當が残つたのだらうと思はれます。當時は町を離れた虎杖の里に、兄妹がくらしして、若主人の方は、町中の或會社へ勤めて居ると、此の由、番頭が話してくれました。一昨年の事なのです。

——いま私は、可恐い吹雪の中を、其處へ志して居るのであります——

が、さて、一昨年の其の時は、翌日、半日、いや、午後三時頃まで、用もないのに、女中たちの蔭で怪む氣勢のするのが思ひ取られるまで、腕組が、肘枕で、やがて、夜具を引被つてまで且つ思ひ、且つ悩み、幾度か逡巡した最後に、旅館をふらふと成つて、たうとう恩人を訪ねに出ました。

故と途中、餘所で聞いて、虎杖村に憧憬れ行く。……
道は鎮守がめあてでした。

白い、静な、曇つた日に、山吹も色が浅い、小流に、苔蒸した石の橋が架つて、其の奥に大きな石の鳥居の左に、就中暗く聳えた杉の下に、形はつい通りであります。雪難之碑と刻んだ、

一基の石碑が見えました。

雪の難——荷擔夫、郵便配達の人たち、其の昔は數多の旅客も——此からさしか、つて越えようとする峠路で、屢々命を殞したのでありますから、いづれ其の靈を祭つたのであらう、と大空の雲、重なる山、續く巔、聳ゆる峰を見るにつけて、凄じき大濤の雪の風情を思ひながら、旅の心も身に沁みて通過ぎました。

噉道少しばかり、茶種の畦を入つた處に、志す庵が見えました。侘しい一軒家の平屋ですが、門のかゝりに何となく、むかしの狀を偲ばせます、萱葺の屋根ではありません。

伸上る背戸に、柳が霞んで、こゝにも細流に山吹の影の映るのが、繪に描いた螢の光を幻に見るやうでありました。

夢にばかり、現にばかり、十幾年。

不思議にこゝで逢ひました——面影は、黒髪に笄して、雪の襦袢した貴夫人のやうに遙に思つたのとは全然違ひました。黒緇子の襟のかゝつた縞の小袖に、些とすき切れのあるばかり、空色の絹のおなじ襟のかゝつた筒袖を、帯も見えないくらゐ引合せて、細りと着て居ました。

其の姿で手をつきました。あゝ、うつくしい白い指、結立ての品のいゝ圓髻の、情らしい柔順な髻の耳朶かけて、雪なす項が優しく清らかに俯向いたのです。

生意氣に杖を持つて立つて居るのが、目くるめくばかりに思はれました。

「私は……關……」

と名を申して、

「蔦屋さんのお嬢さんに、お目にかゝりたくて参りました。」

「米は私でございます。」

と顔を上げて、清しい目で熟と視ました。

私の額は汗ばんだ。——あのいつか額に置かれた、手の影ばかり白く映る。

「まあ、關さん。——おとなにお成りなさいました……」

此ですもの、可懷さはどんなでせう。

しかし、こゝで私は初戀、片おもひ、戀の愚癡を言ふのではありません。

……此の凄い吹雪の夜、不思議な事に出あひました、其のお話をするのであります。

四

その時は、四疊半ではありません。が、爐を切つた茶の室に通されました。時に、先客が一人ありまして爐の右に居ました。氣高いばかり品のいゝ年とつた尼さんです。

失禮ながら、此の先客は邪魔でした。それがために、いとゞ拙い口の、千の一つも、何にも、ものが言はれなかつたのであります。

「貴女は煙草をあげますか。」

私はお米さんが、其の筒袖の優しい手で、煙管を持つのを視て然う言ひました。

お米さんは、控へて一寸俯向きしました。

「何事もわすれ草と申しますな。」

と尼さんが、能の面がものを言ふやうに言ひました。

「關さんは、今年三十五にお成りですか。」

とお米さんが先へ數へて、私の年を訊ねました。

「三碧なう。」

と尼さんが言ひました。

「貴女は？」

「私は一つ上……。」

「四緑なう。」

と尼さんが又言ひました。

——略して申すのですが、其處へ案内もなく、づか／＼と入つて来て、立狀に一寸私を尻目にかけて、爐の左の座についた一人があります——山伏か、隠者か、と思ふ風采で、ものの鷹揚な、悪く言へば傲慢な、下手が畫に描いた、奥州めぐりの水戸の黄門と言つた、鼻の隆い、髯の白い、早や七十ばかりの老人でした。

「此は關さんか。」

と、いきなり言ひます。私は吃驚しました。

お米さんが、しなよく頷きますと、

「左様か。」

と言つて、此から滔々と辯じ出した。其の辯ずるのが都會に於ける私ども、なかま、なかまと申して私などは、ものの數でもないのですが、立派な、畫の畫伯方の名を呼んで、片端から、奴がと苦り、彼め、と蔑み、小僧、と呵々と笑ひます。

私は五六尺飛退つて叩頭をしました。

「汽車の時間がございますから。」

お米さんが、送つて出ました。花茶の中を半の時、私は香に咽んで、涙ぐんだ聲して、

「お寂しくおいでなさいませう。」

と精一杯に言つたのです。

「いゝえ、兄が一緒ですから……でも大雪の夜などは、町から道が絶えますと、こゝに私一人きりで、五日も六日も暮しますよ。」

とほろりとしました。

「其のかはり夏は涼しいございます。避暑に行らつしやい……お宿をしますよ。……其の時分に、降るやうに螢が飛んで、此の水には菖蒲が咲きます。」

夜汽車の火の粉が、木の芽峠を螢に飛んで、窓には其の菖蒲が咲いたのです——夢のやうです。

……あの老尼は、お米さんの守護神——はてな、老人は、——知事の怨霊ではなかつたか。

そんな事まで思ひました。

圓鬘に結つて、筒袖を着た人を、しかし、其二人は却つて、お米さんを秘密の霞に包みました。三十路を越えても、寝れても、今も其美しさ。片田舎の虎杖になぞ世にある人とは思はれませんでした。

ために、音信を怠りました。夢に所がきをするやうですから。……とは言へ、一つは、日に増し、不思議に色の濃く成る爐の右左の人を憚つたのであります。

音信して、恩人に禮をいたすのに仔細はない筈。雖然、下世話にさへ言ひます。慈悲すれば、

何とかする。……で、恩人と言ふ、其の恩に乗じ、情に附入るやうな、賤しい、浅ましい、卑劣

な、下司な、無禮な思ひが、何うしても心を離れないものですから、ひとり、自ら憚られたので

ありました。

私は今、其處へ——

五

「あゝ、彼處が鎮守だ——」

吹雪の中の、雪道に、白く續いた其の宮を、さながら峰に築いたやうに、高く朦朧と仰ぎました。

「さあ、一息。」

が、其の息が吐けません。

眞俯向けに行く重い風の中を、背後からスツと軽く襲つて、裾、頭をどツと可恐いものが引包むと思ふと、ハツとひき息に成る時、さつと抜けて、目の前へ眞白な大なる輪の影が顯れます。とくるくると廻るのです。廻りながら輪を巻いて、巻きくく巻込めると見ると、忽ち凄じい渦に成

つて、ひゆうと鳴りながら、舞上つて飛んで行く。……行くと言や、續いて背後から巻いて來ます。それが次第に激しく成つて、六ツ四ツ數へて七ツ八ツ、身體の前後に列を作つて、巻いては飛び、巻いては飛びます。巖にも山にも碎けないで、皆北海の荒波の上へ馳るのです。——最う此の渦がこんなに捲くやうに成りましては堪へられません。此の渦の湧立つ處は、其の跡が穴に成つて、其處から雪の柱、雪の人、雪女、雪坊主、怪しい形がぼつと立ちます。立つて倒れるのが、其まゝ雪の丘のやうに成る……其が、右に成り、左に成り、横に積り、縦に敷きます。其の行く處、飛ぶ處へ、人のからだを持つて行つて、仰向けにも、俯向せにもたゞきつけるのです。——雪難之碑。——峰の尖つたやうな、其處の大木の杉の梢を、睫毛にのせて倒れました。私は雪に埋れて行く……身動きも出來ません。くひしばつても、閉ぢても、目口に浸む粉雪を、しかし紫陽花の青い花片を吸ふやうに思ひました。

——「菖蒲が咲きます。」——

螢が飛ぶ。

私はお米さんの、清く暖き膚を思ひながら、雪にむせんで叫びました。

「魔が妨げる、天狗の業だ——あの、尼さんか、怪しい隠士か。」

雪靈續記

機會がおのづから來ました。

今度の旅は、一體はじめは、仲仙道線で故郷へ着いて、其處で、一事を済したあとを、姫路行の汽車で東京へ歸らうとしたのでありました。——此列車は、米原で一體分身して、分れて東西へ馳ります。

其が大雪のために進行が續けられなくなつて、晩方武生驛(越前)へ留つたのです。強ひて一町場ぐるらは前進出来ない事はない。が、然うすると、深山の小驛ですから、旅舎にも食料にも、乗客に對する設備が不足で、危険であるからとの事でありました。

元來——歸途に此の線をたよつて東海道へ大廻りをしようとしたのは、……實は途中で決心が出来たら、武生へ降りて許されぬ事ながら、そこから虎杖の里に、もとの蔦屋(旅館)のお米さんを訪ねようと言ふ……見る／＼積る雪の中に、淡雪の消えるやうな、あだなのぞみがあつたのです。で其の望を煽るために、最う福井あたりから酒さへ飲んだのでありますが、酔ひもしなけ

れば、心も定らないのでありました。

唯一夜、徒らに、思出の武生の町に宿つても構はない。が、宿りつゝ、其處に虎杖の里を彼方に視て、心も足も運べない時の儂さには尙ほ堪へられまい、と思ひなやんで居ますうちに——

汽車は着きました。

目をつむつて、耳を壓へて、發車を待つのが、三分、五分、十分十五分——やゝ三十分過ぎて、やがて、驛員に其の不通の通達を聞いた時は!

雪が其まゝの待女郎に成つて、手を取つて導くやうで、まんじ巴の中空を渡る橋は、宛然に玉の棧橋かと思はれました。

人間は増長します。——積雪のために汽車が留つて難儀をすると言へば——旅籠は取らないで、すぐにお米さんの許へ、然うだ、行つて行けなさうな事はない、が、しかし……と、そんな事を思つて、早や壁も天井も雪の空のやうに成つた停車場に、しばらく考へて居ましたが、餘り不躑だと己を制して、矢張り一旦は宿に着く事にしましたのです。ですから、同列車の乗客の中で、停車場を離れたのは、多分私が一番あとだつたらうと思ひます。

大雪です。

「雪やこんい、」

霰やこんし。

大雪です——が、停車場前の茶店では、まだ小兒たちの、そんな聲が聞えて居ました。其の時は、山の根篋を吹くやうに、風もさらりと鳴りましたつけ。町へ入るまでに日もとつぷりと暮果てますと、

「爺さいのウ婆さいのウ、

綿雪小雪が降るわいのウ、

雨戸も小窓もしめさつし。」

と寂しい侘しい唄の聲——雪も、小兒が爺婆に化けました。——風も次第に、ぐわうくと樹ながら山を揺りました。

店屋さへ最う戸が閉る。……旅籠屋も門を閉しました。

家名も何も構はず、いま其家も閉めようとする一軒の旅籠屋へ駈込みましたのですから、場所は町の目貫の向へは遠いけれど、鎮守の方へは近かつたのです。

座敷は二階で、だつ広い、人氣の少ないさみしい家で、夕餉もさびしうございました。

若狭鯨——大すきですが、其が附木のやうに凍つて居ます——白子魚乾、切干大根の酢、椀はまた白子魚乾に、とろ、昆布の吸もの——しかし、何となく可憐くつて涙ぐまる、やうでした、

何故ですか。……

酒も呼んだが酔ひません。むかしの事を考へると、病苦を救はれたお米さんに對して、生意氣らしく恥かしい。

兩手を炬燵にさして、俯向いて居ました、濡れるやうに涙が出ます。

さつと言ふ吹雪であります。さつと吹くあとを、ぐわうと鳴る。……次第に家ごと揺るほどに成りましたのに、何と言ふ寂寞だか、あの、ひっそりと障子の鳴る音。カタカタ、白い魔が忍んで来る、雪入道が透見する。カタカタ、さーッ、さーッ、ぐわうくと吹くなかに——見るくうち障子の棧がパツパツと白く成ります、雨戸の隙へ鳥の嘴程吹込む雪です。

「大雪の降る夜など、町の路が絶えますと、三日も四日も私一人——」
三年以前に逢つた時、……お米さんが言つたのです。

「路の絶える。大雪の夜。」

お米さんが、あの虎杖の里の、此の吹雪に……

「……唯一人。」

私は決然として、身ごしらへをしたのであります。

「電報を——」

と言つて、旅宿を出ました。

實はなくなりました父が、其の危篤の時、東京から歸りますのに、(タダイマココマデキマシタ)と此の町から発信した……偶とそれを口實に——時間は遅くはありませんが、目口もあかない、此の吹雪に、何と言つて外へ出ようと、放火か強盗、人殺に疑はれはしまいかと危むまでに、さんざん思ひ惑つたあとです。

ころ柿のやうな髪を結つた霜げた女中が、雑炊でもするのでせう——土間で大釜の下を焚いて居ました。番頭は帳場に青い顔をして居ました。が、無論、自分たちが其の使に出ようとは怪我にも言はないのであります。

二

「何う成るのだらう……とにかくこれは尋常事ぢやない。」

私は幾度となく雪に轉び、風に倒れながら思つたのであります。

「天狗の爲す業だ、——魔の業だ。」

何しろ可恐い大な手が、白い指紋の大渦を巻いて居るのだと思ひました。

いのちとりの吹雪の中に——

最後に倒れたのは一つの雪の丘です。——然うは言つても、小高い場所に雪が積つたのではありません、粉雪の吹溜りがこんもりと積つたのを、哄と吹く風が根こそぎに其の吹く方へ吹飛ばして運ぶのであります。一つ二つの藪ではない。波の重るやうな、幾つも幾つもの、颯と吹いて、むら／＼と位置を亂して、八方へ高く成ります。

私は最う、それまでに、幾度も其の渦にくる／＼と巻かれて、大な水の輪に、子子蟲が引くりかへるやうな形で、取つては投げられ、擱んでは倒され、捲き上げては倒されました。

私は——白晝、北海の荒波の上で起る處の此の吹雪の渦を見た事があります。——一度は、たとへば、敦賀灣でありました——繪にかいた雨龍のぐる／＼と輪を巻いて、一條、ゆつたりと尾を下に垂れたやうな形のもが、降りしきり、吹煽つて空中に薄黒い列を造ります。

見て居るうちに、其の一つが、ぼつと消えるかと思ふと、忽ち、ぼつと、續いて同じ形が顯れます。消えるのではない、幽に見える若狭の岬へ矢の如く白く成つて飛ぶのです。一つ一つが皆な然うでした。——吹雪の渦は湧いては飛び、湧いては飛びます。

私の耳を打ち、鼻を振ちつゝ、いま、其の渦が乗つては飛び、掠めては走るんです。

大波に漂ふ小舟は、宙天に揺上らるゝ時は、唯波ばかり、白き黒き雲の一片をも見えず、奈落に

揉落さるゝ時は、海底の巖の根なる藻の、紅き碧きをさへ見ると言ひます。

風の一息死ぬ、眞空の一瞬時には、町も、屋根も、軒下の流も、其の屋根を壓して果しなく十重二十重に高く聳ち、遙に連る雪の山脈も、旅籠の炬燵も、釜も、釜の下なる火も、果は虎杖の家、お米さんの薄色の袖、紫陽花、紫の花も……お米さんの素足さへ、きつぱりと見えました。

が、脈を打つて吹雪が来ると、呼吸は咽んで、目は盲のやうに成るのでありました。

最早、最後かと思ふ時に、鎮守の社が目の前にあることに心着いたのであります。同時に峰の尖つたやうな眞白な杉の大木を見ました。

雪難之碑のある處——

天狗——魔の手など意識しましたのは、其の樹のせるかも知れませんが。たゞし此に目標が出来たためか、背に根が生えたやうに成つて、倒れて居る雪の丘の飛移るやうな思ひはなくなりまして。

洵は、兩側にまだ家のありました頃は、——中に旅籠も交つて居ます——一面識はなかつても、同じ汽車に乗つた人たちが、疎にも、それ／＼の二階に籠つて居るらしい、其れこそ親友が附添つて居るやうに、氣丈夫に頼母しかつたのであります。尤も其を心あてに、頼む。——助けて——助けて——と幾度か呼びました。けれども、窓一つ、ちらりと燈火の影の漏れて答ふる光もあり

りませんでした。聞える筈もありますまい。

いまは、唯お米さんと、間に千尺の雪を隔つるのみで、一人死を待つ……寧ろ目を瞑るばかりに成りました。

時に不思議なものを見ました——底なき雪の天空の、尙ほ其の上を、プスリと鑿で穿つて其の穴から落ちこぼれる……大きさは然うです……蠟燭の灯の少し大いほどな眞蒼な光が、ちら／＼と雪を染め、染めて、ちら／＼と染めながら、ツツと輝いて、其の古杉の梢に來て留りました。

其の青い火は、しかし私の魂が最う藻脱けて、虚空へ飛んで、倒に下の亡骸を覗いたのかも知れませんが。

が、其の影が映すと、半ば埋れた私の身體は、ぱつと紫陽花に包まれたやうに、青く、藍に、群青に成りました。

此の山の上なる峠の茶屋を思ひ出す——極暑、病氣のため、俾で越えて、故郷へ歸る道すがら、其の茶屋で休んだ時の事です。門も背戸も紫陽花で包まれて居ました。——私の顔の色も同じだつたらうと思ふ、手も青い。

何より、嫌な、可恐い雷が鳴つたのです。たゞさへ破れようとする心臓に、動悸は、破障子の煽るやうで、震へる手に飲む水の、水より前に無数の蚊が、目、口、鼻へ飛込んだのであります。

其の時の苦しき。——今も。

三

白い梢の青い火は、また中空の渦を映し出す——とぐるを巻き、尾を垂れて、海原のそれと同じです。いや、それよりも、峠で屋根に近かった、あの可恐い雲の峰に宛然であります。

此の上、雷。

大雷は雪國の、こんな時に起ります。

死力を籠めて、起上らうとすると、其の渦が、風で、ぐわうと巻いて、捲きながら亂る、と見れば、計知られぬ高さから颯と大瀧を揺落すやうに、泡沫とも、しぶきとも、粉とも、灰とも、針とも分かず、降埋める。

「あつ。」

私は又倒れました。

怪火に映る、其の大瀧の雪は、目の前なる、ツツンと重い、大な山の頂から一雪崩れに落ちて来るやうにも見ええました。

引控がれた。

苦痛の顔の、醜さを隠さうと、裏も表も同じ雪の、厚く、重い、外套の袖を被ると、また青い火の影に、紫陽花の花に包まれますやうで、且つ白羽二重の裏に薄萌黄がすつと透るやうでした。

ウオ、、、！

俄然として耳を噛んだのは、凄く可恐い、且つ力ある犬の聲でありました。

ウオ、、、！

虎の嘯くとよりは、龍の吟するが如き、凄烈悲壯な聲であります。

ウオ、、、！

三聲を續けて鳴いたと思ふと……雪をかついだ、太く逞しい、しかし瘦せた、一頭の和犬、むく犬の、耳の青竹をそいだやうに立ったのが、吹雪の瀧を、上の峰から、一直線に飛下りた如く思はれます。忽ち私の傍を近々と横ぎつて、左右に雪の白泡を、ざつと蹴立てて、恰も水雷艇の荒浪を切るが如く猛然として進みます。

あと、ものの一町ばかりは、眞白な一條の路が開けました。——雪の渦が十ヲばかりぐるぐると續いて行く。……

此を反對にすると、虎杖の方へ行くのであります。犬の其の進む方は、まるで違つた道でありました。が、私は夢中で、其のあとに續いたのであ

ります。

路は一面、渺々と白い野原に成りました。

が、大犬の勢は衰へません。——勿論、行くあとに道が開けます。渦が續いて行く……

野の中空を、雪の翼を縫つて、あの青い火が、蜿々と螢のやうに飛んで來ました。

真正面に、凹字形の大建ものが、眞白な大軍艦のやうに朦朧として顯れました。と見ると、

怪し火は、何と、ツツツと尾を曳きつゝ、先へ斜に飛んで、其の大屋根の高い棟なる避雷針の尖端に、ぱつと留つて、ちらりと青く輝きます。

ウオ、、、、

鐵づくりの門の柱の、やがて平地と同じに埋まつた眞中を、犬は山を乗るやうに入ります。私は坂を越すやうに續きました。

ドンと鳴つて、犬の頭突きに、扉が開いた。

餘りの嬉しさに、雪に一度手を支へて、鎮守の方を遙拜しつゝ、建ものの、戸を入りました。

學校——中學校です。

唯、犬は廊下を、何處へ行つたか分かりません。

途端に……

ざつ／＼と、あの續いた渦が、一ツづ、數萬の蛾の群つたやうな、一人の人の形になつて、縦隊一列に入つて來ました。雪で束ねたやうですが、いづれも演習行軍の装して、眞先なのは刀を取つて、ぴたりと胸にあてて居る。それが長靴を高く踏んでづかりと入る。あとから、背囊、荷銃したのを、一隊十七人まで數へました。

うろつく者には、傍目も觸らず、肅然として廊下を長く打つて、通つて、廣い講堂が、青白く

映つて開く、其處へ堂々が入つたのです。

「休め——」

……と聲する。

私は雪籠りの許を受けようとして、たど／＼と近づきましたが、扉のしまつた中の様子を、硝子窓越しに、ふと見て茫然と立ちました。

眞中の卓子を圍んで、入亂れつゝ、椅子に掛けて、背囊も解かず、銃を引つけたまゝ、大皿に装

つた、握飯、赤飯、煮染をてん／＼に取つて居ます。

頭を振り、足ぶみをするのなぞ見えませけれども、聲は籠つて聞えませんが、

——わあ——

と罵るか、笑ふか、一つ大聲が響いたと思ふと、あの長靴なのが、つか／＼と進んで、半月形

の講壇に上つて、ツと身を一方に開くと、一人、眞すぐに進んで、正面の黑板へ白墨を手にして、何事をか記すのです。——勿論、武裝のまゝでありました。

何にも、黑板へ顯れませんか。

續いて一人、また同じ事をしました。

が、何にも黑板へ顯れませんか。

十六人が十六人、同じやうなことをした。最後に、肩と頭と一團に成つたと思ふと——其の隊長と思ふのが、衝と面を背けました時——苛つやうに、自棄のやうに、てんぐくに、一齊に白墨を投げました。雪が群つて散るやうです。

「氣をつけ。」

つゝと驚が片翼を長く開いたやうに、壇をかけて列が整ふ。

「右向け、右——前へ！」

入口が背後にあるか、……吸はるゝやうに消えました。

と思ふと、忽然として、顯れて、むくと躍つて、卓子の眞中へ高く乗つた。雪を拂へば咽喉白くして、茶の斑なる、畑將軍の宛然犬獅子……

ウオ、、、！

肩を聳て、前脚をスクと立てて、耳が其の圓天井へ届くかとして、嚇と大口を開けて、まがみは遠く黑板に呼吸を吐いた——

黑板は一面眞白な雪に變りました。

此の猛犬は、——土地ではまだ、深山にかくれて生きて居る事を信ぜられて居ます——雪中行軍に擬して、中の河内を柳ヶ瀬へ抜けようとした冒険に、教授が二人、某中學生が十五人、無慙にも凍死をしたのでした。——七年前——

雪難之碑は其の記念ださうであります。

——其の時、豫て校庭に養はれて、嚮導に立つた犬の、恥ぢて自ら殺したとも言い、然らずと言ふのが——こゝに顯れたのでありました。

一行が遭難の日は、學校に例として、食饌を備へるさうです。丁度其の夜に當つたのです。が、同じ月、同じ夜の其の命日は、月が晴れても、附近の町は、宵から戸を閉ぢるさうです、眞白な十七人が縦横に町を通るからだと言ひます——後で此を聞きました。

私は眠るやうに、學校の廊下に倒れて居ました。

翌早朝、小使部屋の爐の焚火に救はれて蘇生つたのであります。が、いづれにも、然も、中にも恐縮をしましたのは、汽車の厄に逢つた一人として、驛員、殊に驛長さんの御立會に成つた事

銀
鼎

でありました。

汽車は寂しかった。

わが友なる——園が、自ら私に話した——其のお話をするのに、念のため時間表を繰つて見ると、奥州白河に着いたのは夜の十二時二十四分——

上野を立つたのが六時半である。

五月の上旬……とは言ふが、まだ梅雨には入らない。けれども、ともすると卯の花くだしと稱ふる長雨の降る頃を、分けて其年は陽氣が不順で、毎日じめじめと雨が續いた。然も其の日は、午前の中、爪皮の高足駄、外套、雫の垂る蛇目傘、聞くも濡々としたありさまで、(まだ四十には間があるのに、壯くして世を辭した)香川と云ふ或素封家の婿であつた、此も一人の友人の、谷中天王寺に於ける其の葬を送つたのである。

園は豫定のかへられない都合があつた。で、矢張り當日。志した奥州路に旅するのに、一旦引返して、はきものを替へて、洋杖と、唯一つバスケットを持つて出直したのであるが、俥で行く

途中も、袖はしめやかで、上野へ着いた時も、轆轤をトンと下されても、あの東京の式臺へ低い下駄では出られない。泥濘と言へば、まるで沼で、構内まで、どろろと流込んで、其處等一面の群集も薄暗く皆雨に悄れて居た。

「出口の方へ着けて見ませう。」

「然う、何うぞ然うしておくれ。」

さてやがて乗込むのに、硝子窓を横目で見ながら、例のぞろろと押揉んで行くのが、平常ほどは誰も元氣がなささうで、従つて然まで混雜もしない。列車は、おやと思ふほど何處までも長と列なつたが、此は後半部が桐生行に當てられたのであつた。

室はがらりと透いて、それでも七八人は乗組んだらう、女氣なし、縦にも横にも自由に居られる。

と思ふうちに、最う茶の外套を着たまゝ、ごろりと仰向けに成つた旅客があつた。

汽車は志す人をのせて、陸奥をさして下り行く——早や暮れかゝる日暮里のあたり、森の下闇に、遅櫻の散るかと思つたのは、夕靄の空が葉に刻まれてちらちらと映るのであつた。

田端で停車した時、園は立上つて、其の夕靄にぼつと包まれた、雨の中なる町の方に向つて、一寸會釋した。

更めてくどくは言ふまい。其處には、今日告別式を済した香川の家がある。と同時に一昨年の冬、衣繪さん、婿君のために若奥様であつた、美しい夫人がはかなくなつて居る……新佛は、夫人の三年目に、おなじ肺結核で死去したのであるが……

園は、實は其の人たちの、まだ結婚しない以前から衣繪さんを知つて居た……と言ふよりも知られて居たと言つて可からう。

園は従兄弟に、幸流の小鼓打がある。其の役者を通してである。が、興行の折の棧敷、又は従兄弟の住居で、顔も合はせれば、ものも言ひ交す、時々と言ふほどでもないが、ともに田端の家を訪れた事もあつて、人目に着くよりは親しかつた。

親しかつたうへに、お嬢さん……後の香川夫人は、園のつくる歌の愛人であつた。園は其の作家なのである。

「行つて参りますよ。」

と、其處で心で言つた。

汽車が出る。

がた／＼と揺れるので、よろけながら腰を据ゑた。

恁の如く、がらあきの席であるから、下へも置かず、席に取つた——旅に馴れないしるしには、

眞新しいのが見すばらしいバスケットの中に、——お嬢さん衣繪の頃の、彼に（おくりもの）が秘めてある。

二

今は記念と成つた。

友染の切に、白羽二重の裏をかさねて、紫の紐で口を縋つた、衣繪さんが手縫の袱紗袋に包んで、園に贈つた、白く輝く小鍋である。

彼は銀の鼎と言ふ……

組込の三脚に乗る錫の罐に、結晶した酒精の詰つたのが添つて、此は普通汽車中で湯を沸かす器である。

道中——旅行の憂慮は、むかしから水がはりだと言ふ。……それを、人が聞くと可笑いほど氣にするのであるから、行先々の停車場で賣る、お茶は沸いて居る、と言つても安心しない。用心を超越した臆病な處へ、渴くのは空腹にまさる切なさで、一つは其がためにもつい出億劫がるのが癖で。

銀 鼎

「……はる／＼奥の細道とさへ言ふ。奥州路などは分けて水が悪いに違ひない。ものを較べるの

は恐縮だけれど、むかし西行でも芭蕉でも、皆彼處では腹を疼めた——惟ふに、小兒の時から武者繪では誰もお馴染の、八幡太郎義家が、龍頭の兜、緋緘の鎧で、奥州合戦の時、弓杖で炎天の火を吐く巖を裂いて、玉なす清水をほとばしらせて、渴に喘ぐ一軍を救つたと言ふのは、蓋し名將の事だから、今の所謂軍事衛生を心得て、悪水を禁じた反對の意味に相違ない。」

と、今度の旅の前にも……私たちに眞面目に言つた。

何を、馬鹿な。

と平生から嘲るものは嘲るが、心優しい衣繪さんは、それでも氣の毒がつて、存分に沸して飲むやうにと言つた厚情なのである。

機會もなくつて、それから久しぶりの旅に、はじめてバスケットに納めたのである。

「さあ、来い、川も濁れ、水も淀め。」

と何か、美しい魔法で、水を澄せて従へさへ出来さうに、銀鍋の何となくバスケットの裡に透く光を、友染のつゝみにうけて、袖に月影を映すかと思ふ。それも、思へばしめやかであつた。

窓の外は雨が降る、降る。

雪駄、傘、下駄、足駄。

幸手、栗橋、古河、間々田……の昔の語呂合を思ひ出す。

武左な客には藝しやがこまる。

芝の浦にも名所がござる。

るなか 侍 茶店にあぐら。

死なざやむまい 三味線枕。

「鰻の井は賣切です。」

「ぢやあ辨當だ。」

小山は夜で暗かつた。

嘗て衣繪さんが、婿君とこゝを通つて、鰻を試みたと言ふのを聞いて居たので、園は、自分好きではないが、御飯だけと思つたのに、最う其は賣切れた……

「そら行け。」

どんと後で突く、

「がつたん〜。」

と挨拶する。こゝで列車が半分づゝに胴中から分れたのである。

又ずしんと響いた。

乗つて来るものは一人もなし、下りた客も居なかつたが、園は急に又寂しい氣がした。

行先は尙ほ暗い。

開くでもなしに、辨當を熟々視ると、彼處の、あの上包に描いた、ばら／＼蘆に濔標、小舟の舳にかんてらを灯して、頬被したお爺の漁る状を、ぼやりと一繪具淡く刷いて描いたのが、其のまゝ窓の外の景色に見える。

雨は小歇もない。

たゞ渺々として果もない暗夜の裡に、雨水の薄白いのが、鰻の腹のやうに蜿つて、淀んだ静な波が、どろ／＼と来て線路を浸して居さうにさへ思はれる。

ほたり／＼と落ちて、ずりりと硝子窓に流るゝ雫は、鱈の覗く氣勢である。

三

バスケットを引揚げて、底へ一寸手を當てて見た。雨氣が浸通つて、友染が濡れもしさうだつたからである。

そんな事は決してない。

が、小人数とは言へ、他に人がなかつたら、此の友染の袖をのせて、唯二人で眞暗の水に漾ふ思ひがしたらう。

宇都宮へ着いてさへ、船に乗つた心地がした。

改札口には、雨に灰色した薄ぼやけた旅客の形が、もや／＼と押重つたかと思ふと、宿引の手で、提灯に黒く成つて、停車場前の廣場に亂れて、筋を流す灯の中へ、しよぼ／＼と皆消えて行く。……其の中で、山高が突立ち、背廣が肩を張つたのは、皆同室の客で、こゝで圍と最う一人——上野を出ると其れ切寢たまゝの茶の外套氏ばかりを残して、盡く下車したのである。

まことに寂しい汽車であつた。

やがて大那須野の原の暗を、沈々として深く且つ大な穴へ沈むが如く過ぎて行く。

野川で鱈を突くのであらう。何處かで、かんでらの灯が一つ、ぼつと小さく赤かつた。灯は木に影を重ねたが、八重撫子の風情はない。……一つ家の鬼が通るらしい。

黒磯

左斜の其の茶の外套氏の盥にも黒氣が立つた。

燈も暗い。

野も山も、此の果しなき雨夜の中へ、ふと窓を開けて、此の銀の鍋を翳したら、きらりと半輪の月と成つて二三尺照らすであらう。……實際、ふと那樣な氣がしたのであつた。が、其は衣繪さんが生きて居て、翳すのに、其の袖口がほんのり燃えて、白い手の艶が添はねば不可ない……

自分が遣ると狐の尻尾だ。

と獨で苦笑する。其のうちに、何故か、バスケットを開けて、鍋を出して、窓へ衝と照して見たくてならない。指さきがむず痒い。

こんな時は魔が唆かして、狂人じみた業をさせて、此を奪はうとするのかも知れぬ。

園は悚然として、道祖神を心に念じた。

眞個、この暫時の間は希有であつた。

郡山まで行くと……宵がへりがして、汽車もパツと明く成つた。思ひ見る、盤梯山の煙は、雲を染めて、暗は尙ほ蓬々しけれど、大なる猪苗代の湖に映つて、遠く若松の都が窺はれて、其の底に、東山温泉の媚いた窓々の燈の紅を流すのが遙々と覗かれる。

園が會遊の地であつた。

バスケットの中も何となく賑かである。

と次第に遠い里へ、祭禮に誘はれるやうな氣がして、少しうとくとして、二本松と聞いては、其處の並木を、飛脚が通つて居さうな夢心地に成つた。

茶の外套氏が又欠伸をして起きた。口髭も茶色をした、日に焼けた人物で、ズボンを踏み開けて、どつかと居直つて、

「あゝ、寝たぞ。」

と又欠伸をして、

「何の邊まで来たかなあ。」

殆ど獨言だつたが、しかし言掛けられたやうでもあるから、

「失禮——今しがた二本松を越したやうです。」

と園が言つた。

「や、それは又馬鹿に早いですな。」

と驚いた顔をして、ちよつきをがつくりと前屈みに、肱を蟹の手に鯪子張らせて、金時計を撓

めながら、

「……十一時十五分。」

と鼻筋をしかめて、園を眞正面に見て耳に當てた。

「留つては居らんなあ。はてなあ、此汽車は十二時二十四分に、漸く白河へ着きをるですがな。」

と硝子に吸着いたやうに窓を覗く。

園も、一驚を吃して時計を見た。針は相違なく十一時の其處をさして、汽車の馳せつゝあるま

まに、セコンドを刻んで居る。

バスケットを壓へて、吻と息して、

「何うも濟みません、少し、うとくしましたつけ、うつかり夢でも視たやうで、——郡山まで一度行つた事があるものですから……」

園も窓を覗きながら、

「しかし、何うも濟みません、第一見た事もありませんのに、奥州二本松と云ふのは、昔話や何かで耳について居たものですから、夢現に最う其處を通つたやうに思つたんです。」

燈が白く、ちら／＼と窓を流れた。

「白坂だ、白坂だ。」

と茶の外套氏が言つた。……向直つて口を開けたが、笑ひもしないで落着いた顔して、

「此の汽車は、豊原と此處を抜くです……今度が漸く白河です。」

「何うもお恥かしい……狐に魅まれましたやうです。」

「いや、汽車の中は大丈夫——所謂白河夜船ですな。」

園は俯向いたが、

「——何方まで。」

「はあ、北海道へは始終往復をするのですが、今度は樺太まで行くですて。」

「それは、何うも御遠方……」
彼の持つるした鞆を見よ、手摺の靄が一面に、浸の形が樺太の圖に浮ぶ。汽車は白河へ着いたのであつた。

四

「牛乳、牛乳——牛乳はないのか。——夜中に成ると不精をしをるな。」

茶の外套氏は、ぼく／＼と立つて、ガタンと扉を開いて出た。

窓を開けると、氷を目に注ぐばかり、颯と雨が冷い。恰も墨を敷いたやうなプラットホームは、

ざあ／＼と、さながら水が流れるやうで、がく／＼と鳴く蛙の聲が、町も、山も、田も

一齊に波打つ如く、夜ふけの暗中に鳴擴がる、聲は雲まで敷くやうであつた。

ト、すぐ裏に田が見えて、雨脚も其處へ、どう／＼と強く落ちて、濁つた水がほの白い。停車場

の一方の端を取つて、構内の出はづれの處に、火の番小屋をからくりで見せるやうな硝子窓の小

店があつて、ふう／＼白い湯氣が其の窓へ吹出しては、燈に淡く濃く、ぼた／＼と軒を打つ雨の

雫に打たれては又消える。と湯氣の中に、ビール、正宗の瓶の、棚に直と並んだのが、むらく

と見えたり、消えたりする。……横手の油障子に、御酒、蕎麥、餛飩と讀まれた……

若い驛員が二人、眞黒な形で、店前に立つたのが、見え隠れする湯氣を翳るやうに、湯氣がまた調戲ふやうに、二人互違ひに、覗込んだり、胸を衝と開いたり、顔を背けたり、顔を突出したりすると、それ、湯氣は立つたり伏つたり、鈕に掛つたり、耳を巻いたり、鼻を吹いたりする。……其の毎に、銀杏返の黒い頭が、縦横に激しく振れて、まん圓い顔のふらくくと忙しく廻るのが、大な影法師に成つて、障子に映る。

で、驛は唯水の中のやうである。雨は冷く流れて降りしきる。

驛員の一人は、帽子とともに、黒い頸窪ばかりだが、向うに居て、此方に横顔を見せた方は、衣兜に両手を入れたなり目を細め、口を開けた、聲はしないで、あゝ、笑つてると思ふのが、もの静で、且つ沁々寂しい。

其の一人が、高足を打つて、踏んで、澄してプラットホームを横狀に歩行出すと、いま笑つたのが搔込むやうに胸へ井を取つた。湯氣がふつと分れて、鯉鮓がするくと箸で伸びる。

其の肩越に、田のへりを、雪が装するやうに、且つ雫さへしとくと……此の時判然と見えたのは、咲きむらがつた眞白な卵の花である。

雨に誘はれて影も白し、蛙は其の鯉鮓食ふ驛員の靴の下にも鳴く。

聲が、聲が、

「かあ、かあ、

白あ河あ。

かあ、かあ、

買へ、かへ、

うどん買へ、買へ、

しらあ、河あ。」と鳴く。

あゝ、風情とも、甘味さうとも——園は乗出して、銀杏返の影法師の一寸静つたのを呼ぼうとした。

順禮かとぼくと一人出た。

薄い髪のかじかんだお盥結びで、襟へ手拭を巻いて居る、……汚い笈摺ばかりを背にして、白木綿の脚絆、袂端折して、草鞋穿なのが、すつと身を退いて、トあとびしやりをした驛員のあとへ、しよんぼりと立つて、鯉鮓へ顔を突込んだ。——青膨れの、額の抜上つたのを視ると、南無三寶、眉毛がない、……はまだ仔細ない。が、小鼻の兩傍から頤へかけて、口のまはりを、ぐしやりと輪取つて、瘡だか、火傷だか、赤爛れにべつたりと爛れて居た。

鼎 銀 其の口へ、——忽ちがつちりと音のするまで、井を當てると、舌なめすりをした前歯が、穴に

抜けて、上下おはぐろの兀まだら。……

湯氣を揺つて、肩も手もぶるくと震へて掻食ふ。

「あ。」

あゝ、あの井は可恐しい。

無論こんな事は、めつたにあるまい。それに、げつそりするまで腹も空く。

白河の雨の夜ふけに、鳴立つて蛙が賣る、卯の花の影を添へた、うまさうな餛飩は何うもやめられない。

「洗つてさへくれれば可いのだが、さし當り……然うだ、此方の容器を持つて買はう。」

其處で、バスケットを開けた。

中に咲いたやうな……藤紫に、浅葱と群青で、小菊、撫子を優しく染めた友染の袋を解いて、銀の鍋を、園はきらくくと取つて出た。

出ると、横ざまに颯と風が添つた。

成るだけ順禮を遠くよけて、——最う人氣勢に後へ振向けた、銀杏返の影法師について、横障子を裏へ廻つた。店は裏へ行抜けである。

外套は脱いで居た——背中へ、雨も、卯の花も、はらくとかがつた。

たゞきへ白く散つて居る。

「餛飩を一つ。」

と出しながら、ふと猶豫つたのは、手が一つ、自分の他に、柔かく持添へて居るやうだつたからである。——否、其の人の袖のしのばる、友染の袋さへ、汽車の中に預けて來たのに——

「此へおくれ。」

銀杏返は赭ら顔で、白粉を濃くして居た。

驛員は最う見えなかつた。其の順禮のお盥髪さへ、此方に背き、早やうしろを見せて、びしやびしやと行く處を——（見なくとも可いのに）氣にすると、恰も油さしがうつ伏せに鐵の底を覗く、かんでらの火の上へ、ぼやりと影を沈めて、大な鼠のやうに乗つて消えた。

驛員が黒く、すらくと、雨の雫の彼方此方。

五

他には數ふるほどの乗客もなささうな、餘り寂しさに、——夏の夜の我家を戸外から覗くやうに——恚う上下を見渡すと、可なりの寄席ほどにむらくと込む室も、さあ、二つぐらゐるはあつたらう。……

園の隣なる車は、ずつと長く通つた青い室で、人数は其處も少ない。が、しかし二十人ぐらゐるは乗つて居た。……但し其も、廻燈籠の燈が消えて、雨に破れて、寂然と静まつた影に過ぎない。左右を見定めて、鍋を片手に乗らうとすると、青森行——二等室と、例の青に白く抜いた札の他に、踏壇に附着いたわきに、一枚思懸けない眞新しい木札が掛つて居る……

臨時運轉特別車

但し試用一回限り。

「おや〜……」

園は一寸猶豫つた。

成程、空きに空いた上にも、寝起にこんな自由なのは珍しいと思つた。席を片側へ十五ぐらゐる一杯に劃つた、たゞ兩側になつて居て、居ながらだと樂々と肘が掛けられる。脇息と言ふ態がある。シートの薄萌黄の……尤も古ぼけては居たが——天鵝絨の劃を、コチンと窓へ上げると、紳士の作法にありなしは別問題だが、いゝ頃合の枕に成る。

「さてよ……」

衣繪さんが此邊を旅行した時の車と言ふのを、話の次手に聞いたのが——寸分違はぬ的切此だ……

「待てよ。」

無論、婿がねと一所で、其は一等室はあつたかも知れない。が、乗心の模様も、色合も、いま見て思ふのと全く同じである。

「——臨時運轉特別車。但し試用——一回限り……」

と二行に最一度讀みながら、つい、銀の鍋を片袖で覆うて入つた。

餛飩を庇つたのではない。

唯、席に着くと、袖から散つたか、あの枝からこぼれたか、鍋の蓋に、颯と卵の花が掛つて居て、華奢な細い蕊が、下のぬくもりに、慙う、雪が溶けるやうな薄い息を戦がせる。

其の雪より白く、透通る胸に、すや〜と息を引いた、肺を病んだ美女の臨終の狀が、歴々と、あはれ、苦しいむなさきの、襟の亂れたのさへ僂ばるゝではないか。

はつと下に置くと、はずみで白い花片は、ばらりと、藤色の地の友染にこぼれたが、こぼれた上へ、園は尙ほ密と手を當てて蓋を傾けた。

蓋のほの暖いのに、ひやりとした。

火に掛けて煮ようとする鍋の上へ、少くとも其の花片は置けなかつたからである。

氣が着くと、茶の外套氏は形もない。ドキリとした。

が、例の大鞆が、其のまゝ網棚にふん反返つて、下に皺びた空氣枕が仰向いたのに、牛乳の罎が白い首で寄添つて、何と、……添寝をしようかとする形で居る。

徳利が化けた遊女と云ふ容子だが、其の窓へ、紅を刷いたら、恐らく露西亞の辻占であらう。

では、汽車の中に一人踞つて、眞夜中の雨の下に、鍋で饅頭を煮る形は何だ？……

説明も形容も何もない——燐寸を摺るや否や——アルコールに火をつけるのであるから、言句もない。……廢と朱が底へ漲ると、銀を蔽うて、三脚の火が七つに分れて、青く、忽ち、薄紫に、藍を投げて軽く煽つた。

ドカリ——洗面所の方なる、扉へ立つた、茶色な顔が、ひよいと立留つてぐいと見込むと、茶の外套で恚う、肩を斜に寄つたと思ふと、……件の牛乳の罎を引攪ふが早い——聲を掛ける間も何もなかつた——茶革の靴で、どか／＼と降りて行く。

登音亂れて、スツ／＼と擦れつ、響きつ、驛員の驚破事ありげな顔が二つ、帽子の堅い廂を籠めて、園の居る窓をむづかしく覗込んだ。

其の二人が苦笑した。

顔が両方へ、背中合せに分れたと思ふと、笛が鳴つた。

園は惘然とした。

「あゝ、分つた。」

狐が馬にも乗らないで、那須野ヶ原を二本松へ飛ばけた怪しいのが、車内で焼酎火を燃すのである。

此が、少なからず茶の外套氏を驚かして、渠をして驛員に急を告げしめたものに相違ない。

と思ひながら、四邊を見た。

胸したが誰も居ない。

「あゝ……心細いなあ——」

が、その中はまだよかつた、……汽車は夜とともに更けて行き、夜は汽車とともに沈むのに、少時すると、また洗面所の扉から、ひよいと顔を出して覗いた列車ボーイが、やがて、すたく／＼と入つて来ると、棚を視め、席を窺ひ、大鞆と、空氣枕を、手際よく取つて擔いで、アルコールの青い火を、靴で半輪に廻つて、出て行くとして——

「御病氣ですか。」

園は大眞面目で、

「いゝえ。」

「はあ。」

と首をねぢつて、腰をふりつゝ去つた。

此でまた、汽車半分、否、室一つ我ばかりを残して、樺太まで引摺はれるやうな気がしたのである。

「狂人だと思ふんだ。」

げそりと、胸をけつられたやうに思つた。

「勝手にしろ。」

自棄に投げる足も、しかし、すぼまつて、園は寒いよりも悚氣とした。

併しながら……此を見れば氣も狂はう。死んだやうな夜氣のなかに、凝つて、ひとり活きて、卯の花をかけた友染は、被衣をもるゝ袖に似て、ひらくと青く、其の紫に、芍薬か、牡丹か、包まれた銀の鍋も、チチと沸くのが氷の裂けるやうに響いて、ふきこぼるゝ泡は卯の花を亂した。

續 銀 鼎

不思議なる光景である。

白河はやがて、鳴きしきる蛙の聲、——其の蛙の聲もさあと響く——とともに、さあと鳴る、流の音に分る、如く、汽車は恰も雨の大川をあとにして、又一息、暗い陸奥へ沈む。……眞夜中に、色澤のわるい、頬の瘦せた詩人が一人、目ばかり輝かして熟と視る。

燈も夢を照すやうな、朦朧とした、車室の床に、其の赤く立ち、颯と青く伏つて、湯氣をふいて、ひらりと燃えるのを凝然と視て居ると、何うも、停車場で錢で買った饅頭を温め抱くのだとは思はれない。

どうくと降る中を、ぐわうと山に飮して行く。がらんとした、古びた萌黄の車室である。護摩壇に向つて、髻髪も蓬に、針の如く逆立ち、あばら骨白く、吐く息も黒煙の中に、夜叉羅刹を呼んで、逆法を修する呪詛の僧の舉動には似べくもない、が、我ながら銀の鍋で、ものを煮る、仙人の徒弟ぐらるには感ずる。詩人も此では、鍛冶屋の職人に宛然だ。が、其の煮る、鑄る、鍊

りつゝあるは何であらう。没薬、丹、朱、香、玉、砂金の類ではない。蝦蟇の膏でもない。

と思ひつゝ、視つゝ、惑ひつゝ、慙くして鍊るのは美人である。

衣繪さんだ！

と思ふと、立つ泡が、雪を震はす白い膚の爛れるやうで。……園は、ぎよつとして、突俯すばかりに火尖を嘗めるが如く吹消した。

疲れたやうに、吻と呼吸して、

「あゝ、飛んでもない、……譬にも虚事にも、衣繪さんを地獄へ落さうとした。」

假に、もし、此を煮る事、鑄る事、鍊る事が、其の極度に到着した時の結晶體が、衣繪さんの姿に成るべき魔術であつても、火に掛けて煮爛らかして何とする！……

鑄像家の技に、佛は銅を煮るであらう。彫刻師の鑿に、神は木を刻むであらう。が、人、女、あの華奢な、衣繪さんを、詩人の煩惱が煮るのである。

「大變な事をしたぞ。」

園は、今更ながら、瞬時と雖も、心の影が、其の熱に堪へないものの如く、不意のあやまちで、怪我をさした人に吃驚するやうに、銀の蓋を、ぱつと取つた。

取ると、……むらりと一卷、渦を巻くやうに成つて、湯氣が、鍋の中から、朦と立つ。立ち

ながら、すつと白い裳が眞直に立靡いて、中ばでふくらみを持つて、筋が凹むやうに、二條に分れようとして、軟にまた合つて、颯と濃く成るのが、肩に見え、頸脚に見えた。背筋、腰、ふくら脛……

卯の花の色うつくしく、中肉で、中脊で、なよ／＼として、ふつと浮くと、黒髪の音がさつと鳴つた。

「やあ、あの、もの恥をする人が、裸身なんぞ、こんな姿を、人に見せるわけはない。」

園は目を瞑つた。

矢張り見える。

「これは、不可ん。」

園は一人で頭を掉つた。

まだ消えない。

「第一、病中は、其の取亂した姿を見せるのを可厭がつて、見舞に行くのを断られた自分ではな

いか。——此は悪い。こんな處を。あゝ、濟まない。」

園はもの狂はしいまで、慌しく外套を脱いだ。トタンに、其の衣繪さんの白い幻影を包んで隠さうとしたのである。が疼々しい此の硬ばつた、雨と埃と日光をしたゝかに吸つた、甲羅生えた

鼠色の大きな蝙蝠。

一寸でも觸ると、其のまゝ、いきなり、白い肩を包んで、頬から衣繪さんの血を吸ひさうである、と思つたばかりでも、あゝ、滴々血が垂れる。……結綿の鹿の子のやうに、咯血する咽喉のやうに。

二

で、園は引摺んで、席をや、遠くまで、其の外套を彼方へ投げた。

投げた時、偶と渠は、鼓打である其の従兄が、業體と言ひ、温雅で上品な優しい男の、酒に酔拂ふと、場所を選ばず、着て居る外套を脱いで、威勢よくばつと投出す、帳場の車夫などは、おいでなすつた、と丁と心得て居るくらゐで……電車の中でも此を遣る。……下が黒羽二重の紋着と云ふ勤柄であるから、餘計人目について、乗合は一時に哄と囃す。

「何でえ、持つてけ。」と、舞袴にびたりと脛を張つて、とろりと一睨み睨むのがお定り……と其を思出して、……獨りで笑つた。

そんな、妙な間があつた。それなのに、媚めかしい湯氣の形は、卯の花のやうに、微に揺れつつ其のまゝであつた。

銀の鍋一つ包む、大くはないが、衣繪さんの手縫である、其の友染を、密と掛けた。項から肩と思ふあたり、ピクツと手應がある、ふつと、柔く軽く、つゝんで抱込む胸へ、嫺さと氣の重量が掛るのに、アツと思つて、腰をつく。席へ、薄い眞綿が羽二重へ辻つたやうに、さゝ……と唯衣の音がして、膝を組んだ足のやうに、友染の端が、席をなぞへに、たらりと片袂に成つて落ちた。——氣を失つた女が、我とともに倒れかゝつたやうである。

吃驚して、取つて、すつと上へ引くと、引かれた友染は、其のまゝ、仰向けに、襟の白さを蔽ひ餘るやうに、がつくりと席に寝た。

ふはく〜と其處へ靡く、湯氣の細い角の、横に漾ふ消際が、こんもりと優しい鼻を殘して、ぼつと浮いて、衣繪さんの肩、口、唇、白齒。……あゝあの時の、死顔が、まざく〜と、いま我が膝へ……

白衣幽に、撫子と小菊の、藤紫地の裙模様の小袖を、亡軀に掛けた、其のまゝの、……此の友染よ。唯其の時は、瓜一つ指の尖も、人目には漏れないで、水底に眠つたやうに、面影ばかり澄切つて居たのに、——こゝでは、散亂れた、三ひら、五ひらの卵の花が、凄く動く汽車の底に、ちら〜ちらと揺れて、指の、震へるやうにさへ見らるゝ。世には、清らかな白齒を玉と云ふ、眞珠と云ふ、貝と言ふ。……いま、ちらりと微笑むやうな、口許を漏るゝ齒は、白き卵の花の花

片であつた。

「——膝枕をなさい。——衣繪さん。」

園は居坐を直した。が、沈んだ顔に、涙を流した。

あゝ、思出す。……

「いくら私、堪へましてもね、冷たい汗が流れるやうに、ひとりでに涙が出るんですもの。御病人の前で、此ぢやあ悪いと思ひますとね、尙ほ堪らなくなるんですよ。それだもんですからね。枕許の小さな黒棚に、一輪插があつて、撫子が活かつて居ました。その花へ、顔を押しつけるやうにして、ほろ〜溢れる目をごまかしましてね、(西洋のでございますか、いゝ匂ですこと。)なんのつて、然う言つて——あの、優しい花ですから、葉にも、枝にも、此方の顔が隠れないで弱りましたよ——義兄さん。」

と衣繪さんのもう亡くなる前だつた——たしか、三度めであつたと思ふ……従兄の細君が見舞に行つた時の音信であつた。

豫て、病氣とは聽いて居た。——其の病氣のために、衣繪さんが、若手、賣出しの洋畫家であつた、婿君と一所に、鎌倉へ出養生をして居たのは……あとで思へば、それも寂しい……行く春

の頃から知つて居た。が、紫の藤より、菖蒲杜若より、鎌倉の町は、水は、其の人の出入、起居にも、ゆかりの色が添ふであらう、と床しがるのみで、まるで以て、然したる容體とは思ひもつかないで居たのに、秋の野分しほくして、睡られぬ長き夜の、且つ朝寒く——インキの香の、ちつと身に沁む新聞に——名門のお嬢さん、洋畫家の夫人なれば——衣繪さんの（もう其の時は歸京して居た）重體が、玉の簾を吹ちぎり、金屏風を倒すばかり、嵐の如く世に響いた。

同じ日の夜に入つて、婿君から、先んじて親書が来て——病床に臥してより、衣繪はどなたにもお目に掛る事を恥かしがり、申候、女氣を、あはれ、御諒察あつて、お見舞の儀はお見合せ下されたく、差繰つて申すやうながら、唯今にもお出で下さる事を當人よく存じ、特に貴兄に對しては……と此の趣であつた。

髪一條、身躰を忘れない人の、此は至極した事である。

婿君のふみながら、衣繪さんの心を傳へた巻紙を、繰戻すさへ、さらりと、緑なす黒髪の枕に亂る、音を感じて、取る手の冷いまで血を寒くしながらも、園は、謹んで其の意を體したのである。

折から、從弟は當流の一派とともに、九州地を巡業中で留守だつた。細君が、園と雙方を兼ねて見舞つた。其の三度めの時の事なので。——勿論、田端から歸りがけに、直ぐに園の家に立寄

つたのであるが。

「ね——義兄さん、……お可哀相は、最う疾くのむかし通越して、あんな綺麗な方が最うおなくなんなさるかと思ふと眞個に可惜ものでならないんですもの。——日當は好いんですけれど、六疊のね、水晶のやうなお部屋に、羽二重の小搔卷を掛けて、消えさうにお寝つて、お色なんぞ、雪とも、玉とも、そりや透通るやうですよ。東枕の白い切に、ほぐしたお髪の眞黒なのが濡れたやうにこぼれて居て、向うの西向の壁に、衣桁が立ててあります。それに目の覺めるやうな、友染縮緬が、反ものを解いたなりで、一種掛つて居たんです。——義兄さんの歌の本をお讀みなさるのと、うつくしい友染を掛物のやうに取換へて、衣桁に掛けて、寝ながら御覽なさるのが何より樂なんですつて。——あの方の魂の在らつしやる處も、それで知れます。……紫の雲の鬘鍵く空ぢやあなくつて、友染の霞が来て、白いお身體を包むのでせうね——あ、それにね。……義兄さんがお心づくしの丸薬ですわね。……私が最初お見舞に行つた時、ことづかつて参りました……あの薬を、お婿さんの手から、葡萄酒の小さな硝子杯で飲んだつて、——え、先刻……枕許の、矢張り其の棚にのつた、六角形の、蒔繪の手篋をお開けなすつたんですよ。然うすると、……あの薬包と、かはいらしい爪取剪が一具と、……」

從弟の妻は、話しながら、こみあげ、我慢したのを、此の時ないじやくりして言つた。

「……他に何にもなしに、撫子と小菊の模様の友染の袋に入つた、小さい圓い姿見と、其だけ入つて居たんです。……お心が思ひ遣られますこと。……」

お婿さんが、硝子杯に葡萄酒をお計んなさる間——え、然うよ。……お寢室には私と三人きり。……誰も可厭だつて、看護婦さんさへお頼みなさらないんださうです。第一、お醫師様も、七ツ八ツのお小さい時からおか、りつけの方をお一人だけ……尤も有名な博士の方ださうですけれど

それでね、義兄さん。お婿さんが葡萄酒をお計んなさる間に、細りした手を、恠うね、頬へつけて、うつくしい目で撓めて爪を見なすつたんでせう、のびてるか何うだかつて——凝と御覽なすつたんですがね、白い指さきへ瞳が映るやうで、そして指のさきから、すつとお月様の影がさすやうに見えました。それが、恠う、お招きなさるやうに見えるんですもの。私、ぶる／＼としたりたんです……」

聞いて居る園が震へた。

「ですけれど、あの、お手で招かれたら、懐中へなら尙の事だし、冥土へでも、何處へでも行きかねやしますまい……と眞個に思ひました。

其の手を、密と伸して、お薬の包を持つて、片手で圓い姿見を半分、凝と視て、お色が颯と蒼さめた時は、私はまた泣かされました。……私は自分ながら頓興な聲で言つたんですよ……」

三

「私としては、出来るだけの事はしました。——申してはお恥かしいやうですが、實際、此の一月ばかりは、押通し夜も寝ませんくらの看病はしましたが。」

一室の、其處に五人居た。著名なる新聞記者、審査員——畫家、文學者、某子爵の令夫人が一人。——園が居た。弔禮のために、香川家を訪れたものが、うけつけの机も、四つばかり、應援に山をなす中から、其處へ通された親類縁者、それ／＼、又他方面の客は、大方別室であらう。園が、人を分けて廊下を茶室らしい其處へ通された時、すぐ其の子爵夫人の、束髪に輝く金剛石とともに、白き牡丹の如き手巾の、目を蔽うて俯向いて居るのを視た。

皆、黯然として、半ば瞳を閉ぢて居たのである。

「御當家でも——實に……」

「全くでございます。」

唯、いひかはされるのは、其のくらゐな事を繰返す。時に、鶺鴒の聲がして、火桶の炭は赤け

れど、山茶花の影が寂しかった。

其處へ婿君が、紋着、袴ながら、憔悴した其の寝不足の目が血走り、ぼう／＼髪で簷れたのが、弔禮をうけに見えたのである。

「やあ……何うも。」

と、がつくり俯向いた顔を上げたのを、園に向けると、

「お禮を申し上げます、——あのお薬のためだらうと思ひます。五日以上……滋養灌腸などは、絶對に嫌ひますから、湯水も通らないくらゐですのに、意識は明瞭で、今朝午前三時に息を引取りました一寸前にも、種々、細々と、私の膝に顔をのせて話をしまして。……園さんに、おなごりのおことづけまで申しました。判然して、元氣です。醫師も驚いて居ました。まるで絶食で居て、よく、こんなにと、兩三日前から、然う言はれましてな。……しかし、氣の毒でした。

江戸兒は……食ものには亂暴です。九死一生の時でも、鯨だ、天麩羅だつて言ふんですから。蝦が欲しい……しんじよとでも言ふかと思ふと、飛んでもない。……鬼殻焼が可いと言ふんです。

——痛快だ！……宜しい、鬼を食つて了ひなさい、と景氣をつけて、肥つた奴を、こんがりと南京の中皿へ装込んだのを、私が氣をつけて、大事に搦つて、箸で嘔めたんですが、みでは豈夫と思ふんです。馴れない料理人が、むしるのに、幾らか鎧皮が附着いて居たでせうか。一口觸つた

と思ふと、舌が切れたんです。鬼殻焼を退治しようと言ふ、意氣が壯なだけ實に悲惨です。すぐに唇から口紅が溶けたやうに、眞赤な血が溢れるんですものね。」

爾時は、臉を離して、はらりと口許を手中で蔽うて居た、某子爵夫人が頷くやうに聞き、清らかな手を扱くにつれて、眞白な絹の、それにも血の影が映すやうに見えた。夫人は堪へやらぬ狀して、衝と肩を反して、横を向いて又目を壓へたのである。

「……え、尤も、結核は、喉頭から、もう其の時には舌までも侵して居たんださうですが。鬼殻焼……意氣が壯なだけ何うも悲惨です。は、はア。」

と、力のない、笑の影を浮べて、言つて、悵然として仰いで、額に逆立つ頭髮を拂つた。

「あちらの御都合で、お線香を。」

「一寸、御挨拶を。」

園と審査員が殆ど同時に言つた。

「それでは、何うぞ……」

廊下を二曲り、又半ばにして、縁續きの廣間に、線香の煙の中に、白い壇が高く築かれて居た。袖と袖と重ねたのは、二側に居餘る、いづれも聲なき紳士淑女であつた。

順を譲つて、子爵夫人をさきに、次々に、——園は其の中でいつちあとに線香を手向けたが、

手向けたから殆ど雪の室かと思ふ、然も香の高き、花輪の、白薔薇、白百合の大輪の花弁の透間に、薄紅の撫子と、藤紫の小菊が微に彩めく、其の友染を密と迎ると、搔上げた黒髪の毛筋を透いて、ちらりと耳朶と、而して白々とある領脚が、すつと寝て、其の薄化粧した、きめの細かなのさへ、ほんのりと目に映つた。

まだ納棺の前である。

「香川さん。」

袴で座を開きながら、園は、堅く障子を背にした婿君を呼んで言つた。

「……一寸お顔を見たいんです。」

聲の調子の掠れるまで、園は胸が轟いたのである。が、婿君は潔く、

「え、何うぞ——此方へ。」

とづいと立つと、逆屏風——たしか葛の葉の風に亂れた繪の、——端を引いて、壇の位牌の背後を、次の室の襖との狭い間を、枕の方へ導きながら、

「困りました。」

「……………」

「なくなられては困りましたなあ。」

と振向き状に、ぶつきら棒に立つて、握拳で、額を擦つたのが、惱亂した頭の髪を、搔摺りでもしたさうに見えて、煙の靡く天井を仰いだ。

「唯々、お察し申上げます。」

「は。」

と云つて、膝をついて、

「衣繪ちゃん、——園さんです。」

と、白いものを衝と取つた。

眉毛を長く、睫毛を濃く、彼方を項に、満座の客を背にして、其の背の方は、花輪が隔てて、誰にも見えない。——此方に斜くらるな横顔で、鼻筋がスツとして、微笑んだやうな白歯が見えた。——妹が二人ある。其の人たちの優しさに、髪を櫛卷のやうにして、薄化粧に紅をさした。

「衣繪さん。」

と心で言つて、思はず、直と寄つた膝が、うつかり、袖と思ふ搔卷の友染に觸れると、白羽二重の小波が、青く水のやうに其の襟にかつた。

屈みかゝつて、上から差覗く、目に涙の婿君と、微に仰いだ衣繪さんの顔と、世に唯、此の時三人であつた。

「……お静に、お静に、然やうなら……」

ハツと息して、立つて、引返す時、……今度は園が云つた。

「私も困ります。」

「……………」

「寂しくつて、世間が暗いやうです。——衣繪さんはおなくなりなさいました。」

「……………」

「香川さん。——しかし、今では、衣繪さんを、衣繪さんを、」

「……………」

「私が、思、思つても！……」

愛も、戀も、憧憬も、ふつゝかに、唯、思ふとのみ、血を絞つて言つた。

「……思つても、——貴方は許して下さいますか。」

仰いで言ふのを、香川は、しばらく熟と視たが、膝をついて、ひたと居寄つて、

「衣繪ちゃんが喜びませう……私も、……嬉しい。」

戀の仇は、雙方で手を取つた。

「あ、お顔を。」

振向いて、も一度視た。

其の、面影を、——夜汽車の席の、いまここに——

「さ、膝を、膝枕をなさい、誰も居ません。」

園は、もの狂はしく、面影の白い、髪の毛の黒い、裳の、胸の、乳のふくらみのある友染を、端坐した膝に寝かして、うちつけに、明白に、且つ夢に遠慮のないやうに戀を語つた。

四

「岩沼——岩沼——」

辨當、もの賣の聲が響くと、人音近く、夜が明けたと思ふのに、目には、何も、ものが見えな

い。
吃驚した。

園は揺搖るやうに窓を開けた、が、眞暗である。

「もし、もし、もし……驛員の方、驛の方——驛夫さん……」

とけた、ましく呼んだ。

「何ですか。」

「失禮ですが、私の目は何うかなつては居ないでせうか。」

「貴方——何うかして居ますね。……確乎なさらくつちやあ不可いぢやありませんか。」

獨言して、

「何を言つてるんだ。」

はつとすると、構内を、東雲の一天に、雪の——あとで知つた——刈田嶽の聳えたのが見えて、

目は明に成つた。

はじめ一人乗込んだ客がある。

袖でかくすやうにした時、鍋の饅頭は、しかし、線香の落ちてたまつた、灰のやうであつた。

五

水源を、岩井の大沼に發すと言ふ、浦川に架けた橋を渡つた頃である。

松島から歸途に、停車場までの間を、旅館から雇つた車夫は、昨日、日暮方に其の旅館まで、

同じ停車場から送つた男と知れて、園は心易く車上で話した。

「さあ、何と言はうかな。……景色は何うだ、と聞かれて、悪いと言ふものもなからうし……唯

よかつたよ、とだけぢや、君たちの方も納るまいけれども、何しろ、私には、松島は見ても松島を論ずる資格はないのだよ。昨日も君に世話に成つたと言ふから、知つてるだらうが、薄暮合、あの時間に旅館へ着いたのだから、あとは最う湯に入つて寝るばかりさ。

園は昨日の其までは、聊か足す用があつて仙臺に居たのであつた。

「夜があけたわ、顔を洗つたわ、旅館の縁側から、築山に松の生えたのが幾つも霞の中に浮いて居る、大な池を視ていゝなあと言つたつて、それまでだ。——海岸へ出たからつて、波が一つ寄るぢやなし、櫻貝一つあるんぢやあない。

しかし、無理だよ。……豫て聞いても居るし、むかしの書物にも書いてある。——松島を観るのは船に限る。八百八島と言ふ島の間を、自由に青疊の上のやうに漕ぐんだと言ふから、島一つ一つ趣のかはるのも、どんなにいゝか知れやしない。魚もすらく泳ぐだらうし、松には藤も咲いてるさうだし、つゝじ、山吹、とりぐだと言ふ。其の間を、船の影に驚いて、パツと群れて水鳥が立つたり、鷗が泳いで居たり……」

「然うで、然うで、其の通りで……旦那。」

と、車夫は梶棒に張つた肩を聳やかした。

「船でなけりや、富山と言ふのへ上るだね。はい、其處だと、松島が残らず一目に見えますだ。」

「ださうだね。何しろ、船で巡るか、富山へ上らないぢやあ、松島の景色は論ずべからずと、ちやんと戒められて居るんだよ。」

「何うでがすね、此から、富山へおのぼりに成つては、はい、一里たらずだ、一息だで。」

「いや、それよりは、早く歸つて、墓參がしたくなつた。」

「へい。」

と言つたが、乗つた客も、挽く男も、妙に黙つた。

園は我ながら、餘りつきもない言をうつかり言つたのに、はつと氣が着いたほどである。

車夫は唐突に、目かくしてもされたやうに思つたらう。

陽が白く、雲が白く、空も白い。のんどりとした静寂な田畠には、土の湧出て、装束るやうな

蛙の聲。かた／＼かた／＼ころツ、ころツ、くわら／＼くわら、くつ／＼くつ。中でも大ききう

なのが、土の氣の蒸れる處に、高く構へた腹を、恚う人の目に浮かせて、があ／＼があ／＼と太

く鳴く。……

俤は踏切を、其の蛙の聲の上を越した。一昨日の夜を通した雨のなごりも、薄い皮一枚張つた

やうに道が乾いた。一方が小高い土手に成ると、いままで吹いて居た風が留んだ。靄も霞もないのに、田畑は一面

にぼうとして、日中も春の夜の朧である。薄日は弱く雲を越さず、畔に咲いた蒲公英、咲き交る豆の花の、緋、紫にも、ぼつりとも黒い影が見えぬ。朱の木爪はちら／＼と灯をともし、樹の根を包んだ石楠花は、入日の淡い色を染めつ、然も日は正に午なのである。道にさし出た、松の梢には、紫の藤かゝつて、どんよりした遠山のみどりを分けた遅櫻は、薄墨色に濃く咲いて、然も散敷いた花瓣は、散かさなつて根をこんもりと包んで、薄紅い。

其の傍に、二ツ三ツ境のない墓が見える。

見つ、俤は、段々の田を隔てて、土手沿ひの徑を遙に行くのである。

雲も、空も、皆白い。

其處へ、影のさすやうなのは、一つ一つ、百千と數へ切れない蛙の聲である。

鳴く、鳴く。……

松杉、田芹、すつと伸びた酸模草の穂の、そよとも動かないのに、溝川を蔽ふ、たんぼほの花

豆のつるの、忽ち一所に、さら／＼と動くのは、鮎、鱒には揺過ぎる、——晝の水鶏が通るので

あらう。

夢を見て居るやうである。

趣は違ふけれども、園は、名所にも、古跡にも、あんな景色はまたあるまいと思ふ處を、先刻

も一度通つて来た。

——水源を岩井沼に發すと言ふ、浦川の流の末が、廣く成つて海へ灌ぐ處に近かつた。旅館を出てまだいく程もない處に——路の傍に、切立てた、削つた、大な巖の、蟲々と立つのを視た。或は、佛の御厨子の如く、或は人の髑髏に似て、或は禪定の穴にも似つ、或は山寨の石門に似た、其の岩の根には、一ツづ、皆水を湛へて、中には蒼く凝つて淵かと思はる、のもあつた。岩角、松、松には藤が咲き、巖膚には、つ、じ、山吹を鏤めて、御佛の紫摩黄金、鬼の舌、また僧の袈裟、また將軍の緋緘の如く、ちらくくと水に映つた。

「此處も海ではなかつたか——いまの松島の。……此の巖は、一つ一つ、あの島のやうに——」一方は、ひしやくとしたり、何處までも蘆原で、きよつくと、きよつくと、と蘆一むらづ、順に、ばらくと、又飛々に、行々子が鳴きしきつた。

それから、しばらくは、まばらにも蘆のある處には、皆行々子が鳴いて居た——
こゝに、蛙の鳴くやうに……

また、其の頃は、海ある方に雲の切れた、薄青い空があつた。それさへいまは夢のやうである。園は、行々子の鳴く音におくられつ、蛙の聲に迎へられたやうな氣がした。

……水鶏が走るか、さらくと、ソレまた小溝が動く。……動きながら其の靜寂さ。

唯、遠くに、行々子が鳴きしきつて、こゝに蛙がすだく——其の間を、わあ——とつないで、屋根も門も見えないで、あの、遅櫻の山のうらあたり、學校の生徒の、一齊に讀本の音讀を合す聲。

園は心も氣も情と成つた。

ピイ、キリくと雲雀が鳴くと、ぐらりと激しく俥が揺れた。

「あゝ、車夫。」

酷い道だ。

「降りよう、——降りよう。」

「何、旦那、大丈夫で、昨日も此處を通つただね、馴れてるだよ。」

「いや、昨日も、はらくとしたつけが、まだ濡れて居たから、輪をくつて、お前さんが挽きにくいまでも、まだ可かつた。泥濘が薬研のやうに乾いたんぢやあ、大變だ。轉んだ處で怪我もしまいが、……此の咲いてる花に極が悪い。」

道のゆく手には、藁屋が小さく、ゆるく、蜿る路に顯れた背戸に、牡丹を植ゑたのが、あの時の、子爵夫人のやうに遙に覗いて見えた。

「はゝゝ、旦那、御風流だ。」

それから、歩行きながら、

「東京から來らつしやる方は、誰方も花がお好きだアなあ。」

「いろんな可愛いのが、路傍に咲いて居るんだ。誰だつて悪くはあるまい。」

「此方人等は、實の成る奴か、食へるんでなくつては、黄色いのも、青いのも、小さいものを、何にすべいよ。」

と笑つた。が、ふと、汗ばんだ赭ら顔の、元氣らしい、若いのが、唇をしめて……眞顔に成つて、

「然うだ、然うだ、思ひつけた。旦那、あなた様、とこなつと言ふ草は知つてるだかね。」

「常夏。」

「それよ。」

「撫子の事ぢやあないか。」

「それよ——矢張り……然うだ——忘れもしねえ。……矢張り同じやうな事を言はしつげが、私等にや其の撫子が早や分んねえだ。——何ね、今から、二三年、然うだねえ、彼れこれ四年には成るすらか。東京から來なさつたな、そりや、何うも容子たら、容色たら、そりや何うも美しい若い奥様がな。」

「一人かい。」

「へ、い、お二人づれで。——旦那様は、洋服で、それ、繪を描く方が、こゝへぶら下げておいでなさる、あの器械を持つて在らしつけえ。——忘れもしねえだ、若奥様は、綺麗な縫の肩掛を手に持つてよ。紫がかつた黒い處へ、一面に、はい、櫻の花びらのちら〜かゝつた、コートをめしてな。」

園はゾツとした。

「丁ど今頃だで——それ〜、それよ矢張り此の道だ。……私と忠藏がお供でやしたが、若奥様がね、瑞巖寺の欄間に舞つてる、迦陵頻伽と云ふ聲でや、

——あの夏になると、此の邊に常夏が澤山咲きませうね——
へい、其の常夏を知らねえだ。

——まあ、撫子の事なんだよ——

其のさ、撫子を知らねえだ。私は汗を流したでなあ。……

折があつたら、誰方ぞ、聞かう聞かう思つて、因果と因縁で三年経つただ。旦那、花がお好きだで、な、どんな草葉だかこゝ等にあつたら、一寸つまんで教へてくらせえ。」

「淡紅色の、優しい花だが此の邊には屹とあるね、あるに違ひない。葉だけでも私にも分るだら

う。

と、のつか、つた勢で、溝を越さうとして、

「お待ち」

園は、つと俵に寄つた。

バスケットを開けて、其の花が、色のまゝ染まつた、衣繪さんの友染を、と思つた……其時である。車夫が、

あつ。

と口を開けて、にやりとして、

「へ、へ、轉ぶと、そこの花に恥かしい。……うつ、へ、へ、御尤もだで。旦那は目が早いだ

やあ。」

「何だ。」

「へ、へ、私あまた、眞個の草葉の花かと思つただ。」

「何だよ……」

「なんだよつて、へ、へ、へ。そこの、酸模草、蚊帳釣草の彼方に、きれいな花が、へ、へ、花が、うつむいて、草を摘んで居なさるだ。」

「え。」

「や——旦那、——旦那でがせう。其方を見ながら。招かつしやるは。」

「これ。」

「や、私で、——へい、私で。」

と、きよろりとしながら、

「へい、へい。」

俵を横に、つかくと、田の畔へ、挽いて乗掛けると、白い陽に、影もなく、ほんと立つて、へこくと叩頭をした。

「へい、其が、へい、成程、其が、常夏で、へい。」

とまた叩頭をした。が、ゑみわれるやうに、得もいはれぬ、成佛しさうな笑顔を向けて、

「旦那、旦那、旦那……」

「何。」

「あなた様にも、御覽なせえと……若奥様が。」

園は、魂も心も宙を踏んで衝と寄つた。

空に一輪、蕾を添へて、咲いたやうに、其の常夏の花を手にした、細りと白い手と、櫻ぢらし

の紫紺のコート。

「衣繪さん……」

品のいゝ、藤紫の鹿子切の、圓鬚つやゝかな顔を見た時。

「ぎやッ。」

と喚くと、梶棒をたゞき投げて、車夫は雲雀と十文字に飛んで遁げた。

寂寞と成る。蛙の聲の小やんだ間を、何と、園は、はずみでころがり出した袱紗の銀の鍋に、

靈と知りつゝ、其の靈の常夏の花をうけようとした。

然り、銀の鼎を捧げた時、園は聖僧の如く、身も心も清しかった。

襟をあとへ、常夏を指で少し引いて、きやしやな撫肩をやゝ斜に成つたと思ふと、衣繪さんの顔は、睫を濃く、凝然と視ながら片手を頬に打招く。……撓ふ、白き指先から、月のやうな影が流れた。

寄らうとすると、其の手も映る、襖も映る、裳に眞蒼な水がある。

また招くの、ためらふと、薄雲のさすやうに、面に颯と氣色ばんで、常夏をハツと銀の鍋に投げて超越した。

其の花の影も映つた。が、いまは、水も火もと思つた。

「御免なされや。」

背中に、むつとして、いきれたやうな可厭な聲。此は、と視ると、すれ違つて、通り状に振向いたのは、眞夜中の雨に饅頭を食つた、髪の毛の一筋ならびの、唇の爛れたあの順禮である。

見る端に、前齒の抜けた、汚い口でニヤリとした。

車夫が、其の道を、小さく成つて、遁げる。遁げる。

はや、幻影は消えつゝ、園は目の前に、一座、藤つゝじを鏤めた、大巖の根に、藍の如き水に臨んで、足は、めぐらした柵を越えたのを見出した。

杵(キネ。)が池と言ふ、人を取る水よ、と後に聞く。

衣繪さんに、其の稱の似通ふそれより、尙ほ、なつかしく、涙ぐまるゝは、銀の鍋を見れば、いつも、常夏の影がさながら植ゑたやうに咲くのである。

身延の鶯

馬車が行き、俵が行く。上りも下りも、日盛に、がたくぐらく、馬ながら、輪ながら、暑さに酔つて蹠踏けて行く。

陽はじんくと灼けて、草いきれの路は煙砂が光る。——名に負ふ富士川が赤く濁つて、水嵩のどうくと増した、雨霽りの折からとて、道程、其富士川の渡船場から四十八町と云ふ、身延の本山までは、田畑に沿ひ、崖に沿ひ、處々絶崖の急流に臨みつゝも、陰のない街道を、鐵の箒で掃立てるやうな馬車、俵に、埃は然まで立たないが、曲んだり、崩れたり、がつくりと窪んだり、道悪の焼地を、どしんと揺上げ揺下し、ぐらくと引傾く。俵さへ、かはるのは漸とぐらうで、馬車となると、遠くから足場の聊かでも餘裕のある處を見計らつて、一方の、來て行違ふのを待たなければならぬ。

此處の習慣として、どんな場合でも、渡の方から靈場へ向つて上る方が、皆乗ものを待たせられる。下りで歸る方は、時間の都合があつて、後れると汽車との聯絡が取れないから、然うした

約束があるのださうである。

で、來るのをかはらせて待つ方は、車體を片よせたぐらうでは道が狭いから間に合はない。自棄に何處でも乗開いて、ガタリと片輪を突込むから、水溜りでは、パツと湯玉のやうな繁吹を跳上げる。其たびに馬車はどしんと躍上つて、——六人乗でぎつしりだが——氣の弱い女などは腰掛を迂り落ちて俯伏せになつて、きやつと云ふ騒ぎである。御者は、と見ると、引傾つたとは反對の方へ、背を曲げて、頭をぶら下げたやうに横斜違にぐたりとなる。喘いで續く俵が、突戻された形にガツキと留まる。梶を持堪へた焦たやうな拳から、腕から、垂々と汗が流れる。

處を、すれすれに通過ぎる。……本山の方からは下りだが、それでも馬も人もぐたくぐにだらけながら、影ばかりは掌ほどに縮まつて抜けて行く。

往つたり、來たり、こんなのが幾組も隨所に目に着く。

其の間々を、莫蓮、笠、または手甲、脚絆で、道者、行者と云つたのが、金剛杖をついたり、團扇を腰にさしたりで、早に負けた、夕立雲の斷片のやうに、ふらくと草いきれに漾ひ行く。

いや、何うも暑い。

尤も山國のことである。巖の根を溢れるばかり、小流の馳る處もある。目の下に碧い水の白く翻る川へも乗出す。乗通る。……然れば、靱草の藤紫、濃い常夏が紅く咲き、野萩に交つては

つと姥百合のふくらんだ、山懐、山の腰をも時々は傳ふのであるが、溪河の流れに、其の草の色が映るのさへ、汗の滲んだ目には、宛如、裏長屋の物干から、餘所の土用干の友染を、ちらりと覗くやうなものである。

「はッ、はッ。」

ともすれば、

「うん。」

と呻くやうに、溜息を吐きながら、此の炎天を歩行く男がある。

焦茶色になつた麦藁帽子を、目を除ける勢もなく、仰向けに被つた下から、髪を長くして居るのであらう、ねばつた毛を、耳にも額にもだらりと掛けた、づんぐり肥つた、年紀は二十六七の

……

二

洗ざらしの紺緋の單衣に、薄汚れたセルの袴を穿き、股立を取つたが、太脛がだぶりとして變に黄んで、何うやら、脚氣でももあるらしいのに、じとくした紺足袋は、お定りと言つても可からう。

鼻緒の緩んだ薩摩下駄を引摺つたが、袴腰に手拭を提げて居る、と雑と並べたあとへは、些と飛離れるやうだけれど、墨繪の蘭に、何やら題字のある扇子を片手に、襟を寛けて、絶えずのろろと煽ぎながら、歩行きながら、半ば眠るやうに其の手が留まると、

「はッ。」

と云ふ溜息。で、其の毎に、腰の手拭を抜いて、よれくの蛇の死骸のやうな奴で、ぼたく沁み出す額の汗を横に抜いて、

「うーむ。」と、唸ると、髪の毛がだらりと又下る。

チョツ一番、端を張つて、真中を引抜いて、向顔卷でもすればだのに、矢張りのろろと下駄を引摺る。

引摺り〜、

「はッ。」

と溜息して、

「うーむ。」と唸る。

そよとの風もない。

最う此の上は、蟹ほどな山蟻でも這出すか、早田の割目から蚯蚓が昇天でもしない分には、お

なじ男が、おなじ道をおなじ事をして行くより、何うにも書きやうがなくなつた。

眞蒼な蔭が出来た。さして大きくはないが、五七本、杉樹立の暗い根を、爪尖を洗ふばかり、石ころに打撞つて、颯と鳴つて、路傍を一條の流れが馳る處である。

杉の中には白壁が透いて、突端の其の幹のはづれに、藁屋の棲が出て、眞赤な鳳仙花と、おいらん草の咲いた背戸が見える。道は、其處から急角度で一曲りする處に、瀧を灌ぐやうな谿河が覗かれる。

透して視れば、水面は目の前に高く浮くが、臨めば、足の震ふやうな絶壁の底を、巖を裂く激流である。来るまでも、恚うした景色に二三ヶ所出會つた。が、岸からでは、晝顔の蔓をありつたけ伸しても濡すだけの手も届くまい。却つて濁を増すばかりだつたから。

渠は腰の抜けたやうに、此の路傍の小川に踞んで、水よりは苔の青い、流の石に、曲めた下駄を踏掛けた——辻つて、踏しめて、片足を突支つて、水晶の根を搔搔るやうに、両手をザブリと突込むと、

「お掛けなさいまし。」

と、片側から聲を掛けた。

「寄つて入らつしやい、お掛けなさつて——ビール、サイダー、ラムネ、シトロン、平野水もご

ぞいます。」

と、呼ぶばかりでなく、白粉を塗つて紅い襷を掛けたのが、眞赤なめりんすをひらくと、其の片側なる、杉苗のや、伸びた、低い樹立の下から、馬の間を潛つて出た。

馬の間は可笑いが、五六頭、放飼にしたやうに、のッほりと繋いである。——見た處では、此方の白壁構の農家の厩でもありさうに見えた。が、然うでない。魚類、野菜、藍なんぞ、身延の町は沼津から荷に入れる、其の往還の駄賃馬。……一寸した此處は建場で、此の處からは皆空荷であつた。杉はいまだ幹が弱い、あの大きなのが、一跳ね跳ねると、根ごと抜けさうであるから、すく／＼と手綱を繋ぐ柱が立つて居る。

其の奥に、實は小體な板屋に、蓑簾を張出した茶店があつて、……相場は十三、もんめん巾着捻込んだ、ひぬかの八藏でも、丹波の興作でも、一絞りにしようと思ふ姉さんが、下枝に巢をくつて居たのである。

三

茶店があつて、サイダー、シトロンが冷えて居て、姉さんが駈出して來たのでは、何であらうと袴の男が、それも、(龍神の水)など云ふ札でも立つて居るなら格別、いゝ若いもの分として、

路傍の流は飲みにくかつたらう。

「やあ。

と、のそりと立つて、ニンガリと笑つて、

「咽喉が渴いて、目が眩むやうで、何も見えんぢやつたでなあ。」

「お休み遊ばせ——貴方。」

「サイダーがあるですか。」

「へい、ございます、……何うぞ。」

ちよこくと引返して、小走りに杉の間を行くあとを、栗毛も、青も、馬は、ふツと吹く鼻風。

馬士はと見ると、ごろんく、其のまゝ荷にして鞍に着けたら、量勿で賣買が出来さうな形で、

いづれも、杉の幹に背筋を捻じつたり、腰を草に摺落したり、足を投出したり、口ばかりは同じ

やうに、あんぐりと皆寝て居る。

で、六七人の人数だが、どれも草鞋で地に居るから、涼しさうな處に置いた縁臺が二脚空いて

居る。唯一脚に——鳥打帽を脱いだのを、額に眞俯向けに附着けたまゝ、腹這ひになつて、諸侯

が竹婦人を召した體に、遠慮なく縁臺を縦に引抱いて、長々と突臥した、藍と紺の千條の單衣を

膚脱になつて、草臥れた茶無地の角帯を締めた、旅の小商人らしい瘦せたのが一人居た。

枕頭には鬱金木綿の古風呂敷の中くらるな包が置いてあつて、眞桑瓜を剥いた皮が皿に溢れて

堆い、其處で、空いて居る、も一つの縁臺の縁へ、渠は浅く腰を落して、扇ぐるみ、膝まで、

ぐんなりと胸を折つて休んだ。

そんなに近く附着きもしなかつたが、渠の袴の影が、旅商人の枕に映つた時、商人は、ひよい

と其風呂敷包を傍へ摺らした、此で見ると、——熟く寝込んだのではないらしい。

「おサイダ？」

葭簾から斜正面に言ふ姉さんの顔より、聲より、渠は背後の瓜の皮を、大儀さうにじろりと見

た。

「瓜があるねえ。眞桑がよ。」

「へい、上等のがございます。」

「あ、……上等かね。」

「よく冷えて居ますんですが、ぬるくなつたかも知れません。——一寸波替へて参りますわ。」

と、李もともに瓜を入れた、手桶を片手にツイと起つと、渠はいま疊みはしたが、要の緩んだ

扇の先で、陰気に壓へて、

「やあ、可い、構はんです。構はんです。其のまゝで此方へ下さい。——あ、あ、それも可いで

す、剥かんでも可いですよ。」

唯、剥掛けた庖丁を、西瓜の箆へトンと置いて、水を切つた眞桑瓜を皿にうけて持つて来る。此の姉さんが色白の薄彩色で、月夜だと風情になるが、濃い白粉に、きはすみを使つて、浴衣の色もあくどいから、瓜の黄色なものも毒々しい。

腹も空いて居たらう。いきなり、あぐりと噛んで、した、かに頬張つた。……ベツ／＼と皮を吐きつ、

「庖丁や小刀の刃を入れるとぢやね、鐵氣が附いて甘くないです。……む、——此奴は其の丸噛りに限るんぢや。……それからぢやね、また餘り度々水を替へて冷すと云ふと、矢張り甘味が抜けるんぢやね。」

立入つた事だが、手桶の水を替へさせないのも、庖丁を使はせないのも、手間を掛けると、あとで幾分か、茶代がと云ふ胸算用が様子におのづから顯れる。

其處で姉さんも横を向いて、

「でございますツてね、貴方は眞桑をめしあがるのがお巧者でいらつしやるわ。」
水提灯の間に釣した、簷馬がチリンと動いた。

四

やがて、眞桑瓜を片手に乗せて出て、疊んだ扇の要を返し、張肱して、猪の早太が鶴を刺すと云つた形で、ぶり／＼と核を突落す、と汁と一緒に袴の膝に溢れるので、縁臺を離れて、地に踞んだ。

實に、瓜を食ふ通を説いたほどある。扇で核を捌く工合は、鱸にまな簪を使ふ、と思ふ下やら、要に浸みた汗を、口で横撫でに、チュウベロリと吸ふ、大きな唇が一倍厚く、汚れた手を袴になすつたから何にも成らない。

が、漸と聲に元氣が出た。

「姉さん、おい、其の、ぬうと押立つた山が身延かね、本山ですかね。」

「いゝえ。」と寒冷紗の暖簾の中で、かぶりを掉ると、簪が鳴るやうに、簷馬が又チリ、ンと響く。蟬時雨の音を聞け。……流の音を搔消す暑さを、大屏風で圍つて、天を劃つて、溪河の上へ建

てめぐらした峻い峰は、太子ヶ嶽、笈ヶ嶽と云ふのであらう。此の邊甲州の山々には、殆ど目に着く樹と云つてはないから、影もこぼさぬ日盛の草いきれの壁である。

姉さんは、臉も重さうに、山の高さを仰いで、

「お寺は、まだ、もつと、ずつと前途ですわ。山も違ひますの。總門までもまだ十七八町ありますのよ。」

「……約、まだ半道以上……はあ、あゝ。」と再び欠伸まじりに大溜息を吐いた。

此の時——パイプパイと響いた。……ぐわたごろ、ぐわたごろ。大概想像でも解る。……杉丸太が鱗に成つて這出したわけではない。上りの馬車が通つたのである。が、通つたと思ふと、ど、ど、ど、どう、畜生。

馬士の一人は、夢を跳飛ばされたやうに晝寝から躍上つて手綱を取つた。……街道に近く杉の樹に結へた眞黒な馬が、恰も夕立の雲の渦巻く如く、陽の光に光つて、路の眞中へ鼻嵐を噴いて暴出したのであつた。

「あれえ。」

馬車に附着いて續いた俵が、馬を挾んで、ガツクリ止まると、乗つてた婦が肝を冷して聲を揚げた。

「別嬪だ。」

皆目を覺ました。馬士どもが口々に、

「よ、よ、お萬様。」

「氣の弱えお萬様だあなあ。」

爰にもある、建札が路々、處々に(お萬様)と云ふのは、身延山中興の大檀那。徳川二代秀忠の側室、紀州頼宣の母儀で、美女の聞え高く、しかも本堂建立の折からは、自ら屋の棟へ上つて、采配を取つて、烏帽子着た番匠等を指揮したと云ふ、潤達な女性で、別に其のお萬の方を開祖とする、本遠寺と云ふのがある聞く……

砂埃も、騒動も、颯と清流に洗つて鎮まつた時、突俯して居た件の旅商人風のが、のこゝ……と云ふべきだが、瘦ぎすで、ぎくしゃく氣取るのであるから、筋骨が軋むやうに起上つた。

「ほう、跳ねたね、跳ねたね。」

縮の襦衣の肌脱の両手をぐいと擧げながら、

「跳ねましたねえ、諸君、えらい縁起の可い事だすな。縁起の可い處でな、諸君、ほれ、此處にほれ。」

と、其枕にあつた風呂敷包を手許へ引いて、最う一度ひよいと手を擧げると、馬を壓へて口叱言を言つて居る馬士をはじめ、其の四五人。姉さんも暖簾から半身を浮いて出れば、——諸君のうち一人には相違ない、髪の長いセル袴の渠も瓜の缺片を持つたまゝ、頭のうへに高く伸びた、杉の葉の影の一寸翳す、商人の脇の下を、仰向けにぼかんと覗く。

「いま貴方がたが、夢に視なされた、山には黄金、海の白玉見たやうな、寶ものがほれ、此處におまつせ。」

と、そろ／＼に解掛ける。

五

「早くからな、御披露しようと思つたけれど、私が来た時は貴方がた皆さんで、李の核を握り合つて賭博の最中でおましたで。」

と生真面目な顔して、馬に交つた馬士どもを見廻しながら、

「勝つた方も、負けた人も此で得をば取んなはれ。」

なはれと云つて、擴げたものは――

「こら、模様入、上等のナフキンや。俗に血敷と云ふのどすが、卓子臺、膳の上へさいて飾つたら最後、忽ち華族方の晩餐どすせ。紙製ではおますが、汗取、鼻拭にも持つて来い、洗濯が出来ます。洗濯がな。紙で洗濯の出来るのは、まあ、他に類はおまへんやろ。さ、……手巾、此は上等、貴婦人令嬢持、本麻や。藍の刷繪で花鳥風月とおますわい。――處で……此は又頗る、至極最上等の本羽二重、……本羽二重に、かう縁が刺繡の手巾どす……――値やない、値やおまへん。」

刺繡だけの手間にもならへん。然うかと云うて、此れ私が叔父さんに唯貰うて来たわけではないのや。唯貰うたかて冥加として、こんな安値で御披露の出来るもんやない。よろしか。まあ、見て見なはれ。此の羽二重の手觸と艶のよさ。其のいにしへ、衣通姫と申すは、これを身に着けて居なはつたで膚が透明つたんやな、後光が映します、……一寸頬邊へでも當てようなら、ヒヤリとして、ツルリ、トロリの、じゆッ／＼と溶けますわい。――羽二重膚とは此の事や。よう、見なはれ。……な、貰ひもせにや、盗みもせいで……また眞個の事や、搔浚ひ、故買犯でないんが、何で、そんな安値で賣れるかいなと、此處が肝心な處やわ。――こりや一體が横濱製の輸出ものや。輸出ものも、上中下段々おます、が私が此處に御披露する、此は皆華族、豪商、紳士向のもののみで、ダスにも一枚にも、そりや吟味の上に吟味をせにやならんのや。處が、千萬と數のうちには、絲が一條抜けたり、小耳が一寸曲んだり、毛ほどの疵があると最うあかんやろ、よつて、選ぬきのあとは、皆カン／＼に掛けて目方賣りや、よろしかな。それ、何貫匁と云ふ中から、私など小商人が、――恥を言はんと聞えんが――手に入るのは分銅こぼれでひらく／＼と風に飛んだ、それこそ拾ひもの同然やよつてに、ほんの絲屑の値で御披露する。よろしかな。正直に疵ものどす、が、手に取つて御覽じろ、顕微鏡でなうてから、貴方がたの目に見えるやうな疵があつたらお目に掛らん。さ、品ものは、まだ幾らもある。……其の上お買ひなさる工合によつては、一目、

夢中恍惚たる處の繪葉書を景物と云ふ特典も備へとるで。」

「君、君……一寸君」

と蝶が這上るやうに、踞んだ肩を縁臺の上へ揺出して、袴の渠が聲を掛けた。

「あ、兄さん……お待遠や、さ、入替つて遣んなさい。」

「は？」

「私が方は、氣長うせんとあかんよつて、中へ挾んで遣んなはれな。」

「は？」

「貴方、藥など賣りなはるのと違つたるか。」

「串、……串戯ぢやあない、生々藥館、お一、二、……串戯ぢやあない。」と、渠は腕まくりをし

て、ぬつくり立つて、懷中から出した雑誌を扇子の平でポンと敲くと、開けた題字が曰く（歌舞

之菩薩）と云ふのであつた。

「僕はな、即ち此の雑誌の記者だぞ。」

さては、歌舞之菩薩の記者か。従つて名も分つた、渠は熊澤常雄である。

「あ、私は又……濱で一所に居よつた、臘臍と、な、此の頃何首烏を賣るお友だちが、よう貴

方に似とるもんやで……えらい、こりや失禮を。」

「失禮もないですがね、（と苦笑して）君が其の風呂敷の奥に持つて居らるゝ、光つた書籍は何で
すか。」

「此どすかい。」

あ、其は紅葉先生の「紅葉集」。小形本の一冊である。

雲の峰に、馬が高く嘶いた。常雄はぎよつとして退りながら、及腰に撓めて視て、

「は、大先生——えらい文豪ださうですな。——愛讀、崇拜をなさるすか。」

へ、（と急にニヤリとして）私も何ですが、其の、へ、情婦が其の、へ、貴方も小

説が好きどすかい。」

熊澤は可厭な顔して、

「好きにも嫌ひにも、僕は、えらい難儀をしとるです。小説なるものためにですよ……」

六

「あ、熊澤か、君かい。」

「はつ。」

と言つて、前段の袴が、爰で、座敷の入口にぐつたりと手を支いた。——身延山の山門、石段

下の旅館東館の二階、角座敷十疊の真中に、卓子臺を控へて、圓い膝のはだかつた、貸浴衣の大胡坐で居るのは、強雲居士、と云ふ、世態と學問を七分三分に頬張つて、禪を横衛へにした教育家出の書畫屋だが、商人らしい處は更にはない。禪の野狐なるが故に、態度の倨傲な男で、鬚も髪も狐色した五十ばかりの、此が雑誌、歌舞之菩薩の發行人、兼社長である。

「唐突ぢやつたなあ——まあ、寄れ。」

と、團扇で一つ麾いて、

「取次の下女どもが、熊澤ぢや、面會ぢや言ひをるで、山の坊さんに同姓のがあつて出て来たか思つたわい。君とは薩張氣が着かん。何うしたか。」

「はッ。」

「うむ、何か要件ぢやらう。何うしたか。急用には相違ないが、わざ／＼此處まで出て来たんは意外ぢやよ。」

と其の意外がらるゝ程、熊澤は、幅の廣い肩を、土用の餅に搗いて、べつたりと叩頭、

「え、實は甚だ唐突でして、恐縮であります、全く何うも、こゝに止むを得ません事が突發をしましたのでして、はい。」

と溜息とともに、勢ひなく一寸句切つて、少とばかり膝行出ると、懷中から例の一束ねの雑誌

を引出して、

「此の件なのでありますが。」

「あ、雑誌が。」

と鼻を仰向けにして上目を茶色に使ふ、苦々しい顔色である。

「何うにも、遣り切れん事が出来したのであります。」

「遣り切れん……何が遣り切れん。」

くなくして居た團扇が、卓子臺の上に鮎子張つて、斜に睨んだ。

「襖一重だ。……隣室には客も居る——丁度參詣に行つたが——遣切れんは穩かでないな。」

おい、外聞もあるものだ。印刷所をはじめとして、皆相當に手順が運んである。遣切れんやうな仕事を君に任せて置きはせんではないか。それにぢや、今時そんな要領を得ない事を言うて來て何うするんだ。第一昨日にも發行して、今日あたりは此處へ雑誌が來るぢやらうと待つて居た處だぞ。うむ、何うも甚だしく不都合ぢやね。」

と言ふうちに、いよ／＼其の不都合な事を、おのが口について手繰出したと見えて、嵩に掛つて、

「馬鹿な、遣切れるにも、遣切れんにも、いや、驚いた、此は驚いたぞ。——君、おい君。」

「はッ。」

「何か、いざこざを言つて、其處に捻くつて居る其奴は、……何だね。——其の様子で見ると、出来上つた雑誌では勿論ないのだね。」

「何とも、先生。」

此の禪骨を得た骨董屋を、セルは先生と言ふと見える。

「……實に恐縮でありまして。」

「恐縮は此方でするんだ、爲て濟む事ならばだ。——雑誌は後れる……遣切れん。いや、遣切れんは俺の方だ。……此は驚いた、大變な手違ひに成つた、少からず違却したなあ。」

と疊みかけられるたびに、ハツ／＼と息を切つて垂々と汗を流す。

見ても暑さうで、誘はれた強雲も、言の切めを、忙はしく團扇を煽つたが、

「おい、串戯ではないと云ふに、……一體何うしたと云ふのかい。」

「はい。」

「さつさと要領を饒舌り給へ。」

「はい。(と一層重くるしく)……其が、その、小説の事であるのでして。」

「あ、風俗壞亂か。」

「え、まだ其處まで至らんのです。」と、言ふ事が變つて居る。

七

しかし考へて見ると、第何巻だか知らないが、まだ發行に至らない、所謂「遣切れん」雑誌である。中にどんな小説があらうとも、風俗壞亂が表面に顯れる理由はない。

「ふむ。」と言つて、強雲は其意を得ながら苦笑した。

「先生も御承知であられます通り、今回、掲載の小説は、志摩子の作、一篇だけなのであります。」

と此處で漸と扇子づかひをはじめた。

また其をもどかしさうに、

「知つとるよ。此處へ來がけに、俺が丁としめ切つて、校正をするばかりにして置いたんだ。——それが何うした。」

「其の校正が生まれてからの問題でありまして……元來今度の小説は、志摩子が自身に校正をしなければ成らんからと云ふ約束でありましたので、一昨日、其の校正が生まれたのを、早速持つて出向きました。勿論、至急を要します事ですから、私は印刷所に出張して居りました。」

見ました。志摩子は、黙つて、にがい顔をして居たのでありますが、偶と私が印刷面に誤字のあるのを發見しました。原稿の誤謬ですか、印刷の過失ですか、まさに間違つて居るですな。……で、其私 は萬年筆

で面接は軽んじたものだなあ。」

「否、輕蔑されましても、其は止むを得ません場合もありますが、其時は必ずしも然う云ふ意味ではなかつたのでありまして。……就きましては、取敢ず……此處にございます。」

とペイジをだらしなく重ねた中から、一綴の校正刷を取下さうとするとするくと疊に上る。一通り山の風が通つたが、小口を吹煽るほどではなかつた。

「何うか校正を願ひますと言ふと、(置いておいでなさい、晩に見ます。預つて置きます。)と言ひますから——實は至急を要しますのでして、既に前後とも校正済になつて居りますから。……此處でお待ちいたしますから。(何うも困る。)と言ふのです。雖然、印刷所の都合、従つて發行日の關係がありますからして、是非即刻お願ひ申したい、或は貴下がお読み下さつて、私が訂正をいたしますなり、或は私が読みまして、貴下が御訂正なさいますなり、いづれとも御都合次第と、膝詰で此の校正刷を開いて、紙面と、志摩子の顔とをじろりくと見較べて、敢て一歩たりと雖も退きません。」

其の足で參つたのでありますが、はい。東京は油旱の空が可厭に曇りまして、堪らなく暑かつたのです。午後四時頃に、志摩子の門を敲きますと……

「おい、君。……作者の許に敲くやうな門があるのかね。」

「は、否、門はありません、先生の一寸木臺の御門の如き、奥行はありません。門から直ぐに玄關でありますのでして。」

「第一、眞夏の午後四時に、門を敲くには當らんぢやらう。」

「否、はい、此は然しながら言語の形容でありまして……某月某日、某氏の門を敲く……」とまじまじと饒舌る。

「馬鹿な。」

と團扇を打棄つて、

「そんな事は何うでも可い、早く要領を話し給へ、で、何うしたんだ。」

「女中が取次に出ましたのに、來意を通じますと、志摩子が自分で玄關へ出て參りましたが、少少お願ひ申したい事と言ふと、……通されました。……玄關の、狭い處で、面談をいたしました。」

「ふむ、苟も俺が經營する歌舞之菩薩の編輯主任——主任にも何も君一人には一人だが——玄關

を揮つて、ぐいと棒を引いて訂正をしたのであります。此であります。」

と、疊に押へて、眞桑瓜の汁に染つた太い指で突いて見せた。靈山の麓とて、幸に蠅とも成らず、インキの形が蟻に見える。

處へ、……軒に迫つた草山を、白地の浴衣で、廊下から。……

八

濡手拭で耳許の汗を押へて、片手で浴衣の袂を取つて、伊達巻も紐もしめない。豊肥した白い胸を遺放しに、紅緒の上草履を蓮葉にばたつかせて、風呂から上つて来た三十三の年増がある。「おや、お客様。」

湯の香と、白粉の薫が、もう耳に近い琵琶とともに頸筋へふはりと来たので、小鼻をびく／＼と動かした熊澤が、校正刷からひよいと目を離すと、開放しの座敷の入口に其の姿で——甘さうな魚のむしたてに、薄紅をさした御馳走のやうである。

瓜を食つた腹をぐうと鳴して、黙つて手を支いて叩頭をした。

此を立身で見つて、軽く頷いたばかりで、婦は山の影で萌黄色な、其の二階の欄干に手拭を一煽り煽つて掛ける。

其の時、ひら／＼と二つ飛んだ黒い蝶は、高く高樓に戯れたのではない。向うの山懐の麥畑の眞日向を練る暑くるしい影であつた。

「何うだ。」

「い、湯でしたの、誰も入つて居なくつて。……貴方も何う？」

と、熊澤に、ものを問ひ掛たらしい、其の強雲の（何うした。）を引取つて、

「御免なさいよ。」

と水紅色をたつぷり見せて、入口のすぐ左側に立掛けた衣桁の傍に、腰をふつくりと廻して、山に對しつ、鏡臺に向つたが、坐る時裾を放したので、半身は夫れ水紅色のみで、熊澤の横目には、片乳が其のすつと窪む處まで眞白に、影をほんのりと紅く覗かれる。

「あゝ暑い。」

と襟を脊筋に抜くかと思ふと、其れなり兩膚を脱いだのである。圓々として柔滑い、二の腕のくびれの浅い、小づくりな婦であつた。

「おい、君——其の方が有名な琵琶のお師匠さんだ。山端築野さん……それ、雑誌の今度の號に、談話筆記の出で居る方だ。——師匠さん、紹介をしますが、其は熊澤と言つて本社の記者です。」

熊澤は、漸と此の時——強雲には、眉毛の濃い、頬の尖つた、看護婦上りだと言ふのに、可恐

くヒステリーな細君のあるのに心着いて——彌が上に、どろんとした目を睜つたのを、だるさうに伏せて、遣直しのお叩頭をした。

「御高名は……え、え、え。」

「何ういたしましたして、私こそ。」

と、ちぐはぐな、何か會釋をしながら、

「ほ、ほ、うまい態をして失禮ですわね。」

と眉をひよいと上へ上げて、姿見を、覗いたが、

「熊澤さん。」

「は。」と最う名を覚えられたので、手も膝も、もちく／＼する。

「失禮ついでに、一寸其の手拭を取つて頂戴。……餘計なことをしたわ、私。……温泉場なんか

ぢやあ、一寸欄干に手拭の掛つた處はい、風情なもんでせう。……頼まれもしないのに、うつか

りと、温泉でもないものをよ。ほ、ほ、ほ、それに、こんな風をして、貴方の前を行つたり來たり、

裾風が立つてお氣味が悪いわね、ほ、ほ、ほ。

と、お壺口と言ふので莞爾。

熊澤は勢ひよく廊下へ出た。變な形に、手拭を擴げたま、小鼻を動かして、

「此ですな。」

「憚り様。」

と、つるりと肩へ乗せた形は、東京の婦でなからう。で、もう頸許から髪の毛を繰出すやうに、

束髪の鬢を搔き、搔き、

「社長さん、……先生い。」と、尻上りに引張つて、些と訛る。

「あ。」

此も見惚れて居たらしい。

「其處の煽風機を動かして頂きたいわね。こら、こんな汗。」

と白い腕をだらりと見せる。

「や、此奴、先刻から、くるツとつて動かんぢや。」と、強雲は、活禪の一機は此處だ——團扇で

煽風機を颯と搏つ。

九

今度は築野が、白粉刷毛で、長い頸筋を敲きながら、
「おや、此室のは壊れて居ますか。——然うすると……隣座敷にあるんですがね。」

「有るがね。」と、まだ何だか強雲は、鼻の下を伸してぼやけて居る。

「取替へたら何う? ……熊澤さん、貴方、お隣へ行つて取替へて来らつしやいよ。——構ふもんですか。第一、分りやしない。今誰も居ないんだから。……あ、一寸、此方を持つて行かなくつちや不可い。憚様——ほう、でも悪くないでせう。お隣は女優さんだから、いま居なくなつて。」

琵琶と言ふ音楽家のいひつけで、當代の女優の座敷から煽風機をすりかへるのである。袴を穿いた熊澤は、人間として一大使命を果す如く、据眼で立つて行く。

小さな聲で、

「泊めるの? 今夜。」と、築野が一寸眉を擧めて振向いた。

「う……いや、泊めるにしても、安宿へ追放す。」

立入つた事だが、此の對話で、二人の間は大抵分る。一つ蚊帳では邪魔に成る。別に座敷を調べては不經濟だ。故に安宿へ……

追放される……とは知るまい。大使命を首尾ようした熊澤は、ト西瓜盗賊と言ふ處を、ものがものだから、透切のある月の模型を抱いたやうに捧げて来た。

「い、香ひがしたでせう。」

「は、強烈でした。」

とづんと置く、肩がだらけてニヤリとして、

「薔薇の花園へ入つたやうです。」

「些と暑くるしいわね。でも、早速、其の花園の餘り風ツて處を頂戴しませうか。」

「や、飛ぶ、飛ぶ。」

と、熊澤は、慌てて強雲の此方を摺下つて、校正刷を両手で壓へた。まともに築野の湯上りの膚へ向けた一條の風に、疊を浮いて、攫はれさうに成つたのである。

壓へた中から、光澤紙が一枚、つる／＼と風に誘はれて、滑稽けた波を打つと、軽く築野の膝に留まつた。

其は、しかし、煽風機如きに怯かされて、しどけない婦の膝に寄るべきものではない。雑誌(歌舞之菩薩)の第一面を飾る善の寫真版の佛體で、跣坐して印を結ばせ給ふ。正面が寫してある。見るからに古色の蒼然たる木像である。

蘆の裡から光明が輝いたのでもなく、樹の梢に金色を放つたのでもない。が、とに角、だしぬけに、佛が風に乗つて、仰向けにみえたのであるから、此の落着きました女樂家も、すつと膝をしめて、水紅色を細くしたが、

「あら入らつしやい」
色が黒いのと、白だけの相違で、其の佛體とおなじやうな、露呈の腕を伸して、刷毛を片手に拾つて見た。

「おや、先生。」

「其ぢや、師匠。——貴女から頼まれたのを、本山に賣込みに来たのは、——寫眞は別に、側背、正面とも参考を持つては来て居る。が、實は雜誌が出来の上に、口繪にしたので見せる方が數段信用を増すのぢやがね。……此の本山に居る、俺の知己が、京都へ旅行をする時日があるし、旁遅れると間に合はんから、四五日の處だけれど太く急いだ譯なんぢやよ。」

原は、築野の夫と言ふのが、本職ではないが、恚うしたものの賣買をするので、何處か甲州邊の山寺から、むしくひだらけなのを、馬に積んで持出して、天龍川を船で、東海道を、取寄せたと言ふ。丈六ではないが、可なり大ものなのである。

寫眞版の裏刷には、仔細に時代をしらべて、聞いても驚くやうな古代の巨匠の作銘が記してある、——餘り嘘らしいから、其の記事は此處に省くが、強雲の綴る處である。で、内々だけど、抽象的に記せば、定朝作、虚空藏菩薩としてある。が、實は彌陀の像だと言ふ。しかし、考へても分る、身延で賣込まうと言ふのであるから——

十

次手だから言ふが、強雲が其の知己だと言ふ、本山に有力な役僧某を介して、此の大美術品を賣込むに就いて、景品、附録、何だか、其の邊はあいまいだけれども、豫め申出でた一儀があつた。

それは、賣買上、決して金銭づくのことではないが、東都の樂壇、日本の琵琶界に於て、女性の明星と仰がる、山端築野と言ふ美女が、藝道の冥加、また修行、尙ほ祈願のため、當七面山の仕器と承はる、白虎の琵琶を拜借して、本堂に於て、夜涼の松風に、精進の祕曲を奏したう存じ侍る、と言ふのである。

處が、坊さんたちも知らなかつた。當山奥の院に、白虎などと言ふ名器の琵琶があるのか、無いのか——申條は解つても、第一七面山と言へば、山奥上下幾里の難所で、いかに地續きだと言つて、鍵を持つて庭へ下りて寶藏を開くやうな次第には行かない。

勿論、之は辭退した事は言ふまでもなからう。何、強雲に言はせると……七面山の御堂に、然うした琵琶があるんだか何だか、一向知らない。虚空藏菩薩賣込の餘興に、おなじお座敷を勤めるにしても、對手が名にし負ふ靈山の事であるから、恚う言つた方が、築野の藝に勿體が附く。

……要するに、白虎琵琶が、青龍の琴でも、朱雀の三味線でも、一切平等なのださうである。然らば、とまた申出た——然らば美女の妙手が、家藏しまする處の蘆荻と名くる琵琶を以て、御堂に通夜をいたしたう侍ると言ふ。且は、當年世を去つた築野の夫なるものの供養に備へたいと言ふのである。

役僧たちが會議した。

琵琶の妙手が、身延山に通夜して、玉釵敲竹の曲をかなづるのである。平家にも源氏にも是は一山のものごたりに成る。善惡ともに一大事であるから、千ヶ寺詣が太鼓を叩くの、庫裡で晝寝をしながら、うとく聞いて居るやうなちよろツかな事には參らぬ。一應、管長貫主の耳に達せずしては、……急に返答も成兼ねる。と成つた。

然らばと、三度強雲から……然らば、御許可相成るや否やにつけても、とに角、下しらべ、御見聞として、旅館の樓上に、御下山が願ひたい、と申出た。

之には異議がない、強雲の知己をはじめ、巨樹、鬱林の梢、雲の峰から、籠に下るべき、緋の法衣、紫の袈裟、靴の數まで分つたが、是が今夜に成るか、明日に成るか、返事次第……

と言ふ、いま場合なのであつた。

「まあ、先生、社長さん。」

と一度、鏡臺の上にとつた、築野は、佛像の寫眞版を視ながら、膚を入れながら、

「不思議だわね、一寸。」

「何がぢやね。」

い、えさ、端ッから此の佛壇の寫眞の顔は、内の夫とよく肖て居ると思つて居ただけど、恁う成つて見ると、餘計肖如なのね、御覽なさい。」

と、衣桁の伊達巻、些と派手な桃色なのをずりと取ると、其のまゝ占めもしないで、晴の座の衣装を調じた行李の傍をはらくと立つて、卓子臺へ——床に餘つた金欄の袋入、即ち蘆荻の琵琶を横にして膝をついた。

「ね、之ですもの。」

「は、こ。」

と強雲は、少く氣のなささうな顔色である。

熊澤は額の汗を横撫でして、恐るゝ乗つて出た。

「ほらね、まだ其にをかきなことは——夫さんは、年紀を取つた上に身體が弱つて、あの通り、足腰が冷えるんでせう。兩足と膝とへ二個づゝ、腰のまはりへ三つ、腕から脇の下へまた二つ……六月の梅雨だと言ふのに、梅雨びえがするつてんで、電氣行火を都合九個。雁だと、ふやく」

と宙へ上りさうに、骸骨のイルミネーションと云つた形に抱いて居たちやありませんか。……御覽なさい、此の佛様の手足と腰の、同じ處の、同じ影が隈を取つて同じだわね。」

十一

作者は此が怪談でないのを少からず遺憾とする。……古ものの佛體で一儲しようと思つた老夫の死際の狀を今見ると、血の冷えた身體に抱いた電氣行火の何ヶ處の數の當り所が、阿彌陀様の寫眞の手足脇の下の陰影に、そつくり其のまゝだと言ふのである。

「ねえ、先生。」

「あゝ。」

「老夫が成佛した證據だわねえ。」

と築野の顔はすましたものである。死んだのが梅雨上りだと言ふから、まだ百ヶ日は経つまいに、強雲とこんな處に居て居て、死んだ亭主は成佛をさせられつたらしい。

何、亭主を成佛させるぐらゐは何でもない。此の婦の新しい發見だと言ふのを聞けば、爾來何處の家でも女中が拂底で難儀をするが、それには養女に貰つて、娘にして働かせるが可い。それだと給金なしに追廻される上に、手輕に出て行く憂ひがないさうである。現に築野の手許には二

人居ると言ふのである。——誰も應じない方が可からう。

「成程、成佛かな。」

と、佛像を横目で見つゝ、強雲はそれでも太い眉に陰を加さした、目を外して、

「で、何うなんぢやい、熊澤、其の件は。」

「は、乳瓜。」

「何？」

先刻の眞桑と、目の前の豊肥したのが胸に充滿に成つて居る熊澤は、うっかり饒舌つて、急に眞赤に成つて、

「雷です。」

「何だ、雷だ。」

築野も其時欄干を見た。崖の麥畠で劃られた高廂の間の空は雲の峰も差覗かず、靜なほど濃く蒼い。熊澤は扇の先で膝頭を揉みく。

「え、其の何です。……志摩子がです、陰氣な可厭な顔をしたのを、或は私が突如萬年筆を揮うてから、字の誤りを訂したのが、癢に觸つたかと思つたですが、……狭い玄關で應接をした、それも此も、即ち雷ゆるゑであつたですな。……ごろ／＼と鳴るです。遠雷ですが、成程鳴りを

るです、私が一步も退かないで、即刻の校正を、餘り嚴格に要求したものですから、實は、と志摩子が打明けて言つたのでした——（此の體裁だから校正處ではない、）と言つて、玄關の襖を半分ほど開けて見せました。斜達の座敷には、蚊帳が釣つてあつて、而も雨戸を閉めて眞暗です。此の慘憺たる體を見ましては、其の上、斷つてとは言惡うございましたので、翌早朝を約しましてから……、其の砌、豫て先生からお心着けに成りました（薄謝）の一封を差出しまして。」

「自分の方で薄謝と言ふ奴があるかい。」

と築野を一寸見て苦笑しながら、強雲は卓子臺の上を何もなしに手を圓く擱んで言つたが、

「薄謝……」と、つい其の物質的なのが、性的に變じて出かねない鼻つきで、

「おい、君は薄謝と記くのかい。紙包に……間抜けぢやないか。それだから俺が堅く然う言つて置いたんだ。」

「そ、それは先生の御命令通り、まさに（御筆代）と認めて置きました。」

「私たちだと（御絲代）と言ふ處だね、一番輕少なものだわね。」

「澤山なんだよ。……ふう、それで文句はなからう。」

「あります！ 第一、それからして大にあります。何しろ、志摩子の言ふ處の、約十分の一に足りんですからな。（此は何うしたのです、）と言はれた時には、遍く全身に汗を及ぼしたでしてな

あ……はあ。」

と怯えたやうな聲をした。

「ふん、淺ましい奴だな。何かい、其の嫌だと言ふ雷の中で一封を開けて見をつたかい。」

十二

「まさかに、然うでもなかつたですよ。」

で、熊澤の言ふ處に據つて、其の遣切れなく成つた仔細を綜合すれば恚うである。

歌舞之菩薩の此記者が夕立の中を傘まで借りて内へ歸つて、雨が霽つて、其晩は涼しいから可い心持に成つた處で、所謂志摩子から速達で葉書が届いて、「都合これあり御誌へ拙稿の御掲載は斷然お斷り申す。」と言ふのであつた。こんな突張つて堅く出たのは、却つて折易いものだから、何、何うにか成ると高を括りながら、聊か氣に成らない事もないから、兎に角、翌早朝に向くと、志摩子に言はすれば忙しいさうだが、それとも工面が悪いんだか、何だか、不精髭を生しても、雷雨の中とは違つて、雲の晴れた顔はして居た。熊澤が其處は記者に必要な外交術を用ひて、「先生、何でも構はない、「先生」と奉つて、「意外の御書面でありまして、昨夜は一睡もいたしません。」と先づ泣出しさうに目を擦つて見せると、「眞にお氣の毒ですが、あれはお斷り申します。」

と言ふ。「飛んでもない雑誌が成立ちません、何かお氣に觸つた事が」と探りを入れると、何より「第一お約束が違ひます。今度のは唯何某として——自分にも餘り粗末ですから匿名の分にお約束しましたのに、校正を見ると立派に……いや、此方の名は立派でなくても、活字に立派に組んであります。」と言つた。

之は道理で……はじめは他に順おくれにかさなつた約束もあるし、極暑の折だし、平に起稿は堪忍をしてくれろと言つたのを、熊澤が「腹を切る」と社長に教つた通りの詭辯を放ち、扇子を逆にセル袴の下腹へポンと突込んで、「腹を切れば化けて出る。」と……可哀相に、雷に蒼く成つて震へるほどの臆病作者を威かして、たうとう働かせて、それでは全くの間に合せだから匿名に願ひたい、萬止むを得ませんければ遺憾ながら、と約束して——處で「御稿料」と聞いた時に、志摩子が請求した額の、件の、(御筆代)は幾干か知らぬが、殆ど十分の一だつた事は、前段に熊澤が自分で言つた通りなのである。

言ふには及ばぬ。——社では初めから薄謝どころをさへ仕拂ふつもりはなかつたので……一寸人の氣のつかない事がある。……一面識のない作者の處へ、社から原稿を取りに行くのに、何處で搜したか、作者志摩子其の人の檀那寺、菩提寺の和尚の懇な紹介状を持參した。蓋し心ある人は應用すべきであらう。

雑誌が歌舞之菩薩と題して、天下に宗教と音楽の普宣を趣味的にすると云ふ看板だから、お寺の坊さんが手助けをするのに不思議はない。また以て強雲の手腕を見るべしである。……

坊さんが木の端、竹の折なら、人には鉋屑か、蛙の干ものやうに言はる、作者にも、兩親の墓のない事はない。「檀那寺の和尚の紹介には、何とも弱つたよ。」と志摩子がまた後に言つたさうである。

さて、處で……其場合に熊澤が、「何とも恐縮の至りですが、先生のお名前が實は希望なのであります、讀者一般の切望の表現がうっかり記者の意識に暗示を與へますため、お約束にも拘らず、殆ど夢遊病式、盲動的に御署名をいたしました。」と巧い事を——何、内々は活字に成るのを喜ぶんだ、構はず遣了へ、と遣了つたやうな氣振を見せないで、然う言ふと、「其は、改めて匿名に願つても可いとして、昨日御持參に成りましたあの紙包は」と、此處で來たから、驚破とばかり、昨日の雷には自若とした熊澤も、之にはさすがに、遍く滿身の汗に成りました、なあ。

「志摩子が、(私は先生でも大人でもない、米を買つて食ふ稼人だ。)と潔く言つたですよ。潔く言つたと思ふです——比例に見ればです、たとへば、百圓の處へ、御筆代七圓に過ぎないのでありますからして、なあ。

「馬鹿な、それぢやから薄謝とも言はんぢやあないか。」

けれども志摩子に見ますればです、なあ。」
「一寸、(しまし、) (しまし、) ッて、何の事。」
と築野が言った。

十三

「あ、近頃の何だ……文士といふ奴ぢや。」
と、強雲は魚の異名のやうに言つて退けた。築野が其の言葉の下から、
「それにしても、日ましものやうだわね、しまし、ッてさ、一寸。」
對手を撲き下したから、今更ながら御筆代の餘り軽少さに、追思の冷汗を流して居た熊澤も、
稍勢ひを盛返すと、扇子も膝に立つて来て、
「で、其の……(でありますからして、決して玉稿料とは申しません——御酒代、御菓子と言ふ
すらも憚りまして、御筆代といたしました……何分微力の社中でありますからして、偏に御厚意
に縋るのでございます。)と言ひますと、(檀那寺の和尚の紹介で繰廻して働いた、其の勞力を御社
に對する厚意だと思つて下さい。食つてる米の代は別に御請求申すんです。)と、志摩子も、百に
對する七に對しては、聊か中腹だつたと見えまして、此方は四則應用の處を、二一天作で眞二つ

に割りつける勢ですな。——恚うなれば、豫々先生の御指導の如く、若狭之助對老怪師直式を用
ひて、無暗に拜倒したです——結局、志摩子が「宜しい、(貴方) 私に言はれたですな。(貴方に
向つて腹を立つた、其のあがなひとして酒一升買ひます。お持たせの御筆代……中は見ましたよ
——見ましたが、此の包のま、清く貴方に差上げます。)と言ふのでして。」
「何うしたい。」

と話を掬ふやうに、強雲は、貸浴衣の大きな肩を入れて訊く。

「御先生——此處で、御の字を使用しました。あつと感極つた顔色をしましてな。(御先生の御氣
象では、あつ成程、却つて其の方が潔く入らせられませう。では……)と扇子を疊にぴたりと置き
まして……」

と熊澤は、其時と同じ仕種で、髪をだらりと下げつ、言つた。

「きれいに速に頂戴しました。——即ち其の金子を旅費にしまして、此地へ出向いて參つたやう
な次第でございます。」

「む、要領を得て居る。——は、は、は、其處は、大に要領を得たよ。」

と、口も下腹もぶくくくと、毛蟹が泡を噴くやうに横笑ひと云ふのを遣る。

「は、は、は、——ぢやあ、君、それで萬事解決をしたんではないか。……然るにぢや……」

「は、然るにです。潔く一封を放擲したに就きましては、条件があるのです、と云ふのはです：同時に、明かに署名を抜いて、何某とだけにして貰ひたい。——と志摩子の云ふのが、此處にございます、此の小説欄です。既に校正と云ふ人質を取られて居るのであつて見ますれば、最初の約束ではございますし、それでもとは、如何に厚顔に策略を交へ、外交を加へても申されません。よつて確に其の件は請合ひまして、痺れが切れて、立つて、よろけるのを合圖に、雙方笑つて、機嫌よく、志摩子も送つて出て、別れました。

處が、處が其の足で、赤坂の活版所に向きました處が、ですな。見通しの目次の面が最う刷上つて紙型に取つてあるのでして、此には、丁度小説の題の下へ、志摩子の署名がしてあります。御存じの通り、此を遣直す日に成りますと、経費にも日數にも多大なる損害を來すであります。——剩にですな。愈此の志摩子の校生濟を、印刷に附する段に成つて見ました處が、十何行ばかり次の頁へはみ出しがありますのでして、此を活かすとなりますると、機械を一臺と、紙を部數だけ餘計に殖さなければ成らないと云ふ羽目に立至つたことを新に發見したものでありますからしてからに、」

と息せいで、

「其の、先生の所謂三十棒を啖はす如く、赤インキで棒を引いて、約其の十何行を大上段的にス

ハツと……切つたですなあ。」

と扇子の脈を突張つた。

十四

むかしの薩摩つぼの言種ではないが、ぶつた切つたは、切つたとして、目次に歴然と顯した名に對しては、熊澤はさすがに良心に咎められた……さうである。

第一、そっくりと……言ふほどの金額ではなけれど、一寸頂戴に及んだ一封につけても、相濟まないやうな氣がしたので、今度は、著しく重い足を引摺つて、午後四時頃に、印刷所から三たび志摩子の宅へ出向いた。が、もう此の時は、通された處で、書齋なり、座敷へなり押通るほどの度胸はない。此處で結構と、折から客でもあつたらしかつた志摩子を、上框まで呼出して、格子を片方開けたまゝの逃構で、右の目次の次第を、弱果てた聲して言ふと、お氣の毒だが、それだけは何とかして貰ひたい、眞個お願いだ。匿名に、と言ふから、「そ、そ、其が出来ますくらゐなら、上り悪い處をお詫には参りません。紙が印刷済に成つて居りますので、其の紙數の處が、三千部刷つて三千枚。と少々懸値をすると、「其は餘りに貴方の方が勝手過ぎるだらうと思ふ。紙數だけ刷直すくらゐの事はして下すつて差支へなからう。と言ふのを、「否、其だけの融通が

「延身驚」と、強雲の團扇は、蚊を打つに髣髴たり。

きますほどなら、御筆代の處を最う些と差上げる事にも成ります次第で、何分微力な社中でありますから。」と押返す。餘り無責任ではないか、社長さんに懸合ひたい、「強雲さんと言ふのは御在社か。」と言つて、屹と成つたから、押留るやうに兩方の手を開いて、當身延へ旅行中だと言ふと、「電話を掛けて下さい……長距離の。」「旅館に電話はありません。」「仕方がない、御足勞だが身延までお出向を願ひます。」と、きつぱりと志摩子が言つた。

が、其のくらの事で、此處まで出向いたのではなかつた。

熊澤が、身延へ往復をすると成ると、唯さへ後れて居る發刊が猶ほ此の上にも遲滯するので、社に取つては非常なる苦痛であります。」と判ると、「此方の苦痛はお察しがないのだ、餘り勝手だ、勝手になさい。」と言つて、ドシ／＼座敷へ引込んだので、對手が強くなつて撲られないのを僥倖に、一時凌ぎに、まだ水を打たない格子をしめて遁げようとする、破裂した談判の方が、また玄關へ出向いて来て、志摩子が、「待給へ、いま來合せて居る友人が雑誌を出した経験があるから、其に聞いて當りがついた、我慢も意地も言はないが、それだけの紙の値なら自分で出ませう。」志摩子自身で紙代を拂ふから刷直して貰ひたいと言ふのである。あつと、感極まつた表情をして、「御先生、御氣象では、と頂戴をしようかと、一旦熊澤は思つたが、豫て社長強雲にいひつけられた發行日が大至急の件である。其處を料簡したから、何とも言悪かつたのを、強

て其儀も「御容赦を願ひたい。」と言ふと、口惜しさうな、未練らしい顔をして、「目次は其處にありますか、見せ給へ。」で、うっかり束の奴を懐から、すらりと出すと、昨夜睨んだ校正だから、小説の組方に見覚えがあつた——「赤インキは使はなかつた筈だが。」熊澤は吃驚して引込ませようとするのを見つけた。十何行、大上段的にスパツと切つて消した奴だ。「何うしたんですか。」と語勢が鋭く、顔の色が昨日の雷の時のやうに颯と變つたから、此方も狼狽へて、「決、決して御名聲に觸るやうな削減はいたしません、私が再讀の上、殆ど必要のない部分を打消しました。」と言ふと齊しく、「御名聲ですか、感謝します。其の御名聲にかけても立派に、斷然と御掲載を斷つて見せませう。」とすつくりと立上つた。

私は式臺へ手をついて、聲を震はし、身を戦かせて謝したです。「あつ御先生——一言もありません、すべて不肖熊澤の失態であります。が、此の失態のゆるに、御先生の御怒を蒙りまして、それがために、雑誌の發行に差支を生ずるやうな事に成りますと。——今般志を立てて苦學のために上京しまして、此の社の編輯によつて、微細なる報酬を……」

そりや、各自の頸窪だ。

「え、其の報酬を得て、社に寄食をしまして、晝間は、切々と雑誌のために働きまして、夜分小閑を得て夜學に通ひます。目下の處、此が私の生命なのでございますが、責任上の失策と申しながら、此上にも、雑誌に故障を來しましては、社長の信用を失ひまして、多士濟々の折から、無能小生の如きは、即日にも雇を解かれまして、立所に社を放追をされます日に成りますと、其時限り、食ふ事も、寝る處もございませぬ、青竹に縋つて故郷へ歸らねば成らぬかと思ひますと、昨日今日、志を立てて遙々と上京しました……其の故郷の父兄、親類……何よりも友人等に、今更合はす面もありません次第で。——と申しました時は、おのづから聲が咽び、臉が熱ッぽく成りました、はい。」

と熊澤は肩を縮めて、首垂れつゝ、一息ついて、

「實際、事實失望の結果、唯今御覽なさいませぬ、不肖此形骸も如何成ります事でありませぬか、我ながら心細うございませぬ」と罅の入つた框の三和土に、袴の引摺るのも構はず、式臺に手を支いて其の（心細うございませぬ）と顔を眞暗にして俯向きませぬ……（お手をお上げなさいませぬ）と志摩子が靜に言ふんです。（まことに失禮、私も申過ぎたかも知れませぬ。がしかし私の立場として、

唯今まで申しました事に就いては、萬々お察しを願ひませぬ。私は立つ瀬がない。ですが自分立瀬がないと言つて、見す／＼淵に溺るゝとお言ひなされる貴方を、黙つては見て居られませぬ。——では御隨意に。御社の御都合になすつて宜しい……お茶も差上げませぬで——空が暗く成りました。私は卑怯なものですから、御免下さい。——此で解決をしましたです。……はあ。」

言葉は婉曲にして、然も適切だが、手段は、「腹を切る。」とポンと扇子を突立てると殆ど同工異曲である。しかし、其がために、社を追はれて、其日から衣食の道を失ふと言はれたのでは、何とも詮術はなかつたと見える。

處で、作者の身に成つて見ると、忙しくつて、暑くつて、暑い處を、退引の成らない、檀那寺の和尚の紹介のために、辛うじて一編を草して、身分相當の良心ゆゑに、署名を恥ぢて何某分に拘束したのを見事に裏切られたばかりか、少くとも一石の米は買へる筈を、女髮結の祝儀ほどに蹴込まれた上、紙代は償ふから刷直せと言ふ條件さへ、唯兩三日發行の日の後れると言ふ理由のもとに拒絶されて、剩へ其生命とまでは行かないでも、手足の指ぐらには思ひさうな編中の章句の十何行をスパツと切つて落されたのである。

「先生……」熊澤は袴に扇子を突直して、

「退いて考へて見まするに、厘毛、分末たりと雖も、志摩子の言分は立つて居らんです。餘りに氣の毒です。けれどもであります。私が其時、胸に感じましたまゝを申出まして、其に因つて、志摩子の全讓歩を得たのでありますが、先生、雑誌が、もし兩三日遲滯をします場合にです。先生は、果して、私を解雇放逐をなされるでありませうか。正に其通りとしますれば、私の目下の境遇として、背に腹は替へられません。志摩子に全讓歩をさせた事に、潔く安じ得ます。が、もしやです。先生に幾分の御寛恕がございまして、一言のお叱りぐらゐで済むものとしますると、餘りに志摩子に言譯がないのです。此の事につきまして、聊か良心の苛責を感じて、轉輾反側の懊惱に堪へませんので、實は、其の事を……其一應伺ひに上りました次第なのでございます。」

と、ぼやけながらも思ひ入つた體なのに、強雲は事もなげな顔をして、

「何だ、そんな事で、……馬鹿な、第一雑誌は何うしたんだ。」

と聲が激しい。

「其は全部、校正の手を放しまして、製本の出来るまでにして參りましたから、後れる事はないのですが。」

「當前だ、當前ぢやないか。」

「は」

「志摩子は何ぢやい、商機が大事だ。おくれりや、汝は放逐だ。」

「おや、日ましものが歸つて来た……」

と、裏窓に頬杖して、本山の森を仰向けに見て居た築野が、けだるさうに呟いた。

十六

他の事は、餘りよく言ひさうもない婦だし、場合の様子、女優の一行の下山する處を、窓から遠く、森越にちらりと視たらしい。

築野は、打棄るやうな怠けた調子で、

「一寸それにしても、しまし、しましは氣がないわね。渾名なの、其の作者の……其とも自分でつけたんですか。何とか着けやうがありさうなものぢやあないの。」

熊澤はもの思ふ體で黙つて居た。

「此方で勝手に呼ぶんぢやよ。志摩的と言ふも同じ意味ぢや。志摩は姓なんぞね、名は慶吉と言ふ奴ぢや。」

「あら、慶吉。——志摩……」

と、此の婦にしては發機んだ聲で、もとの座へ居直るのに、博多の伊達巻が色も緋に冴えてギ

ウと鳴つた。

「ちやあ、慶ちゃんだ。——三國(越前)の人でせう。」

熊澤は思ひ懸けず目を睜つた。が、強雲も少なからず事の意外な顔をした。種々の意味で、大
安値の御筆代に扱つた作者を、築野が、併も「慶ちゃん」は、穩かでないのである。

「やあ、師匠。」

「御存じで。」と熊澤も喘ぐやうに言ふ。

「従弟よ——私のさ。」

と言つた時は、もう柔かに、くの字に成つた。此で見ると、志摩子の待遇に對して、何等反抗
の意氣が見えない。

強雲は安んじて、とに角巻苜を大吹しに吹したのである。が、煙の中に厭味な笑を漾はせた。

「奇遇ぢやなあ、師匠。しかし、いとこ同士で、一櫛、鴨の肉と云ふ奴を味はうた中ではないで
すかい。」

「止しても頂戴、あんな書生坊を何うするものですかよ。でも従弟にやあ違ひない。眞個に燈臺
もと暗しだよ。……尤も久しく遭ひませんがね。……然う言へば、時々、新聞や雑誌なんか慶
ちゃんの名で書いたものを見掛はするんですがね……何うせ、あんな人の書いたんだ。浮世も人

情も、何、分るものかと思つて、覗き讀みにも讀んで見た事もないんですが——先刻からの話は、
へい、慶ちゃんのこと。水芋を食べて嬉しがつて居た癖に、へい、然うなの……米を買つて食
ふ稼人だなんて、そんな事を言つてるの。……此の高價さに、白米が買へるのか知ら。精々三等
米に挽割麥ぐらるな處でせうね……稼いだつて。」

「いや、しかし相當には遣つとるやうです。」

と熊澤が出す口を、強雲が引取つて、

「とに角、私が社で、雑誌の呼びものを利用するぐらるな事はあるんぢやよ。仕事をさせる時だ
けは、間違つても先生、扱ぢやね。はあ、師匠は、何かい。其の作者が芋を嚙つてた事を御存じ
かい。」

「芋、結構……然も私が煮て食べましたんですものね。」

「恐れるぞ！」

と度外れな高笑ひをして、猪首を縮めたが、併も満面惟得意で、

「芋、即ち鴨の味ぢやらうがね。」

「鴨どころですか、あの兒にや鶴の羹さ。」

と圓い手で巻苜を取つて、

「……雲の降る晩だつたわね——北國は寒い事よ。暖いものも食べられない貧乏人の息子ですかね。——いゝえ。」

と片手で、何とか落雁を一寸撮んで、一方には荻を吸つて、茶でも汲まないか、と言ふ斜視を熊澤に向けながら、

「強雲さん。」

「お、。」と、大きな返事をする。

「……何も彼も御存じだから構はない。……恥を言はなけりや分らないんですがね、其の頃私が藝妓をやめて、あの土地で、此の間の夫さん。」

と言ふ……此の間まで生きて居たのが、既に成佛させられた年よつた夫の事で。

「夫さんのさね、……世話に成つて居た妾宅へ、慶ちやんが、しよぼく来た事があつたんですのよ。」

十七

「小遣がなけりや——矢張り、友達もないもんだから、心細がつて、……寂しさに……其の慶ちやんの志摩子がさ。——いとこの私達を可憐しがつて訪寄るてツた形なんでしたかね、服装は悪

し、しよびたれてるし、それだから陰氣だし、私は餘り嬉しくなかつた。氣も合ない。其處へ行くと、近まはりの蘆原の温泉に藝妓をして居た私の姉——姉も然うなの——二人とも散々です。」

もとく志摩の慶ちやんの家も、山端の築野の一家も、出は東京なのださうである。……築野の父親の方が、斯道に心得があつた處から、越路蘆原の片邊に、清新で而も良質だと言ふ土を發見して、遠くは有馬、隣國の九谷なんぞを凌駕する色繪の名陶器を製造すべき、計畫も準備も整つた處から、妹婿で一才した畫工だつた、志摩の父親を誘つて、二軒とも前後して、移り住んで、大籠を起したのが、年月雨風の中に煙になつて、残つたものは借金と灰ばかり。山端の姉妹は襖を取る。男の兒は尻を端折つても錢にはならない。志摩の親の方は、貼紙だの提灯の繪だのを畫いて三國の裏町に幽に暮した。瀬戸もの少々は、並べて商つても居ただけれど、此は數ふるほどもなく目にも立たなかつたから、小商人の息子株にも入らないで、通稱提灯屋の慶ちやんであつたと言ふ……

「でね、姉とは、それはく氣が合つて、仲よしだつたんですの。柄を見て、縫直しもの一枚も着せて遣れば、少しは小遣も持たせるし、二人とも小説が好きでね、山家の温泉場の貸本で間に合はないものは、姉が工面をしては慶ちやんに買つて遣つたんです。珊瑚の簪の一本ぐらゐは抜いた事もあるでせうよ。」

とダイヤのピンに軽く觸つて、吸殻を投げたが、

「ト何でしたつけ、然うく、雲の晩に、どつと東尋坊の海の鳴る暗の中を、びしよくと破れ傘で、泣いたやうに襟を濡して訪ねて来たから、火鉢へ掛けて、芋を煮て、冷飯にまけて、ふかしてさ……ふつくと湯氣の立つのを食べましたら、姉さんが自分で拵へて、こんなお旨い事はない、御深切、山海の珍味だつて、十四五の少年がよ……本で覺えたやうな口上を言つて、がつがつして食べたつけ。——一寸きまこうだつたわね。蠅帳には、夫が通つて、寢酒に撮むほどの雲丹も海鼠腸もあるんだけれど、腹に溜らないものは職過ぎるし、井を取つて奢るほどの客ではないから、安上りでごまかしたものを、金量より、深切でした事と思つて居るのさ——情愛と經濟を、自分勝手に取違へるやうな料簡で、どんな小説を書くんだらう、——一寸お見せなさいな……其處にあるんですか。」

「はあ。」

「その慶ちゃんの書いたものが。」

「此に。」

と熊澤が、すつと出る。

今度は強雲が頼杖で、

「十何行、すばつと切つて落した奴ぢやな。」

「は、朱ですから、下が透いて、讀めば讀めます。」

「どうせ、拾讀よ。」

で、すぐには見もせず、煽風機の風を孕んだ校正刷で、二つばかり胸を煽いで、パツと香水を薫らせた。

「拾讀と言へばね、——其の晩、慶ちゃんが汚れくさつた襟の下に、光つた讀物を持つて居るから、誰の、と聞くと、紅葉先生のだと言ふんでせう。其の子も姉も、神様のやうに思つて居るんだし、其の先生のなら、私だつて——（お讀みよ、讀んでお聞かせよ。）と炬燵の友染を鼻で壓へて、すつぽりと裾まで入ると、あの邊では、お妾がするくと曳いて居ました。慶ちゃんは其の炬燵へは中りもしないで、畏まつて……色の白い子で、髪がお小僧さんだから、お寺の新發意が御經を持つたやうにして讀んだんですがね。」

十八

「讀みはじめたのが——忘れもしません。（むき玉子）と言ふんですがね……一寸聞きかける、つ面白もんだから恍惚して皆聞いて、炬燵の火はよし、緋手絡かなんかの、其の時分、前髪も

鬢も、しつとりと汗になつたんですのさ。——中に、をかしくつて、今も覺えて居るのは、蘭谿さんと云ふ洋畫の先生が、きれいな、おとなしい、生娘を全裸體のモデルにして、青い柳の下に、眞白な行水の女を！

「ふう。」

「は、あ。」と熊澤も膝を揺る。

「……でね、(時ならぬ雪一團！埋れぬ紅梅の苔と見しは、わづかに色づける乳房。)と言ふ、目の覺めるやうなのを上野の展覽會へ出して、大評判に成つたのを、蘭谿先生の、舊藩主の御隠居と言ふ好色ものが、モデルに成つた娘が、先生の内に居る事を嗅ぎつけて、滋籐の杖を突張つて妾に擲出しに、家來をつれて押して來るつて次第なんですがね。もう玄關から、(ごぼくごぼく)と喘きながら。)と言ふんです——(老公言語の中に「ごぼく」と咳嗽を調合ひ。)(天晴々々、ごぼくごぼくと又咳入る)でせう。(風にいためる花の姿、濃麗なる奇觀なるべしと太鼓拍てば、老公ごぼり、ごぼり。)と、一生懸命に慶ちゃんか讀めば讀むほど、私は可笑くつて堪らない。(困つたわね、おやおや、まあ、あれ情ない。)なんのつて言はずにや居られなかつたの——つてものは……やがて、今夜あたりは腰を暖めにお出で遊ばす、雲の傘、小田原提灯。——宵に湯に遣つた、女中が長湯だから、横町の角あたりで、同じく提灯で歸るのに出撞すと、節儉家だから、一つは消して、一

所に遣つて來るだらうと思ふ夫さんが、此の間死んだ時も老夫さんだつたけれど、もう、其の時分から老夫さんでせう。——それ、格子戸から、ごぼくごぼくと喘きながらで、太う冷えるのと、それらね、老公ごぼりく……びつたり暖めると、續け状にごぼくごぼ、背中をさするやうにして、一寸徒に脇の下を擦ると、込上げて老公、ごぼくごぼなんだもの。……其を思つたもんですからね。」

「怪しからん、澤山だ。」

「太く又蒸すですなあ。」

と煽風機の筋に外れた熊澤は、大汗をかいて言ふ。

「あ、縁側でお涼みなさい、餘程涼しいから。」と食つたもので、

「どれ、拜見をしませうかね。」

「次手に讀んで聞かしてくれては何うかね、屹と師匠は旨からう。」

「鶏を割くに何とかつて、琵琶唄の章句にあるわね。」

「少々御免を蒙りますで。」

と熊澤が座敷を直角に出ようとすると、階子段から、廊下へ續いて、四五人の窺音に、媚かしい衣摺れが、さらりと交つたばかりか、得ならぬ薫が襲つたので、ひよろりと退つて、二三度

うろくして、のそりと出た。

「あ、これですね、志摩慶吉を、なにがしと。……題は、除蟲菊……場末の荒もの屋にありさうだ。」

綴がやはゆるゑ、ばら／＼と亂れる處を、ダイヤのピンで、スツと留めて、

「光榮だと、お思ひなさい。」

「どれ承はらう。一寸聞かれるやうなら退屈凌ぎぢや……睡く成るやうなら、今のうち晝寢をして置く。……爰が活氣ぢや、喝！」

と言つて、俵を轉がすやうに、ごろんと寝た。

欄干に片腕で、熊澤はぐたりと成る。

築野がこれから讀んだのである。が、はじめのうちは、隣室へも聞えるやうに、聊か聲繕ひもしたツけが、其のうち強雲はうとくするし、張合もないから黙讀した。……勿論、面倒な處は飛ばしたので、其のまゝだと、きれ／＼に成るから、こゝに其の除蟲菊一編を轉載する。

言ふまでもないが、短篇で、校正ずりが八九ページ、讀むのに二十分もかゝらなかつたのである。けれども、其のまゝ筆記すると、——此の見當では少々續く。……

お目まだるい處は御海恕を仰ぎたい。

除蟲菊 志摩慶吉

さて其の一編である。

十九

「何だね、まるで身の上話ぢやないか。」

と、二三行讀んだと思ふと、築野は投げるやうに言つたのであるが——

除蟲菊

かぞへ年の三十三は、女の厄年だと言ふ。……男に係りはなさうだと思つたが、然うでない。一昨年の夏は今考へても慄然とする、其の三十三を、三ならびで、俗にさん／＼だと擔ぐとほり、まことに私はさん／＼であつた。尤も作者と言ふ家業は、筆の上ではあるが、毎日のやうに、女の身振や聲を使ふ、紅も使へば白粉も使ふ。別して當時は洗髪に水白粉ぐらゐるでは追附かないから、牡丹刷で固練を用ひ、梅ヶ香ほんのりとする處を、薔薇の薫が芬と遣る。……言つた形で、而も美人を、寫して至らざる時は、自分が美人であればと思ふばかりで、箇所々々の起居では、袖などは思はず姿態をする次第だから、自然と幾分か女の血が交らないとは限らない。

餘計な事だが、それか、あらぬか、で、女の厄年にさん／＼であつた。

可訝なもので、其のさんくが最う前の年の暮からはじまつた。「餅の代に一つお稼ぎ下さい。」と一雑誌の編輯員が好意で然う言つてくれたので、精々と稼いで、漸と仕上げたのが師走も押詰つてからだつたが、恚うした時は氣が急くから、電車で可い處を俾で飛ばして、社へ行つて、其の編輯員に逢はうとすると、不在だと言ふ。落膽した。

が、満更知らない仲でもなかつたから、其の社の編輯長の某氏を呼んで、應接室で逢つて、次第を話すと、その編輯員は、當日不在ばかりではない。暮に退社して了つて、社と關係はなく成つたのださうである。はつと當惑して、最早少々ふるへの來た手で、右の原稿を恐るゝ差出すと、一寸手には取つたが、張腕でボンと二つばかり、小口を敲きながら、「目下大輻湊でしたなあ。」と眉を擡めて言つた。——ハツとする處へ、附け足して、「前編輯はお約束したでせうが、言置がないから引繼ぎのしやうがありません。それに今度からは、すべて材料を精錬しますから。」と言つて、づいと突戻すと、折から洋行歸りで、ぱりぱり言はせて居た此の編輯長は、スタイルの新しい洋服の腕を突張つて、金時計をパチンと鳴した。取りつく島もない。尤も洋行歸りの威に感じて、ふるへの來るやうな餅の代の原稿では、必ずしも精錬されたものではないから、包みを解いた袱紗にも極りが悪い。何、古新聞に引包んでも可いのだけけど、……

世に出た時の幸先を祝つた、めでたい模様にも恥かしく、すごくと引込めると「今後は御依頼申さない原稿は、何うかお持込みのないやうに」と言つて、ずかりと起つた。口惜いのを通越して情なく成つたのは言ふまでもなからう。重荷に小附の、其の俵をすぐに走らせて、前編輯員の家へ駈着けると、息せいて玄關へ飛込んだが、又不存在。剩へ旅行したと言ふのであつた。暮から然うした不出來しが累り累り、押せしに、眞夏に成つた。其の間には、短篇を集めて一冊にすると言ふ相談があるから、泳ぐやうにして乗出すと、川の眞中で覆へる。……師走の話のつゞきだから、何だか寶船と取組合をするやうに聞えるが然うではないので、讀者方には何の事だかお解りには成るまいけれども、出版元へ前借を申込んでお断りをお言ふのであつた。まだ其は可いとして、一冊が出来あがつてから、三度四度と稿料を刻まれて、而も受取るのにお百度を踏まされる。知りもしない雑誌に、「なにがしは本誌のために目下汗と膏を流しつ、稿を起し居れり。」と薄汚く豫告されて、まだ櫻の咲く頃だ……貧乏しても錢湯にや行くんだから、汗は出さうと、膏は流さない、獨り憤りはしたものの、先づ一ツ口にありついたらと、卑しい料簡に引かされて、いつお約束をしましたかと、言ふのを機掛に其の社へ談を持掛けると、「申おくれしました、之から御相談をいたします、本社のために大努力をなされて、一大傑作を願ひたい。」と言ふに就いて、仕事欲しさの悲しさに、汗も膏も流しませうと、涙の流れさうな弱い音を出して、さてお手當はと、來ると、肝を冷すほど安價い。……

可訝なもので、其のさんくが最う前の年の暮からはじまつた。「餅の代に一つお稼ぎ下さい。」と一雑誌の編輯員が好意で然う言つてくれたので、精々と稼いで、漸と仕上げたのが師走も押詰つてからだつたが、恚うした時は氣が急くから、電車で可い處を俾で飛ばして、社へ行つて、其の編輯員に逢はうとすると、不在だと言ふ。落膽した。

が、満更知らない仲でもなかつたから、其の社の編輯長の某氏を呼んで、應接室で逢つて、次第を話すと、その編輯員は、當日不在ばかりではない。暮に退社して了つて、社と關係はなく成つたのださうである。はつと當惑して、最早少々ふるへの來た手で、右の原稿を恐るゝ差出すと、一寸手には取つたが、張腕でボンと二つばかり、小口を敲きながら、「目下大輻湊でしたなあ。」と眉を擡めて言つた。——ハツとする處へ、附け足して、「前編輯はお約束したでせうが、言置がないから引繼ぎのしやうがありません。それに今度からは、すべて材料を精錬しますから。」と言つて、づいと突戻すと、折から洋行歸りで、ぱりぱり言はせて居た此の編輯長は、スタイルの新しい洋服の腕を突張つて、金時計をパチンと鳴した。取りつく島もない。尤も洋行歸りの威に感じて、ふるへの來るやうな餅の代の原稿では、必ずしも精錬されたものではないから、包みを解いた袱紗にも極りが悪い。何、古新聞に引包んでも可いのだけけど、……

世に出た時の幸先を祝つた、めでたい模様にも恥かしく、すごくと引込めると「今後は御依頼

(除蟲菊のつゞき) 其うちに久しく打絶えた男で、近來は演劇の方へ關係して、某小劇場の脚本部に入つて居ると聞いたのが珍しく訪ねて見えた——作者としての地位は、餘りよくないのだ、とか噂したが、服装は好い。……單衣の小紋で洒落れた帯で、男振もまた好く成つた。やあ、お珍しい、何しろ一杯と言ふ處だけれど、おいそれと間に合ふやうな勝手向ではないから、番茶などを獻じて居ると、其の男も、こんな許に長居をする氣はないので。……早速要談に掛つた——話と言ふのは、私が前に書いたものを、今度其の座で、舞臺に掛けようとするに就いて、承諾を得に來たのである。實際の處、場末過ぎて、餘り嬉しくはないのだから、如何なものかと、胸に手を置くべき處だけれど、ありやうは質ばかり置いて居るのだから、そんな餘裕はない。幾千金の脚本料にはありつくと思ふので、いやお見出しに預りましたかと、之で番茶だけでは厚顔しいほどの挨拶をして、虚飾なしに畏まると……中に、祭禮の場面で、萬燈賣の爺さんを、唯景色だけに使つた處がある。あの爺さんを以前新粉細工の上手があつたやうに、萬燈製造の名人氣質の爺にして、(氣に入らない奴には賣らねえヨ)とか何とか威張らせて、藝妓を連れ、成金の相場師と、恚う取組合の喧嘩を押はじめさせる筈です、と手眞似で話す……

新粉細工の達者な爺さんや、砂がきのあくれたれ媼さんは別として、萬燈屋の名人は些と怪しい。……それに、眞晝間だと言ふのに、藝妓を連れて、のそく歩く成金も變ではないか知ら……第一藝妓が萬燈を振るのも奇抜だと、言はせも果てず、其處が江戸兒です、一葉女史の(丈くらべ)の翠の意氣で、と、飛んでもない、他人様のものまで穿違へに持出して、其でなくては此の演劇は出来ないと言ふ。

弱つた——が破談に成つてはならないから、(丈くらべ)の翠は泥草鞋を投げつけられる方で、萬燈を振廻すのは横町組ですよと、他人様の迷惑に成らないだけの注意を靜として、先づ納まる

と、——今度は……大分面倒だ。
あはれな、艶な寔れた妾の、男に虐げられるのを、同じ運命で世を果敢うした、むかし諸侯の妾の精靈が幻に顯れて助けると言ふ——一體大甘ものでさあ——と其時の其の男も言つたが、いや何うも、恚う書いて居ても些と甘過ぎる。……暑さは暑し、お話をするに、一先づ汗でも拭かう。

處で、其のお化の妾が、猫を可愛がつた因縁で、虐げられる妾の家のまはりで時々猫の啼聲がする話なのである。が演劇には、いよく精靈の顯れる處は、おばけの妾は、もの凄いいほどの美人に仕立てて、前後に附添ふ、腰元は、振袖を斑に染めて、一人々々に無地と鹿の子の紅い

狎ころ掛を結ばせて、ずらりと舞臺へ並べると言ふ。

之には私が吃驚すると、いや、顔は猫にはしませんと、澄して居た。顔は猫にしないで、腰元が紅い首玉を結んで、斑の振袖では、誰が見ても是、絞の浴衣で猫ぢや〜とおつしやいます、と場末の藝妓が宣傳とかを踊るやうだと、自分が汗の浴衣につけても、少からず異議を唱へた處が、其でないと見物が承知しません、受けません。と言つて肯じない。

演劇が出来ず、見物が承知しないのでは、まるで相談に成らないのであるから、右兩様とも兎も角も泣寝入をした處で、いづれ招待券を差上げます、御覽下さい、衣裳や道具は張込みましたよ、と言つて、最う立たうとする。

私はトボンとした。

衣裳と道具は張り込んで、招待券は寄越すとして、未だ一言も其の臺本に對する報酬に及んで居ない。

いや、くどい。……早い處が、顔を立てろの、何のと言つたが、強ひて少額を要求すると、止むを得ず、そんなら座主と相談をしようと云つて歸つたきり……沙汰なし。——お庇で、萬燈の喧嘩もなく赤い狎ころ掛の腰元も出ないで済んだ。

二十一

(除蟲菊のつき)——けれども、濟まぬは作者、私の胸で、何うせ、一錢にも成らないほどなら、何故あの時、瘦せたりと雖も大胡坐で踏反つて、不可え、と言はなかつたらうと思ふ。……と泣きたくなる。

然うかと思へば、泣くより笑ひと言ふのが、まだある。——空腹を抱へた爲う事なしの散歩歸りの晩方に、おなじやうに下腹にこたへのないのが、屈腰でよぼ〜と、背中へ大行燈を背負つたのやら、藍染の旗を擔いだのやら、太鼓も、ちやるめらも、樂隊の音を潜めて、寂として、六人ばかりの一行が、老年ばかりで憎乎として、とぼ〜と廣い坂を上つて行くのにすれ違つた。梅雨時の、分けて陰氣なたそがれの空へ、坂を上つて行くのだから、遠くへ消えて行きさうに見えた。下へ下りるのだと、町並だから、消してあつても、行燈に灯が點くやうに見えたらうに。

此は活動寫眞の廣告で、古映畫の脱殻が徘徊つて通る趣があつた……ばかりなら可い、——其の行燈にも、旗にも、大字で染出したのは、何を隠さう、私の小さな作の題である——而も編中の女主人公の名が其のま、題に成つて居るのである。處を、此の體は、さながら女の葬禮が通つたやうで、悲曲の結末には編中の主人たちを、我が手に掛けて自殺させるぐらゐは遺兼ねない、

不心得な作者も、此には少からず可哀を感じて、坂の下に思はず涙ぐんでゐんだ。

實は麻布邊の坂の途中で見たのであつた。今でも、その坂を魔所のやうに思ふ。……心ある賢者、哲人だと、こゝらで無常を觀じて坊主に成る處だけれど、下根の凡俗と來て居るから此處に於て、餘計にげつそりと腹が空いて、六欲煩惱一齊に、恰も熱爛の酒の香の如くむらむらと起つた。

某會社撮影と、且つ廣告行燈に記した。其の會社からは、原作に對して何の交渉も受けて居ない。言はば無斷撮影である。……尤も、別の或會社には、それよりして六七年も前に、一つ鍋のものを突いた友人から、嘘か、眞個か知らないけれども、此の頃の、時の相場だ、つき合ひ給へと言ふので、四合罎二本と、一封、十圓也で、納得させられて、承引したものに相違ない。

が、いま見たのは會社が違ふ——しかし……あゝ、あの當時でさへ、作者が酒二本と、金十圓也を着服したばかりに、編中の女主人公は、恰も身賣同然の體で、何うかすると、場末の四辻や、裏町の土堀の貼紙に、無慙や、脛も露出な紅い蹴出しを大路の風に曝されたり、頬邊を垣の柵で突かれたり、髪も袖もぐしょぐしょと時雨に濡れたりして居たものだつけ——彼處へ坂の上へ迷つて行くのも、いつか、其の幽靈が出たのかとも、思つたが。……智慧は淺し、慾心は深い。

翌日、早速其の某會社へ出向いて、要途の事務員に面會を求めると、何の用かと、膠もなく言

ふのを、其の映畫の原作者だと小聲に名乗つて、僅に應接室の椅子へ通されたが、待たせること、や、多時。つゆじけで下腹が疼み出して、顔色の蒼しよびれた處へ、てら／＼と顔の光澤の可い、結城縞のしやんとしたのが出て來て、

「おいでなさい。——映畫が何うかいたしましたか。」

と、のつけに當身を食はされた、もう見苦しく息がはずんで、掠れ聲して、其の無斷の由を詰る……とは行かない、恐れながら伺ふと——

「いや、あれは、……某會社から當社の方で買取つたものですよ。貴方が承諾しなかつた一通も添へてあります。……何うもね、所々へ間塞げに出しては居ますが、雨だれ澤山、透切れだらけの持餘しものでありますな。」

其の言に、此方は力及ばぬと、螻螂の如く、嚇と成つて、透切だらけの持餘しものを興行される迷惑を一談すると……

「撤回は望む處です。しかし金子で買つたものですからな。……何なら貴方がお買戻しを願ひませうかね。」

えらい！……言ふことがきび／＼して居る。

(除蟲菊のつゞき)——敵ながら、人間が生きて居る。社からは嘸ぞ好い給金を出すであらう。あつぱれ也と、まだ其でも、捨鞭を打つて遁げしなに歌を詠むほどの負惜みもあつたものだけれど、苦さもどんづまりの、暑さの頂上には、もはや討死をするかと思つた。

其の頃は、吐瀉をする可厭な病が世間に流行つた。

一日、某——新聞編輯員と、肩書のある名刺を、女房が取次いで。——逢つて見ると、身勝手だから讀めて言ふではないが、行儀の整つた、まことに柔和な人で、お忙しい中であらうが、社の紙上で凡そ百回見當で、續きものを願ひたいと思ふが何うであらうと申出られた。私は武者震をするほど嬉しかつた。屹と骨を折りませうと感激すると、先方も満足して、さて稿料の處は、……此處で二つ三つ相談があつた。結局、編輯員が、自分では、此でお取極を申すが、一應歸社の上、即日確答をしますからとの事で座を立つたのである。が、筑波の空へ雲が出たほど一寸氣に成る。話が極つたのではない。折返してどんな其の「確答」と言ふのが出ようも知れぬ。しかし、不出來にした處で、精々、いくらか原稿料が安く成るだけの事だらうと思ふのに、即日と言つた其返事が、翌朝に成つて届かない、氣が氣でなく、心では熱と信心をしながら、起つ居つ待つて

居ると、返事どころか日中暑いのに、本人がわざ／＼見えた。私は煽いで上げたかつた——其の人は言惡さうに、自分は昨日のお約束の通りにと、種々心づかひもしましたけれども、社では、もう少し(と額を言つて)……だけに願ひたいと言ふが何うかと言ふ。見得も外聞も最うない、可し、働きさへすれば、三月は食へる。……で、結構です、と潔く返事をする、其人も喜んで、挿繪、組方など打合せを済して歸つた。

精進潔齋して、其場からでも机に向ふ料簡だから、行水などは待つて居られぬ。……背中に刺青があらば龍を顯す意氣組で、手拭を鷲掴みに、威勢よく炎天を横町の錢湯へ飛込んで歸ると、禪は洗つてあるかい、おい來たと、しめ直して、縁側で爪を取つて元氣に水を打つたから、鉢前も草も活々する、久しぶりで涼しい氣で、煙草を一服する處へ、(速達)と言ふ聲が泥を投げ込んだやうに聞えたから、ハツと思ふと、……果せるかな。……其新聞社からの郵便で、先刻編輯員……某參上、お約束いたし候件は、本社に都合これあり候條、御とりかゝりの儀は一先づお見合せ下さるべく、此の段速達を以て申陳べ候。

あゝ、これが「確答」だ。

私は偏に、紅葉先生が戀しかつた。

其の夜の事である。……新派の俳優の立女形の一人から、明夜、千駄ヶ谷の某君宅にて、徹夜

の怪談會の催しがある。御一所に参りませう、お誘ひにあげられます、と葉書で親しく言つて来た。

久しぶりで、氣晴しにお出掛けなさい、と女房が、夜あかしの怪談を氣晴しだと言つて勧めた。ほどだから、餘程私は鬱いで居たに相違ない。

で、女房は箆の底を搔廻して居たが、やがて戸外へ出て行くと、暫時して、白地の絆を一反、上包みのまゝ持つて歸つて、曆を見て、……翌朝早朝に成つて縫ひはじめた、どの單衣も洗ひざらしたし、羽織はあるが、べんべらだし、會へ行くのに、それでは餘り暑くするしいから工面をしたのださうである。

唯もうぐつたりして、お惣茶煮の葡萄豆で、お茶漬で腹を萎して、家の内でも日蔭の方へ、どたん倒れて、向うの空箆の前に針を運ぶ手を視めて居る心の裡は……兩國へ納涼に出掛けるとても言ふなら知らぬ事、新宿はづれの怪談會へ、晴着だと思ふと、縫つてる白地が、何帷子とか言ふものに見えた。

鶴龜々々……女形ではあるが、狭で威勢の可い事は、雪のだんまりに出さうなのが、浴衣がけで誘ひに来た。

二十三

新宿で電車を下りて、追分を抜けた薄暗い處で、連の立女形が思ひ出したやうに、

「あゝ、——新聞から貴方に小説をお願い申したさうですね。」

「……………」

「彼社の演藝部の記者からお言託がありましたよ。……新派の私たちの一座に適合りさうなものを成るべくはお書き下さいまし、社でも願つて居るツて事でした。」

と齒ぎれの好い調子で言つた。

此方は其の人にはないが——忽ち血を吸はれたやうな氣がして、唇は寒かつたが、漏らす處のない便りなさに、つい昨日からのいきさつを委しく話した。

「……と云ふ始末です——急に斷つて来たんですがね。——一寸、理由が分らないんですよ。」

「妙ですね。」

「ですからね、他に、社に何か都合があつて模様があつたのなら、些とも構はないのですが、誰か、私に敵意……は可いとしてです、悪意を持つて居るものがあつて、平く言へば水をさした……さしたものがあつたやうだと、此からの事もあるし、よく考へなけりやならないと思ふのです。」

「まさか……そんな事はありますまい。」
「でもね、しかし、止める分は、どつち道可いとして。」

と見得を言ふ。何、可い事があるものか。

「後々の心得のためにと思ふんですが、貴方は、演藝部の其の人と大層御懇意だつて事ですから、一つ内々で様子を訊いて下さいませんか。」

「え、成程。」

「……もしや、稿料の方がまだ高價いからと言ふんなら、それは構ひません。……新聞も書つて見たい處ですから。……それに、社の方の註文なら、……舞臺に都合の可いやうに拵へても見ませうから。」

あ、空腹さには替へられぬ。藝壇が、もしそれ、小兒の喧嘩だつたら、僭越ながら、二挺の斧は両手に揮らうと思ふのが、甲州街道の短夜の並木の出會に、對手に向つた弱さを見よ。……尤も立並んだ其の立女形は、面は史進にして、體は魯智深なんだから、強さも強し、面白い。

串戯はよして、そのかはり、百物語の會に行くのに、此のくらの頼もしい同伴は一寸あるまい。尤も此の人と一所でなかつたら、當夜の不氣味さに、どんな目に逢つたらうも知れぬ——それになくつてさへ、私はあとで煩つた。

のつけに度肝を抜かれたのは、催主の郊外の住居で、暗い路を辿つて着くと、主人と私たち二人のほか誰も居ない。十四五人は集る處を、種々の事情で皆不參ださうで。……小さな卓子臺に凭かゝつて其の斷りの葉書を一枚づゝ開いて見せるのが、何うも皿の數を數へるやうで寂しい。處へ、ちよろゝと出て來た四つぐらゐの男の兒がある。脊が侏儒で、手足が瘦せこけて、はち瓢を乗けたやうな大きな顔が蒼しよびれて、ぶくりとして、圓い白眼がどろんとして、黄色い口が、耳までばかりと開いて、しかも額が皺だらけだ。此兒が、客珍しさに踊り跳ねるのだが、頭の重さに、よちよちとするから、眞夏の事で——奥の障子は開放してあつた——柱から柱に四隅を傳つて、ドンと打撞つては、よろゝと座敷の眞中まで退つて來て、またドンと一方へ打撞つては、よちよちと後退りに退つて來る。

主人は澄して團扇を使ふし、私たちは顔を見合せた。

少時すると、下谷廣徳寺前の古道具屋だと言ふ……煤の中から出た様な男が來て四人に成つた。

「さ、會場へ參りませう。」

と用意の提灯を立膝で點して、

「君は、それを持つて下さい。」と、右の古道具屋に座敷から、もう一つ土瓶を持たせて、主人は臺所口で、細君の渡した中皿の上に、風呂敷を掛けて、團扇を二三本置添たのを片手に、片手に

ビール瓶を二本提げて、

「さ、何うぞ。」

と言つたが、勢、立女形が先へ立つて、格子戸を開けた處を、提灯と共に細腰で、スツと出た。

二十四

其處を、背後に暗い電燈を背負つて、瓢形の大きな蒼い顔ばかりが、がくりと俯向いて、じろりと出額で睨んで、糺のやうな指を嚙んで居た、上框の瘦せた兒の顔を今でも忘れない。——後で聞くと、故と餘所の兒を借りたのだと云ふ。

さて杉垣について、探り足で行く間も、草が茂つて、會場も、背戸に原を背負つた倒れた木戸に突支棒をした草の中の古い空屋で、六疊の濕けた破れ疊の真中へ、洋燈に其提灯の火を移したのであるが、古道具屋の順さん——順さんと言ふのが、商賣柄、茶の心得でもあるかして、口への字に、上目づかひで、鹿爪らしく蠟燭を睨んで、もの／＼しく、洋燈の心を熟と撓めて、ちよろりと點けた。ぼつと燃えた工合が、魔を招ぶ灯の、此が式法かと頷かれる。

奇特な事には、お化の會に、卓子臺でもあるまいと、蝶足の膳に箱火鉢、薄が覗く濡縁に、今戸の豚が用意をしてあつて、やがて陰氣に談話をはじめた。

立女形は人も知つた話すきだから、先づ口火——怪談であるから線香の灰の落ちるやうな——口火を切つて、續け狀に二つ三つ繋ぐうちに、短夜は十二時もいつしか過ぎて、早や丑滿。天龍寺の鐘がゴーンと風の死んだ眞夜中の空を其の龍の這ふが如くに傳はる……時分は可しと、眞打の主人がはじめた。……此人は左門町の組屋敷あとを通つた、木瓜、山吹の春の日中……四谷怪談の妖靈を其のまゝに見たと稱ふる人で、様子は一寸牡丹燈籠の新三郎に似て居るが、いつか青梨を袂からころんと出すと、人魂だと思つて藝妓がキヤツと言つたくらる、鼈の怨念などは、湯錢と一所に番臺へ載せさうなのだから、話も身に沁む。——何よりも、此の會場は、恰も此の土間の下あたりが、四谷怪談の妖精が、本所から夕立の中を宙を飛んで来て、倒れて無數の蛇に成つた、昔の南瓜畑に當るらしいと言ふのである。

蒸暑いけれども障子を閉めた。

私は便所に立つた。が、手を洗はうとすると、水が粘々と生暖く手に絡はる。ゾツとして障子越に透かすと、血ではないが、青いほどの腐り水だ。

可厭な心持の、重い頭を横縁から、覗かして、風に當らうとして見ると、八重葎を十坪あまり離れた、此屋に就いた物置の、眞暗な、埃と煤が霜柱のやうに堆く積つた裡に、海鼠が潰れた大さきで、どろりと、三ヶ所ばかり、薄びかりに光るものがある。あゝ、物置の中に人魂が見える

と、附元氣で言ふと、出ましたか、待つて居たと、立女形は笑ひながら座を立つた。が、主人は腕拱をして、障子に凭掛つたまゝ、

「それは其の……晝間、あけに来て見ましたがな、鼠の死んだ奴を猫が食つて、其處へ反吐を吐いて居ましたよ。」

と澄して居た。

私は口に手を當てた。猫の……其の吐く病が流行る處へ……鼠のよろしくない方のも、横濱までは来て居たのである。

「一杯景氣をつけませう、頂戴しようぢやありませんか。」

九紋龍字は魯智深で、そんな事には驚かない、立女形も、しかし景氣をつけようと言つて、例のビールの瓶を取つた。……勿論此方から恚う出ないでは、一つめしあがれとも、何とも嘗て主人は言はないのであつた。

其の主人は、恚うして居ると、種々な魔ものが見えます、と言つて、端然と坐つて、右の、腕拱をして、草臥れた夜汽車の如く、破れ障子に頭を押着けて、後腦で棧をこするやうにして、薄目で眠つて居た處、と心着いたらしく、

「其は、其の水なのでして。」

薄目で言ふ。

「……………」

成程硝子杯がない。

「土瓶へ加します分ですな。」

二十五

矢張り薄目で、

「また一つ……それでは私がお話をしませうかな。」

と引入られるやうな陰氣な調子で、

「然も此は實驗談でして、保證をしても宜しいのですがな。」

とはじめる。で、自分が語つてゐるうちは、曲りなりにも薄目を開いて居るのだが、一段果てて、道具屋の順さんなり、立女形なり、また私が何か話すと成ると、件の端坐のまゝで、すやくと眠つて居る。……馴れたもので、一順して、番に廻る時分には、屹と詭へたやうに薄目を開けて、

「また一つ……それでは私がお話をしませうかな。」

と引入られるやうな陰氣な調子で、

「而も此は實驗談でして、保證をつけても宜しいのですがな。」

とはじめめる。……様子、何となく、もの凄。最うやがて、妖怪退治の武者修行が顯れさうな處を、古道具屋の順さんが、坐直つて名告を上げた。——此の順さんは講釋が旨いさうである。いや、講談の速記を、老若男女、其表情を以て讀みこなすのが得意ださうである。

「それは、手に入つたものでしてな。」

と主人も薄目で見て保證した。

私たちは、せめてもの事に思つた。

火鉢を引寄せ、土瓶を下した——勿論火はない——盆を伏せて、其の上へ、豫て用意があつた

赤本の古雑誌を、大きな懷中から出して、ト頂いて、ポンと載せる時、割膝をぐいと突寄せ、疊

んで持つた手拭で、二つばかり鼻をかむと、扇子をびたりと構へたが、

「え、未熟ながら一席。——雨夜の破傘とござりまして、村井長庵、早乗三次を使ひまして、

悪事増長のお物語り。」

と掠れた咳とともに調子を沈めると、洋燈の心を、ぐいと落した。

——「兄さまよ、兄さまよ。」——

と心細い、しはがれた女の聲。

「眞暗なる處、物置同然の二階、階子の口よりいたして、泣の涙のために、目を泣潰しましたおそよが、唯々、娘に逢ひたさの一念、瘦せおとろへた顔を出しまして——兄さまよ、兄さまよ。」

——三次見ねえ、あれだぜ——

と忽ち男の聲で言ふと、古道具屋の順さんは、煤けた長い顔を仰向けに、ぐつと天井の隅を睨んで、白い目をぎろりと剝いた。其ツ切、口も利かず、身動きもせず、黙つて居る。

こゝが、表情なのであらうけれども、……まだ、ものも言はず睨んで居る。

「蛇でもぶら下つたんぢやありませんか。」と、立女形は、私の耳に囁いたが、少し調子を高めて、

「鮮を頂きませう……講釋にはつきものだ。」

と、同じく此も、主人からは食べるやうには言はなかつた。先刻の中皿に手を出さうとした。

「あ！ 御覽なさい、動いて居ます、布巾の下が。」

唯見ると、線を縫ふやうに、布巾の下が蜿々と蠢いた、——そよとの風もなかつたのである。

私と二人、言合せたやうに、身を開いて、ひよいと背後を見ると、——こんな時は、後を見ないのが可いのださうである——次の室の敷居に、二條、兩方に並んで、同じやうな蛇が、二つ鎌

首を出して居た。

後は想像に任せる。……主人は今夜ぐらゐる出來のい、會はないと言つたが、朝露に漸と蘇返つ

て、ひよろ／＼と甲州街道を引返して、追分の青物市を通る時、しらんだ東雲に、さながら草市の中を亡者の徜徉ふやうな気がすると、立女形の顔も青かつた。

家へ歸ると、今朝に限つて、亦嬉しさうな顔をした女房に、碌に口も利けないで倒れて寝た。

其の日の夕、其の夕、海から来る、雷は凄いと云ふのに、剩へ、芝、品川の空から、漆の如き黒雲が湧いて、おびた／＼しい大驟雨があつた。

線香の煙と、古蚊帳の裡に、雨戸の雲に包まれながら、私は息もつけなかつた。かさね／＼餘りの事に、格子戸を敲き破つて、しもげた檜の青いのを、其のまゝせめてもの店にして、女房と二人で、白玉でも賣らうかと思つた。

雨があがつた、風の涼しい、枕頭へ、小判がこぼれた。いや、折目のつかない紙幣が並んだ――夢ではない。

二十六

女房が身賣をしたのでもないで、不斷よく遊びに見える、美術學校の學生で、年紀の若い、私の愛讀者――御最良がおなじく貧乏なんだが、其の後援者に成つて居る人から、金策をして來たのであつた。

善いにつけ、悪いにつけ、年下の人に金子の相談をしようと云ふ事は情婦に向つて無心を言ふに齊しい……此のくらの情ない事はないと思つて居るにも係らず、よくせき故に、つい耳づたへに愚癡を漏した事があつたのである――

「……札の辻あたりから、激しい驟雨に成つたんですが、品川で電車を降りると、ひどい大雨で、それに風が吹きまくつたものですから、御殿山へ上らうと言ふのを横飛びに停車場へ駈込みました。」

先刻の大雷雨の時である。品川の空の可恐しい暗さにつけても、聞くだけで、私は身體に震が來て、其の深切と苦勞に涙ぐんで……

「いゝえ、……今日行きましたのは、此のためではないのです――金子は昨日請取りました、今日のは私の勝手です。」

と打消した。が、しかし、好意ながら、問ふに落ちず、語るに落ちて、全く私のためだつたことは、あとの話で自然分る。……

驚の延身

――聞くと、美術學校の學生が、餘り驟雨の激しさに、品川の停車場へ避難した途端である。志した御殿山の雲に、眞暗な叢樹立へ紫色の火の柱が閃然と立つたと思ふと、其時、雷がさがつた天地は一面に、眞蒼な金屬製の網を颯と打つたやうに見えた。同時に瀧を流す雨が停車場前

の廣場へ洪水の如く泥波を立てたと見ると、構内の三和土へどぶくと鳴りつゝ、流込んだ。辻の電車も影法師の如く、潜水夫に似た運轉手を突立たせたまゝ立すくんで、四邊に人の氣勢もなかつた。そんなに雷を恐れる方ではないが、餘りの事に人をたより、また人にたよられたと見える。……心付くと、婦の背に、繁吹に濡れた袖を合せて、二人びつたり、待合室の隅に附着いて立つて居た——其處には學生と唯二人であつた。

「ひどい雷様でございましたね。」

「ひどうございました。」

とはじめて口を利いた。學生が見ると、其の婦は、白縮緬の蹴出しの、しつとりした、裾を端折つて、吾妻下駄を素足に穿いて、紺地の浴衣に、豆絞りと黒縹子の腹合の帯の幅狭に見えるのを引掛けに結んだ、腰に、風呂敷包みをつけて、三味線を両袖で抱いて、濡々と立つて居た。色の浅黒い、鼻筋の通つた、口許の、それはく優しいのが、姉さん被りのほつれから、はらりと鬢を亂した……年は三十四五ぐらゐだつたと言ふのである。

聞く、私も、門附の婦だとすぐに認て取られた。

今に成つて、往來の人も、濡鼠のやうに、ばらばらと飛込んだ。——學生はそれなり目禮ぐらゐで、洋傘を擴げて、御殿山を志した。

夏の日もとつぷりと暮れた。望は達し、用は足りた。が殆ど、魔の砦が、奇蹟なす黒檀の塔を下るやうな思ひで、雷のあとの御殿山を宵暗に下りて来ると、ちらちらと青い、影も燈も大い、不知火のやうな電燈の微な光を、停車場前の大流の海に、藍を解いた如く涼しく視た。坂のつまりの、まだ其處は暗い、角を引込んだ蕎麥屋の前を通ると……

「もし……もし。」

と白いやうに呼ぶ婦の聲。——同じ處に人通りはなし、振り返ると暖簾の陰に、上端に腰の浅い、裳の色も白縮緬が、ほのめく夕顔に聲ある如く思はせた。肩ですぐに暖簾を分けると、先刻の顔が可懐く覗いて、

「貴方。」

と言つて、すつと寄つた——學生は「逢つた事はありませんが。」と斷りを言つて、繪に描いた辻君、夜鷹に取られたやうな氣がしたと言つて話す……

私は偏に聞惚れた。

二十七

時に其の婦が、學生に、少々お聞き申したい事がある、手間は取らせないから、と蕎麥屋の土

間へ連込んだ。連込まれた方では、風采は流れものの門附だけれども、優しい人可憐い婦の調子が、否やは言はせないばかりでなく——別に然うしたものはありはしないけれど——行方の知れない姉か、若い叔母の美しいのにも逢つたやうな気がしたさうで。

さて學生を向うに坐らせると、婦も端折を下して、おなじく上端であるが、對向ひに成つて手拭を取つた。——引詰めた總髪の銀杏返しに結つて居る。色も一體は白いのが、此の境遇だから日にやけたらしい。言葉にも時々一寸訛が交つた。——どんな場末の裏長屋でも東京に住みついて居て、町、小路を流して歩行くのではなささうで、通りすがりの漂泊に、宿場を稼ぐ旅藝人と云つた様子が見えた。

ものには馴れて居るらしい。……連が、客が、來たらば僇うと、はじめから誂へが通つて居たらしく、顔を合せてから註文はしないのに、すぐに種ものが顯れて、一銚子ついて居た。

「まあ、お一つ。」

學生は、些とも飲まないのだから、杯を受けただけださうであるが、婦は利ける口と見えて、最うはじめから焼海苔で一合附けて居た。

で、あらためて、其の不作法を詫びながら、實は學生の歸途を待つて居たのだと言ふ。……何處へ行つて、何時歸るとも何とも話しはしなかつたのに。しかし、白の蹴出さへ暖簾を差覗くや

うに、店の突端にさし構へた心組はよく解つた。

待て、そんな事は何うでも可い——處で要談である。

「貴方、御用事は調つたんでございますか。」

と、前屈みに、先刻の大雷雨の凄じかつたことなど、つい通り時候の話をして煙草を喫んで居たのが、煙管を斜に胸へ引いて、居坐を直しつゝ、訊いた。

「お心通りに、……失禮ですが、御用事は調つたんですか。」

唐突の間に、學生がためらふ處を、疊んで訪ねた。此が要談であつた。

「調ひました。」

と學生が答へた——即ち、私の枕許に並んだ、其の若干の紙幣の事なのであるが——學生は其の時、思ひも懸けない訪ねやうに、聊か希有と思はなかつたのではなかつたけれど、婦の人情と深切が、ほとびるばかり、其の色に表れたのを視て、確と答へた。勿論、隠す必要は何もない。婦は心から嬉しさうに、「あゝ、それで安心しました。あんなにもお思ひなさいます御用事がもし、お調ひなさらないやうでしたら、足らはぬながら、私が御相談相手に成らうと存じて、お待ち申したのでございます。」と言つて、一寸四邊を見たが……「人殺しまでは出來ないでも、盗みぐるらはして上げようと思ひました。」と、すつきり言つて、

「……尤も、こんな身体ですが、身を賣つて、それでもお金子に成らない時の事ですよ。」
と附加へた。……それが學生の耳に、此の婦が、暗夜に、月夜に唱ふであらう、宿場の店行燈、薬屋の門に立つ時の、淨瑠璃の章句を聞くやうに、悚然とするほど身に沁みたばかりで、敢て不自然にも、誇大にも聞えなかつたさうである。

思はず、肩を聳やかして、膝に手を堅く成つた學生の、全く友人の入用のために、金子を借りに行つたのであるが、何うして貴女に分りましたか、と言つたのに對して、よくよく思ひ詰めておいでなさいました事は、まだ其の音も留らないのに、いま雷の降つた黒雲の少し白く成つて渦を巻く山の方へすん／＼上つて行きなすつたのでよく解つた——内へお歸りか、他へお出掛か、それ／＼は、旅で苦勞した年上の女が見ればよく解る。……

「それですし、大概の用は金子で片が附きますもの。」

と言つた。——それにしても、「學生さんの貴方に、そんなに身に成つて心配をさせる、果報な方はどんな方。」と、もう打解けて、莞爾して聞かされた時——

「主人や女のためぢやありません、實は小説を書く方のお手傳ひです、と言ひました。」

——と學生が、私に更めて話した。——

「蕎麥屋に、待つうちに讀んで居られたらうと思ひます、其の御婦人は、紅葉先生の紅葉集を

お持ちでした。……」

二十八

爾時、學生は、頬の窪むばかり氣を入れて、私の顔を見て、身に沁むやうに襟を合せて、

「其の書物を見ましたものですから、差支へはなからうと思ひまして、貴方……貴方の名を其の御婦人に申しました……申しますと、……(あら、慶ちゃん)ツて、其の婦人の方が……」

「お、お澤さん、姉さん……」

と私は思はず、故郷の從姉の名を言つた。……ものに動すれば夕立の時とは違つた意味で、私は顔の色も變つたらう。……此の時の金子も、また違つた意味で、お澤さんが貢いでくれたもののやうにさへ思ふ。其の從姉は、葦原煎餅と稱ふる、温泉土産を賣る商人へ縁着いて居たのである。が、近頃旅藝人とか、行商人とか言ふ流れ渡りの旅の男と駢落したと風のたよりに聞いて居た。……(以上——除蟲菊。)

「ちよツ、馬鹿にして居るよ。何だい、馬鹿にして居るぢやないか。」

と築野が、聲とともに投出すと、志摩慶吉の校正刷は、棒消を啖つた十幾行のインキを赤く

翻してバラリと落ちた。

「何、……しと、人殺しは出来ないまでも盗みを……殺されて堪るものか。……盗みをするたツて、私ん許を目的にしたんだらう。姉の、あの意氣地なしが、何だつて餘所の屋が狙へるものかね。馬鹿にして居る……」

と甚しく痛癢を突張つて呟く聲が、應答のないのと、煽風機の風に掬はれる張合の無さに、膝を揉んで、朱鷺色に白い處を亂して焦れたが、はらりと立つて卓子臺を向うへ廻ると、ぎいと煽風機を邪険に捻りあげて、其の手で強雲の斜違ひに寝た肩を敲いた。

「一寸、馬鹿にしてゐるつて言つてゐるぢやないの、眞個に……」

「むむむ、いや、然う言ふ譯ではないのぢやが、熱心の餘り虚空藏菩薩の夢を見たい。」と股まで毛だらけなのが起上る。

「いゝえさ、提灯屋の書いたものなんか、讀むうちに寝なすつたのは、本望だけれどもさ。」

と言ひ掛けて、築野は、聊か自分にも見當の着かないやうな目をしたが、

「くだらない身の上話の中へ持つて行つて、私の姉の事が書いてあるぢやあないの。」

「愚にもつかん所謂モデルとか云ふ奴ぢや。……此は失禮ぢやつたかね。貴女の姉さんは、いゝ婦ぢやと言ふ話しぢやね。」

「は、然やうでございますとも、見せたいわ。汚れ腐つた白禪でさ。汗だらけの單衣を引張つて、フンベこくく三味線……門附の風ツたらないぢやあないの、面汚し……それ、先生にも何時か話したぢやありませんか。いゝ年をして、藝妓もした癖に、色氣を今知つたやうに、旅廻りの淨瑠璃屋だか、でろれん語だか、わけの分らない十年も年下の若藏と駈落をして、駈落もいゝけれども、不義をしたんだから、他國へ遁げたつて、門附も出来やしない。——亭主の煎餅屋は見掛け次第、斬るの突くの、繪にするのつて血眼でせう。そら……若藏の在所だとか言ふ、播州姫路の木賃宿の鼠の巢に潛つて、裸體で震へて居た處を、私が行つて濱へ連れて來てさ——姉ばかりかと思ふと、芋の蔓に繋るやうに、瓢箪野郎が附着いて來てさ。仕方がないから、追廻しに使つて、風呂でも焚かせようと思ふと、お澤の奴が——姉の名ですよ——お汁は實澤山な熱い處を裝つて、朝から野郎のお給仕をするんでせう。寢床の上下しはもとより、内の老夫さんの肩一つ叩きませうとも言はなけりや、私の脱放しは振返りもしない癖に、野郎の禪まで洗濯をするんぢやないの。若旦那扱ですもの。——今日、たとひ遊藝でも、人の師匠として、お嬢さん、奥さん方、立派な紳士たちの出入をなさる家として、物置にも納屋にも置けたもんですか。」

「お師匠さん。」

りや、着たものも段々薄く成るぢやありませんか。下つた色戀だから、竹の子の皮が草履に成るやうなものだわね。しまひにや木賃にも困つて、南京町の出端れの日溜の小屋店で、擬ひもの何首烏と、臘臍の解き賣をする世間師の店へ割込んで變な繪葉がきを賣つてるんだもの。それでもまだ腐れ縁が繋つて、お澤の湯歸りの遅いのを見せに遣ると、其の小店へ納まつて、湯上りの薄化粧で、寢衣に浴衣なんか重ねたまゝで、煙草を吸つてたぢやありませんか。男手も、借りましたさ、老夫さんの威光で、私が出掛けて、たぶさを擱んで引摺るやうにして、連れて歸つて、彌と成つたら電報で蘆原の煎餅屋利平を呼ぶと言つたのにな、姉の奴、ぐうもすうも出やしない。少し辛抱を見届けた處で、野郎が近廻りに居ちやあ煩いから、幸ひ私のお弟子筋に、生麥に別荘があつて、留守番を欲いと言ふのがあつたもんだから、上下、それでもおさすりものでも、姉にお召の一枚も引張らせて、其の留守番に嵌込んだと、お思ひなさい。——暑く成つて、夜が來ると、季はづれの木兎のやうに、別荘の門も木戸も開放したまゝ、飛出して行方知れずさ。……此方や線路や六郷の水溜りを搜したもの——何うだらう、門附狀に成下つて、……何だ、八ツ山下の端蕎麥で、焼海苔で一合で、美術學校の生徒をつかまへて、(まあ御一獻。)もないもんだ。提灯屋も提灯屋だ、何の狀だい……」

「尤も、蘆原の煎餅屋の亭主の方は——老夫さんがまだ達者のうちだつたものだから、ごぼりごぼり咳きながら遙々出向いて……きれいに手を切つて來てくれたんですがね。其かつて金子ですよ。金子ばかりぢやあない。其の劍幕なんでも、老夫さんが以前、煎餅屋の主筋だつたからこそですよ、え、先生。……それから思ひ附いたつて譯でもないけれど、年紀下の其の野郎は、——いまは落魄れたけれども、もと姉がお世話に成つた、お主の若旦那で、それを貢ぐために、姉が苦勞するんだと……しみたれた風體で居るもんだから、世間體は忠義ゆゑと云ふ事にして、横濱の家に置いたんですがね、何分にも先刻お話ししたやうに、野郎の禪を洗濯する始末ですもの。誰が見たつて様子が色に顯れますものね。——見つともないから姉に因果を含めて、野郎を敲き出してしましたさ。こゝで魂を入替て眞人間にお成りなさいと、姉に煙草も酒も止めさせて、まあね、しつけかたぐ、それで、料簡を鍛へ直して、眞人間に成つたら、……濱も彼處等人氣が悪くて、下駄泥坊が多いから、お弟子たちの下足の番でもさせて置いて、其のうち資産家の隠居の目にも留つたら、財産すぐ分配の介抱人に世話でもして、私の片腕にもしようと思つたのに、何うでせう、野郎は近所の木賃宿にかくまつて居て、毎晩のやうに、裏木戸の雨垂ほどに敲いちやあ、氣障な、犬芝居の治兵衛が頬被りしたやうな風をして、三國(越前)の小春を剥ぎに來る、……煙草錢だ、湯錢だと、下へ着たものから脱がせるんだもの。……姉は瘦せもす

「……御主人様も。」

「御免下さいまし。」

と隣室の女優が、一行の中から、二人お弟子がついて顔を出した。

「……あの、此から歸ります事に成りました。失禮いたします。晩には、琵琶のお催しがありま
すさうで……是非うかゞひたいと存じましたのに、初日を控へて居りますので、思ふやうにも成
りません、まことに残念でございます。」と、人氣稼業で如才はなかつた。

「いや、まだ、其の、今夜とは極らんですでなあ。」

「は、でも、お山のお役僧方に伺ました、皆さんは揃つて今晚……」

「あゝ、飯か。」と喚くと、ぐらぐらの欄干にもたれて、餘程寢込んで居たと見える、熊澤が猛然
と目を覺した。が、つい鼻の前の、きらびやかな女優鬘に、一驚を吃して、慌てて立上るのがよ
ろけ狀に、裏階子へ一段低くなる横廊下へ踵を外して、板敷へ、どしん、づん、起上つて又這
つた。凄じいものの音。

三十

「おや、太夫様、只今御歸山でござりますか。」

「お媼さん、遅く成りましたこと。」

身延本寺の見上げるやうな山門に、あの雲に乗る石段は、日本國中、幾ヶ處と數ふるばかり切
立に嶮く聳えて、遍路の道者、千ヶ寺詣などは、此處を眞直ぐに攀ぢた事を旅日記の誇とする。

……眞下は展けて、花園の風情して、瀧を揺るやうな流が縦横に走るのに、朱欄の反橋、擬寶珠
の石の橋、苔蒸す小さな土橋も架る。……此の小さな橋の際に、あるが中に行燈の佗しい姥の休
茶屋へ、優しい手に、數珠を爪繰りながら立掛つた、太夫と呼ばれた旅の婦がある。

此は、高檜を巖に削つて組んだやうな、其の石段を下りて來たのではない。女坂と稱ふる、密
樹鬱林の中を、鷺の翼で、白く傳ふやうに、見え隠れて、こゝに下山したのであつた。

あとを送るが如く、梢風の夜風が颯と袖を吹く。……

「あゝ、涼しいこと。」

と淺く床几に腰を掛けた。吾妻下駄は曲んだが、爪はづれはきよらかである。

「嗚ぞお草臥れでござりませう。」

「いゝえ、お祖師様のお庇でせうね、些とも草臥れはしませんでした。——其ですが思つたより
か、お山は星ほど高いんですね。」

と霞簀越に、石段を仰ぎながら、頂いて、數珠を縋子の帯に挟んだが、その手で扇子を抜いた

と思ふと、

「涼しいのに……」

と莞爾して、

「お媼さん、では、あのお預け申して置きました……」

「はい、お持ちもの、もうお立ちでござりますか。まあ、御緩りなさりまして……お、く、眞に、此からが御稼業でござりますよの。」

と、旅の法界屋が着さうな古笠、三味線一挺、ならびに風呂敷包の眞中を眞田の打紐で結へたのを、揃へて、駄菓子棚の裏から、殆ど星明りに持出した。

「何とも、お茶代を、此はまあ。」

「お恥しいんです。」

「はあ、澤山に。」

「此處から、御免を蒙りますよ。」

包をつけて、笠を被つた。うら透く面はほの白い。三味線を袖にとると、褌が緊つて、すつと立つ。

爪尖下りの門前に、水晶屋の硝子の光、茶店旅籠の店燈、浴衣の影の賑ふ人立、月夜に祭禮を

見るやうな、山の麓の世の有状を、窺れた頬にもすつきりした、顔を深く笠で透して、

「大層賑ぢやありませんか。あ、御本山の麓ですねえ。」

「へい、太夫様。……今晚はまた格別なのでござりますよの。……一體は、もし、此の月は、一年中ほんに御参詣の少い時でござりますで、こんな事は珍しうござりますよ。それと申しますのが、其處な東館に逗留をなさります。東京からござらした、偉い琵琶のお師匠様が、お祖師様の、一代記を語らしやりますについて、御本山から、御身柄のお上人様方が多勢お下りでござりまして、よの。」

「あ、道理こそ、上ります時行逢ひました。お星様の光で、森の蔭で、緋や紫の生絹の姿の御出家方。道は狭し、此の汗臭いのが(と肩をすぼめて)金欄の御袈裟に觸りさうで、勿體ないとは思ひながら、まことに其は難有くつて、嬉しい事だと思ひました。」

「お、ほんに、丁ど貴僧方の御くだりは、其の刻限でござりましたよの。」

「まつたく極樂を見るやうでした。」

と笠の中に頷きながら、
「しかし、苦界が、悟れませんか。お媼さん——もう其處等から稼ぎますよ。」
澤山御利益を受けさつしやりませ。」

「時鳥や、猿の聲は、お媼さん、お馴染だらうけれど、濟みませんねえ。もう直に御近所で、狼の聲が聞えませうよ。」

三十一

「あれ、」

「……………」

「あ、誰方！」

三味線を袖に抱いた旅の女は、いきなり路傍の棒杭の蔭から、野獸の如く顯れて、背後狀に肩を抱いた小肥りの膏ぎつた男を見た。

場所は、此の晝間、歌舞之菩薩の記者が、炎天に眞桑瓜を剥いた葎簧張を、もつと渡船場の方へ本山に離れた、巖山の裾に添った暖である。初夜過ぎた、二十日前後の月影に……

水の流れはさらさらと走るが、むかし物語に聞く大きな山蟹には足が少い、籠が出さうな澤でなし、狐狸の化けたのにしては些と當世過ぎよう。緋の紺も薄月で、セルの袴を穿いて居る。抱き着く拍子に、ポカんと麥藁帽を地に落したのを其のまゝに、面を肩に伏せて、喘ぎに喘ぎ呼吸は、ハツ／＼と短い、髪が長い、之が鬘だと、杉の木立を狂ひ出た先刻の馬に似るのである。

鳴き残つた蛙の聲も留まない處を、いきなり抱きつかれたのであるから、はじめは一寸氣を打つたらしかつた。が、袖も振らなければ、褌も亂さず、眠つた驚が其まゝ覺めたやうに振向いた。胸に取つた三味線の胴で、頬を枕にする風情で、笠くるみなよやかに、

「巡查さん……あの、探偵さんですか。」

「……………」

「旅籠屋の番頭さんでなし、……それとも横濱からお伴をした書生さんなの？」

「……………」

「お放しなさい。」

とや、屹と言つた。けれども、振飛ばさうともしないで、尙もの靜に、

「私のした事が、私だつて事が、分つたんですね。ですがね、此處で擱へて、引張つて行つたつて詰りませんよ。……悪ければあやまるだけです。唯それだけで濟むんです。琵琶を語つて居たのは私の妹ですから。——私は、あの女の姉ですよ。」

と、しかし優しく言つた。

お澤である。——山門の中の茶店から、笠越に覗いたのは、賑の一端に過ぎない。東館は内も外も夥多しい人数であつた。二階は廣間を打通して、僧の好い衆たちの涼しく炫輝なほかは人を

拂つたが、縁には聴衆が溢れた。道者宿もする大圍爐裡を切つた下階は残らず開放したから、柱

のすく／＼と見える處へ、充滿に詰込んで、餘つたのは玄關前から軒下、往來に群がつて居た。

歌舞之菩薩社主催、強雲居士作、山端築野嬢彈奏。眞中に大字を以て、高祖御一代記六曲と、軒

に立看板を揚げたのは言ふまでもなからう。本山の麓で、祖師の一代記、美人なる琵琶の妙手が

弾じて、然も法樂と言ふのであるから、寝苦しい暑さの砌、人の集つたに不思議はない。

お澤の笠が、まだ濡れない夜露にも、早や旅に、しつとりと、人混の中を縫つた時は、其の何

曲目であつたか知らぬが、琵琶は叫び、聲は咽んで、高き其の大廣間に、出家たちの法衣の袖の

幾基か煽風機に煽る法の波に、築野の面は仰向に白く浮き、唇は赤く開いて、金齒が電燈に光つ

て居た。

其の一瞬間である。パツと電燈の一つが消えると、星の流るゝが如く礫が飛んだ。築野の面は、

首が切れたやうに、俯向いて、塗盆の如き廂髪と成つて、琵琶の音はハタと留まつた。礫は不思

議にも唇を切つたのであつた。

聴衆は其の途端に寂然となつて、崩るゝばかりの動搖を起した。また忽ち然ばかりの群集にせ

よ、二階三階にせよ。其の居士、其の女、其の琵琶にせよ、大なる自然の目より見る時は、山の

峽なる根に暗く生えた、唯色ある夜の菌である。輝ける電燈も、露に添ふ影に過ぎない。

ものの叶はぬ譬には、蜆貝で大海の水を干すと言ふ。……しかし、礫を飛して、變な音樂を留
るのは何でもない。

軽く手を舉げたばかりである。波木井川の流れ、音急にして、礫を投げたお澤の姿は、峰を出
づる半輪の月の影に送られつゝ、すでに、水のやうに、山路の低きに流れたのであつた。

三十二

「ねえ、分つたでせう、離して下さい。……分りませんか。あやまつても承知しないつたつて、
現在の姉を何う出来るもんですか。それですし、其琵琶を弾いてる處を、あんな無法な邪魔をし
たと云つて、御出家達なり、土地の方なりが、妹のために腹を立て下さるにした處で——私は
然うすりや妹に詫を言つて貰ひますよ、矢張り何うする事も出来ないでせう。」

とお澤の聲は柔かに、

「第一、こんな淺ましい、情ない態をして、人様の門に立つ——いゝえ、今夜は故と浮瑠璃所か、
流しの撥も入れないで、唯涼みながら、月を見ながら來ましたがね。——妹の、あの派手と人氣
を、猜んだんでも嫉んだんでも何でもないんです。ぢやらん、ぼろん、ウゝゝ、キヤアなんて、
何うだらう、田舎の葬式に牡丹餅が詰つて、氣絶けるやうな聲を出して、金齒を燦々、目を白黒

らる、お小遣をあげませう。あとへお引返しなすつても可し、たしか渡船場のあたりにも、お役に立ちさうなのが居たやうですよ。」

三十三

少時すると、月を流すやうな崖の上を、流れに影を揺がしつゝ、二人静に歩行て行く。……
「不思議な御縁と言へば御縁ですねえ。——慶ちゃんの事で、貴方が此地へおいでなすつて、私がお目に掛るんですもの——いゝえ、此方が氣樂です。妹と違ひましてね、あの慶吉は私が世話に成りたいと言へば、三膳の御飯は一膳分けてもくれませうし……(煙草を喫むな、酒をよせ)とは言ひますまい。閑があれば淺草などは案内して、お蕎麥の蒸籠ぐらゐるは御馳走もしてくれませうけれど、細君がありません。女房さんがね。いまはあの慶吉——に逢つた事も、見た事もなし……どんな氣の優しい人だつて、其の方に悪いわね、貴方門附の従姉ぢやあ。——遠慮をするのが世間の義理です。ですから音信不通で居ます。でも仲よしの慶ちゃんですから、私が其のうち、並木の肥料に成る時は、たとひどんなに離れて居ても、三味線草の夢ぐらゐるは見てくれませうし、私も見せます。」

と草にかくれる風情して、お澤が言つた。薄が茂つて、路が蜿つたのである。川は大きく、お澤の影に分れて流るゝ。
「感激しました。——お話を戻すですが、(歌舞之菩薩へ掲げられると成れば、提灯屋が忽ち繪馬描だ。……それだけでも出世ぢやあないか、原稿料が何だ)と言ふ意味の手紙を、志摩さんに突附けるやうに、と言つて、こゝに託つて居るんですが、既に木賃宿へ追放された際からしましてからに、再び社へは歸らない決心をして居るです。……自分に思ひ當ると同時に。でも私が志摩さんに向つて取つた手段は、餘りに侮辱し、輕蔑して、實に申譯のない氣がします。で、此の御令妹の手紙のかはりに、貴女のお供をして、無論、其の三味線も擔ぎます。荷物も背負ふです。甲州街道、東海道、御都合次第、徒歩をしても、東京へお送りしまして、貴女を志摩さんに逢はせる事で、幾分の償をしたいと思ひますが、如何でせうか。」

「一寸。」
お澤は月にそよぐ蘆に似て、細流を裾に立留つた。
「お安(築野の實名)の其の(提灯屋が繪馬だ。)とか言ひましたね。その手紙を私に下さい。そして、其のかはりにお託け申したい手紙を私が認めます。嘘にも一所に東京へ歩行いて行かうとお言ひなされる、お志しですから、今夜は此から私の塙へ来て下さい、尤も野宿なんです。其處で最う一つ、慶ちゃんの家へ行かない譯の、ものをお目に掛けませうね。其處には、私の汚れた胸

377

が、汚い腹が、狼に食残された死體のやうに成つて、轉がつて居ますから。——たしか今日の約束では、此の邊だと思ひますが。」

と笠を取つた月下の面影。露じとりして艶かな、おくれ毛をば拂つたが、

「あら、恥かしい月夜だこと。」

お澤は伸上るやうにして、「お、い。」

と呼んだ、聲が透る。……太子ヶ嶽と、富士川と、且つ高く、且つ鋭く、名と流の響くのみ、月の他には影もなき、夜中の身延街道である。聲を透すに遠慮はなかつた。

「お、い、お、い。」

唯、其の聲に誘はるゝ如く、螢が一點、ふはくと、前途から細流の上を來て、お澤の白い襟を照すと、驚いたやうに、ぴかりと光つて、スツと本山の方へ影を曳いて流れた。

志摩慶吉は蚊帳を掲げた。

本山の麓に、東館と軒を並べた、島屋と言ふ旅館の二階の廣間なのである。

志摩は、……恰も其の夜其處に宿つて居た。

一つ蚊帳には意氣な女、また男の連も、すやくと寝て居たが、慶吉一人、衣桁を探つて、帯

だけしめ直して、二階を下りた。

「寝られないから……歩行いて來ます。」

不寝の番に然う言つて、カラ／＼と大戸を開けて山へ出た。

三十四

志摩には、妙な經驗、と云ふと事業らしくなる。然うでない。それよりも、もつと、心靈的超自然的と云つたやうな記憶がある。嘗て湘南の海岸に、病を養つて、心細く三年を過した——其の二年目の秋の末から冬のはじめに掛けて、三崎街道ではあるけれど、時節柄とて、昨日も今日も旅客らしい影もなく、さびしい汐風の颯と吹く、土の侘しく乾いた砂道を、頭に小桶をのせた、脊の高い飴屋が、雨さへ降らねば、毎日のやうに、同じ方角から來て、同じ方角に、片輪車の風情して唯一人過つて行くのを見た。呼聲もなければ、謠も唄はない。腰を据ゑ、足を練つて、頭で梶を取つて黙つて行く。又さつと風が吹く。ばら／＼と落葉に交つて、木の實の轉がるやうな村の兒が、飴屋さんと呼んで集まると、「はアイ、はアイ。」丁寧に會釋をして、桶から飴を取つて莞爾して、また「はアイ、はアイ。」と優しく言つて嬉しさうに渡してきて練つて行く。——此を、屋根の破れた、欄干の曲つた二階の狭い縁から、瘦せた胸に日毎に聞いた。何となく涙ぐましく

もあれば、又慰められもしたのである。翌年もおなじ時節に、おなじ館屋が来て、その「はあい、はあい。」「はあい、はあい。」を繰返したのであつた。

深く心に沁みついたものと見える。其の後二年三年を過ぎて後、東京で、夜が寝られない、夜更けとさへ言へば、寢床の何處か……枕の底に——「とうい、とうい。」——と慫云つたやうな聲が聞える。神とも、鬼とも、分らない。微な、遙な聲である。——「とうい、とうい。」——長く餘韻を引いて、日を重ね、月を経るまゝに、一つの音律を形造つた。

(とうい、とうい、

とう、とう……い、とう、

とう、とう、——)

さびしい暗夜に、巖打つ浪が遙に響くやうでもあれば、月明き夜の、幽な馬士唄のやうにも聞える。(——寝られぬ夜半の想である——)然うかと思へば、古郷の越の三國に秋深うして、九頭龍川の川口を漕ぐ船頭の掛聲のやうでもあるし、稚い時、遠くから、友達の呼んだ事も思出す……と云ふ間に、床下に呟く慕にも擬へば、背戸の垣に鳴き残る蟋蟀かとも疑はれる。……忽ち氏神の森に、里神樂の餘波に成り、或は野三味の本杉に梟が呼ぶらしい。茸狩の山に、女の聲の訝するとも聞き取らるゝ。神のやうで、人のやうで、魔のやうで、冥土を呼びながら行く幽霊か

と可恐れれば、生れぬ前の世の唄のやうでたよりない。時としては、大川を隔てて戀人が呼ぶかと思ふ。身震をすることもあれば、耳を壓へる事もある。また、恍惚と引入られる。ふうはり雲に乗せられる。凄い處へ誘はれる氣もすれば、暗い處へ招かるゝ氣もする。確りと胸を抱へ、疲れて腕を投げもする。就中、まだ逢はぬ戀人があるやうで、心の時めく寢覺もある。——可懐く、床しく、寂しく、心細く、また戀しい。久しく、此の不思議な現象に逢着して、多日して思ひ當つたのが、湘南の館屋か……或は……詮するに、夜ごとに、秋は殊更に、枕に響いた浪の音であらう、と思ふのであつた。

(とうい、とうい、

とう、とう……い、とう、

とう、とう——)

——まだ睡眠には入らなかつた、が、ヒヤリとするまで、此の聲が、當夜、身延山の島屋旅館に、旅寝の志摩を驚かした。——

此の時は、すぐに女の聲に聞えた。それも古郷である。故郷の、遠い、薄青い蘆原の温泉の湯女の唄の響く、と思ふにつけて、あゝ、縁の絲は、宇宙なる、水と潮との如くに續く。……何處でか、遙に、何處でか、幽に、可懐い従姉のお澤が、渠を呼ぶやうに、身に沁みて、胸がうづい

た。

雖然、餘りに取留がない。

或は月の本山の高峰にて、御經讀誦の聲ならずや。波木井川、赤川の流れの音の合唱か、富士川の、あの渡船場に、渡船呼ぶ、それか、とも思つたが、——大戸を出でて、迫れる峽の中空に、半輪の月に問へば、其でもなく、此でもない。——矢張り道一筋。濃い影を曳いた、山裾の薄に立つて、

(おうい、おうい。……)

お澤の呼ぶやうに聞えたのである。

三十五

お澤が、呼んだのは——しかし自分で汚い腸だと云つた……其の怪しげな情夫であるのは云ふまでもない。……

處で、志摩が、こんな時分靈山の麓に来て居たのは、遙に故郷の水を偲んで、夜半の枕に、遠い聲を聞くにつけ、幼い時の従姉を可憐むと言つたやうな、殊勝な、可憐しい心掛からではなかつた。いつぞやの三ならび、さんくの、厄年以來の沸湯を、歌舞之菩薩社のために飲まされた。

憤激の餘り、賢人哲人でない作者の癖として、當の晩方、自棄酒を呷つた勢に乗じて銀座に泳出した足が、待合と言ふをかしな島へ流れ込むと、二階へ案内した女中が、まだお茶さへ持つて入替らない先に、澄して羅の裾を曳いて来て、葎簀越に微笑んだ、上品な年増の姐さんがあつた。呼ばうと思つのが、先方から顯れたのだから、嬉しがつて奇遇がると、何、不思議はない。志摩などとは違つて、ぐつと工面の可い、懇意な友だちで、よく此家で落合ひもすれば、誘ひ合つて一所に飲む、或銀行家が、宵から来て裏階子を一つ隔てた隣座敷に居たのであつた。

はじめ、志摩は申戯だと思つた。友の其銀行家が、此の十一時何分かの汽車で身延詣をすると言ふ。——尤も是よりさき、出發して、岩淵から富士川下をした一組の人数があつて、其には、土地の妓の誰彼が連立つて居るとの事。銀行家は用事の都合で、これから後を追つて、東海道から行合はうと言ふのである。奇遇次第だ、お連立ちなさい、是非にと言ふ。無論、餘り唐突で、志摩は行く氣はなかつたが、杯を受けた發機で、君が行くなら奮發しようか、と言つた——其の君たるや、友だちでなく、姐さんの事である。——實は評判の、もの靜な沈着家で、嘗て隣裏から火事の出た時、雨戸に火のついた中で、床の間の海棠の繪の掛物をはづして、涼しい顔して、冷紅泣露の粧を見ながら靜々と巻き納めた。餘り慌てたからではない、落着き澄したので、……泰山崩るゝと雖も自若として居る。其のかはり、お天氣が悪いと仲通の買ものにもうつかり出な

いと言ふのであるから、身延と成ると、一門一家評議の上、支度に少くとも一週間は掛る。必ず、膝にきちんと手を置いて断るに相違ない、と志摩は高を括つたのであつた。處が、何と、青簾に雪が降つた。つい近い頃、百ヶ日を濟した、魚がしとかの、世に亡い旦那なるものが法華宗で、病中は本復の願掛け、榎町のお祖師様へ日参もしたくらくらる、「身延さんへならば、すぐにお供をします。」とこそは申しけれ。で、退引成らない。此の勢に、私も行くわ、私だつて、とちよんきなが三人湧いて出た。其の勢に酒が廻つたため、一分おくれても間に合はぬ、汽車に乗りはぐれて、明方を待つて飲あかした。……餘りの暑さに、途中で沼津へ下りなどして、渡船を渡つたのが日暮方だから、島家へは九時を過ぎて着いたのであつた。

白い雲が、鷲のやうに山の端を覗くと、霧か、靄か、山道を包んで這つた。

志摩は既に總門を出て、山を降りて居る。流に送られ、涼しさに迎へられ、月につれつゝ道を行く。……我が魂の獨り歩行を視るやうに、氣も、うか／＼と漫であつた。

一度通つて来た道である。たど／＼しさは更がない。また家に居ては、此の山中も寝苦しい蒸暑さで、夜は更けたが、一軒屋でも、軒さへあれば、灯一つなき廂にも、月を稱ふる人聲が、瓜茄子の中を漏れた。

それも心強さに、霧の橋さへ二つまで長く渡つて、うか／＼と渡船場の方へ下りて行く。

(とうい、とうい、

とう、とう……い、とう、

とう、とう——)

あの、其の聲のする方へ——聲の聞えたと思ふ方へ——

川瀬の音が、颯と遠い山懐を裏へ離れて、峰の雲がすつと通る。……月は影を拭つて、靄が光つた。

彼はハツと立停つた。

耳についた其の聲を、こゝにひと聲、月に明かに、鷲の鳴く音に聞えたのか、熱と、靜に聞きすますと、歌書か、草紙か、經典か、婦の書を読む聲である。

三十六

「今一度見て参れの御意なき内、婢は心得て、他のお座敷を貰うて参るやう申遣はしましたれば少々、暇取れまする筈、おつつけ見えませうほどに、暫らく御辛抱遊ばしまし。なほ迎ひを遣はしましよ、と銚子を持ちて立ちけるが、頓て還りて、やう／＼只今見えましました。」——

こゝに崖暗く、水細く、夏草の露に茂れる裡に、月は雨の雫に似て、杉の葉を漏れつゝ、はらはらと降りかゝる、古び破れた一張の天幕の下に、紅葉先生の名著の一篇、三人妻の一章を正しく朗かに讀むのである。

といま明かに聞取るまで、志摩は遠くから、聲をしるべに、案内知らぬ巖の根の、水を踏み、草を分けて、やがて近づくまゝに、登音を忍んで、ひたと天幕に摺寄つたが——彼のアラビヤの物語にありと云ふ、波斯灣を乗つたる婦人が、名も知らぬ國に迷ひ入つて、太陽と月の他は、あらゆる人も獣も石に化したる大宮殿の奥に、一人高らかに高蘭經を讀む聲を聞いたと云ふ——其の光景をさへ思浮べた。

麻布の濕つばい、羽目を密と覗くと、暗い提灯が置いてある。たゞし、その灯は、届くまい。ものに腰掛けた態に、見すばらしい旅の女の手にしたは、見覚えのある一冊だが、誦讀し得と察しられる。男が二人、却つて灯に近く、狭い處に附着いて聞いて居た。

「……座にも着かせず一嘲弄して、其舌戦の模様を、御前の御肴に、と山瀬は酒に舌を濕して待つ處へ、才藏畫間からの無理酒に傷みて、歩行ふらくと亂次なき態度、海棠したゝか雨を帯びて、春色今を閑なる姿……」

天幕にとまつた三つ五つ、螢の火の、露の眞珠に、明滅するのが、婦の聲と呼吸を合せて、き

らきらと清く句讀を切つた。

志摩は頭を下げて、文章の威徳に思はず草に手をついた。

霧の包んだ月の、天幕は薄雲を束ねたる大白象にも似るのである。

「や、何うも好いすな。これで見ると、小説も、實に面白いものですな。」

「私もな、毎晩のやうに……恚うやつて讀んでもろて聞くのんが何よりの楽しみでな、娑婆も地獄も何も思やしまへん。」と一人が言つた。

「東京へ歸るのも最うやめです。貴下方と一所に放浪して、天幕でも擔ぎますか。今の續をもう少し願ひたいです。」

二日三日續いて聞いた、不快なりし聲が、油蟬の如く耳について覚えがある。——志摩が怪しんで、さし覗くと、其の一人は歌舞之菩薩の記者である。

呆然として夢かと思つた。

「お才さんの綺麗な處です。……蠟燭を明るくしませう。」

然う言つて、提灯を、白い手でスツと疊むと、裸火が、草の露にパツと一團の螢を集めたやうに青い。

目許よ、眉よ、唇よ。

飛ぶやうに後へ退つて、

「お澤さん。」

「……………」

「姉さん。」

と、琵琶を立てて、衝と寄つた。

「志摩です。」

と言つた、天幕の口は、大なる佛壇を覗く心地がした。

一目視て、

「あら、慶ちゃん。」

同時に揺騒ぐ兩個の男に、ちろ／＼と煽つて消えさうな蠟燭を、片膝支いて、手で圍つた。透かせば峰に星一つ、月は高く天幕の上の眞空にある。

三十七

「何故……貴方は、慶ちゃん、そんなに気が弱いですえ。——先刻からも聞いたんですけれど——それだから琵琶師なんか、提灯屋が繪馬描に出世だなんて言はれるんです。貴方は、何

だつて、其の雑誌の人が……いゝえ、大丈夫、寝て居ます。」

とお澤が言つた。言葉も心も、此の二人ばかりの話に成ると、三人妻の面白さに、幼児のやうに成つて眠い目を睜つて居た熊澤も、はんけち賣（これは説明に及ぶまい）も、ぼろ毛布を引張合つて、肩を合せて轉げたのであつた。

「……覺めて居ても構ひません。——今では慶ちゃんに濟まなかつたと言つておいでなんだから。ですが、其の人が、もしか、自分の言ふ事を貴方が肯いてくれないと、（すぐに雑誌社を追出されて、身が立ち行かなくなる、せつかく學問をしに出て来た東京にも居られなくなる。）と言はれた時に、何故判然と、（自分の仕事にはかへられない）と言つて、ちやんと撥ねつけないのです。……もしその上にも、命にかゝはる、死ぬと言はれたら何うするんですえ。婦だつたら何とします。あなたのやうだと、嫌な男に、——言ふ事を肯いてくれないければ死ぬ、——と言つて口説かれた時、斷りやうがないぢやありませんか。私は可厭だ、斷ります。それだつて、たゞ操を棄てるだけの事です。身體がなくなりもしないけれども、嫌な奴には、御隨意にお死になさいと然う言ひます。……それとも貴方、慶ちゃんは、どんな婦でも、死ぬ、と言へば、靡くと思つて居なさいますか。」

慶吉は、現に、島屋の一つ蚊帳に、七年越九年越、戀の届かないのが、すや／＼寝て居る事を

思ふとともに、冷い汗をたら／＼と流した。

「貴方のお仕事は、それだと……たゞ女の身體ほどにもないやうになるではありませんか。いたづら事をするんだつて」

大な馬蠅が来て、はんげち賣の額に留つたので、蒼い、膏じみた鼻が獅噛むと、お澤は扇子で、ハツと拂つて遣つた。草の葉に、其の扇子を蹴して、紅葉集を据ゑながら、

「お話にはなりません、姦通をして逃げたんだつて、對手も私も生命がけですよ。貴方は立派なお仕事をして居ながら、人間一人の生命なんか、何に遠慮をするんです。一派一藝の遊藝の師匠だつて、弟子が不埒を働けば、たとひ其の爲に身が立たなくつて死んだつて、勘當もする、破門もします。斬つて棄でると同一です。それなのに、貴方、慶ちやんは……」

「母の、母の言葉とも思ひます。」

志摩は、更に草むらに面を伏せた。

「申譯がありません。——自信がないからで、決して怠つては居りません。……一生懸命には行つて居ますが、我身を庇ふために、小説の作のために、人が社を追れると云ふのさへ、半分は嘘と知つても突離す事が出来ません、まして、生命にかゝはるなんぞ。——いや、しかし未熟だからです、修行が足りないのです。」

「修行をなさいよ。」

「はい。」

「慶ちやん。」

と手を取つた、故郷の北の海なる霞の暗夜に、私に抱かれて寝た時の、屏風を覗いた客の影を、海坊主だと可恐がつた……あの優しい顔、弱い兒が、お澤の胸にいま響くと、瀧を落して間近くなる、富士川の鋭き瀨波の音。

激しい世間に苦勞する、肩を抱いて、乳柔く引しめて、

「瘦せたのねえ。」

「貴女も。」

と二十年ぶりの徒姉の情に、本能も、煩惱も、小兒になり、愚に返る。

「……お身體をだいにさいよ。」

「あゝ、貴女も。」

馬も鳥もまだ見えぬ。山かつらの東雲に、靄の下を波の走る、富士川の渡船場口、志摩が送れば、送られて。——おい、来た、と男二人は、天幕を擔いで元氣に續いた。

船頭はまだ影も見せぬ。